

付章 (資料編)

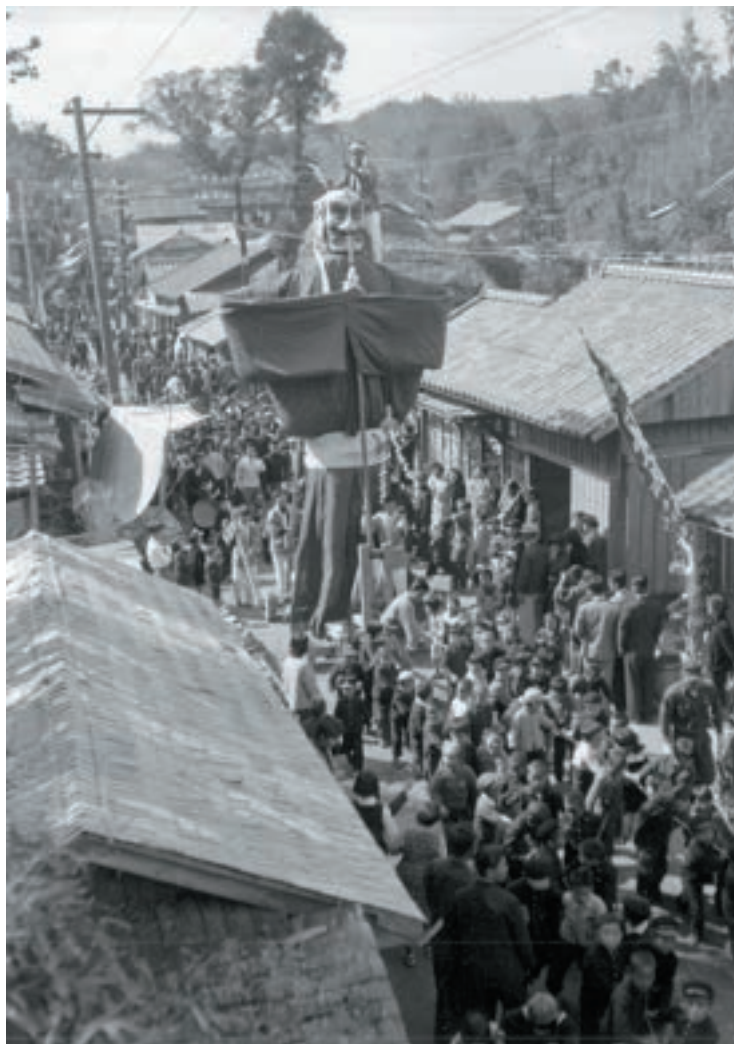
第一節 古写真等

第二節 文献資料等

第三節 新聞記事

第四節 弥五郎どん測量図

第五節 略年表



大隅町制施行後初の弥五郎どん祭り（昭和30年11月5日・南日本新聞社提供）

(大正～昭和初期)



大正 13 年の弥五郎どん祭り
 向かって左側の武者姿の少年は山口長俊氏（後にブラジルへ移住）で、当時は 13 歳の元服式を兼ねていた

付章（資料編）
 第一節 古写真等



昭和 8 年



昭和 9 年



昭和 5 年



昭和 12 年②



昭和 12 年①



昭和 11 年



昭和 15 年



昭和 14 年



昭和 13 年



昭和 18 年②



昭和 18 年①



昭和 17 年

(戦後～昭和後期)



昭和 21 年 (GHQ の政策により刀が取り上げられた)



昭和 20 年 (終戦直後も祭りを実施した)



昭和 24 年



昭和 22 年



昭和 26 年



昭和 25 年 (この年まで帯刀していない)



昭和30年頃の本町通り
(右は現在の衣料の京屋・左は国合庁公園あたり)



昭和28年頃の浜下り (右肩に人が乗っている)



昭和30年



昭和29年



昭和26～30年頃
(台車が通常と異なる。191ページ参照)



昭和35年



昭和34年



昭和33年



昭和 31 ~ 32 年頃 鳥居下
(長い棒を使い方向転換している)



昭和 31 ~ 32 年頃の浜下り
(階段にシラスを入れ車道を確認している)



昭和 31 ~ 32 年頃 神社へ
(左の建物は、移転前の大隅町役場)



昭和 31 ~ 32 年頃 浜下り



昭和44年7月28日夏祭り市中パレード
(万国博覧会出展用の弥五郎どん)



昭和30年代



昭和44年7月28日夏祭り(現大隅建機付近)
(九州電工の作業員が電線を外す作業をしている)



昭和41～44年頃



昭和45年 神牟礼太鼓踊りと弥五郎どん(岩川小学校校庭)



昭和44年万国博覧会出展用集合写真



昭和 52 年大阪国立民族学博物館出展用組み立て風景 (大隅町商工会敷地内にて 現ハローワーク大隅)



展示用の本体 (木製台車の頃は本体の脚が長い)



展示用の本体



古面と国立民族学博物館展示用面



展示用の台車



弥五郎どんの浜下り（昭和44年以前）



昭和62年11月3日 雨の中の浜下り



昭和45年以降（台車変更）



昭和 50 年 11 月 3 日 この頃は女子も浜下りに参加していた



塗り直す前の弥五郎面（平成 2 年以前）



昭和 46 年 11 月 5 日岩川小校庭

(平成期)



平成2年11月3日弥五郎どん祭り
(浜下り神事)



平成4年世界巨人博 (スペインバルセロナ)



平成7年11月3日大隅町中央公民館入口



平成7年11月3日巡行行列



平成7年11月3日巡行行列



平成7年11月3日御旅所神事



平成7年11月3日御神輿と宮仕



平成 13 年 雨の中の浜下り



平成 13 年 4 月 22 日 弥五郎伝説の里での 3 体揃い踏み



平成 24 年 10 月 29 日 宮崎神宮大祭
「神武さま」での 3 体揃い踏み



平成 16 年 11 月 3 日 弥五郎どん祭り
弥五郎太鼓奉納



平成 22 年 弥五郎どん



玄界エネルギーパークの
弥五郎どん (平成 28 年撮影)



名代弥五郎どん (大隅文化会館)



平成 30 年の弥五郎どん

平成 16 年の弥五郎どん本体

昭和61年（1986）祭りのチラシ（曾於市商工会大隅支所保管で一番古いチラシ）

令和4年（2022）祭りのチラシ

第二節 文献資料等

霧藩名勝考（鹿児島県史料）

○八幡宮（八幡宮、末吉郷岩川といふにあり）

此祭に、十月五日濱下りの時、大竹籠を編て大人の立像を作り、大人弥五郎殿と称す、其長一丈六尺七寸、圍九尺也、頭面に冠を着せ、木綿拾三反二而梅染の単衣を製着す、又太刀大小を佩し、大なる荷包を提げ、手に矛を持てる像にて、村中を輓行く、里俗武内宿祢と申傳ふといふ、按に、大人弥五郎八隼人記に據れハ、火闌降命の子孫なり、

（鹿児島県維新史料編さん所編 昭和57年刊）

三国名勝図会（第三卷）

八幡宮（地頭館より方二里餘） 中島村にあり、万寿二年、城州岩清水八幡宮を、隅州

岩川（岩川は、当邑馬場村・菅牟田村・飯田村・梶ヶ野村・土成村・田尻村・中島村・有持村の総名なり、俗に馬場・菅牟田・飯田の三村を併せて、五十町村と稱し、梶ヶ野・土成・田尻の三村を併て、中之内村と稱し、中島・有持の二村を併て岩崎村と稱す）

勸請せしに、其後兵乱の時、当社の寶品等を賊徒に奪はれて、衰廢せしを、天文四年、檀越藤原重忠、当地頭伴兼豊、造立せるの棟札あり、祭祀十月五日、其日華表より一町許距れる処に、濱下の式あり、大人の形を造て先払とす、身の長け一丈六尺、梅染単衣を着て、刀大小を佩び、四輪車の上に立つ、此人形は、土人伝へて、大人彌五郎といひ、又武内宿禰なりといふ、

（青潮社 昭和57年刊）

薩隅日地理纂考（鹿児島県史料集 第24集 新修舊鹿児島藩領国・郡・郷・村・浦・町附 下巻）

○八幡神社 万寿二年山城国岩清水八幡宮ヲ創建ストイフ兵乱ノ時賊徒

神寶等ヲ奪ヒ且多年社殿衰頽セシヲ天文年中肝付氏再興セシトイフ棟札ニ天文四年檀越藤原重忠当地頭伴兼豊造立トアリ例祭十月五日ナリ此日華表ヨリ一町許ノ所ニ神輿濱下ニ式アリ大人ノ形ヲ造リテ先払トス身ノ長一丈六尺梅染ノ単衣ヲ着大小刀ヲ佩ヒテ四輪車ノ上ニ立ツ土人は大人彌五郎ト稱フ或ハ武内宿禰ナリトモ云

（鹿児島県立図書館 昭和57年刊）

安永六年酉 五拾町村・中之内村 山野見懸日帳（山口文書）

（前略）

一 書状尅通 甚五右衛門殿、仲兵衛殿より、

右此方兩人江 お民様御病氣ニ付、忝人罷歸候様、問合申来候、

十月四日之日付、篠原三右衛門持越候、

一 書状尅通 十月三日付

右藤嶋幸右衛門様より兩名跡下り候御返書、

一 書状式通

右源右衛門 休席殿より被遣候、

十月五日 曇

一 今日、祭礼ニ而、見懸方休ニ而候、

一 今九ツ後、鹿児島より飛脚として下使休市、御藏元迄參候由ニ而、

菅牟田より坂元門藤左衛門江蓑田郷右衛門殿□□手紙持□被□候、お

民様御事、猶々御大切ニ被遊御座候而、兩人共ニ罷歸候様申来候由、

最勝寺甚五衛門殿、大津仲兵衛殿□之間合茂被遣候ニ付、則竹山ニ而

人馬申渡候得共、急ニ埒明かね、八ツ後ニ而も候哉、下使七郎召列罷

歸候、狩谷ニ而夜入候故、致夕食、福山坂上ニ而、又候下□□足輕□

□□より被差越、御□……………□致馬次、□府川渡候而、押付、夜明

九ツ前、致候段申来候、夫より福山□□……………(後略)

(大隅郷土館所蔵)

神社誌(下巻)

隅州曾於郡五十町村

祠官 黒岩石見

八幡宮薩城ヨリ
十六里

代宮司 同姓平右衛門

祭神 岩清水二同

神躰

祭祀二月中卯御供十七膳神酒一双押餅山芋柿トコロ十月四日同五日

祭礼御供十七膳神酒一双司噺

一 祭米六斗 伊勢兵部殿ヨリ毎年出米

右神社八万寿二年岩崎氏勸請古老伝曰当社ハ山州岩清水八幡宮ヲ万寿

二年ニ勸請岩崎氏黒岩氏ノ両家正璽并本地負下于時中古乱逆ノ時強

盗ノ族神戸ヲ破本地正体宝器等悉偷取其後十二年当社ノ別当快宥ニケ

名観化ヲ集延宝二年申寅之年上京岩清水ニ参詣由意ヲ聞伝至京師如

来刻彫御正体四面守下開眼供養シテ奉崇云々此事棟札ニモ配置也

一 当社之神事ニ大人弥五郎トテ強勢ノ首人アリ其長四尋車ニ乗テ川辺

ニ出テ祭ノ式アリ熊襲ノ裔孫ナリ委クハ敷根ノ剣大明神社記ニ詳也

弥五郎帶刀長九尺五寸脇差長七尺五寸

一 御殿四敷三間 小板葺 南向

上屋六敷四間 高二丈四尺 茅葺

一 舞殿四敷三間 茅葺

一 拝殿四敷三間 拝壇有 茅葺 天井有

一 随神社二尺五寸方 小板葺

一 御供所四敷三間 茅葺

一 鳥居木高二丈三尺 向拝迄十入間階四十五

一 社地平地四方山寄豎横百間

神社明細帳

嚙啖郡岩川町五拾町五千七百四十五番ノ二

郷社 八幡神社

一 祭神 応神天皇、神功皇后、玉依姫、仲哀天皇、武内宿祢

合祀 天照大神、保食神、伊邪那岐命

一 由緒 創建年代不詳

明治四十三年四月十六日指令甲一第一一七一七郷同第一五一八

合同第一五一九号第一五二〇号同第一五二二号ヲ以テ同村々

社伊勢神社無格社藤原神社同笠祇神社同宇佐神社同保食神社

ヲ本社ヘ合祀許可同年廿六日指令甲一第一五二二号ヲ以テ同

村無格社熊野神社ヲ本社ヘ合祀許可

本社ハ右来岩川町中之内字河崎九千五百五十八番イ式反六畝四

歩官有地ニ鎮座ノ処境内地ハ河川ニ沿ヒ出水ノ際危険ノ虞ア

ルヲ以テ現在境外所有地ヲ官有神社敷地ヘ上地ノ上移転願出

大正二年十二月廿二日指令甲鹿第三六四七号ヲ以テ許可大正

三年九月一日移転済届出

一 社殿 本殿、幣殿、拝殿

一 境内 式反七畝五歩 官有地

一 氏子 千戸

一 管轄庁迄距離 十五里五丁

(鹿兒島神職会 昭和10年刊)

大隅鹿兒島神社舊記寫

御神事之拔書

(前略)

八月十五日 放生大會祭御神樂

人皇十二代景行天皇ノ御代大隅國隼人ト云者不隨王命ニ大力勇功ノ者ニテ及ニ一族等數千人ニ天皇日本武命ヲ副將ト而隅州ノ宮ニ下リ以ニ官軍ヲ雖ニ責給ト不ニ終ニ降ニ而官軍失レ利天皇隅洲ニ御滞留及ニ數年ニ終ニハ隼人被レ討畢此隼人カ神靈世上ニ崇リ給ウノ間此神靈ヲ宥メ祓カ爲ノ御神事也

一本ニ日火闇降命又號ニ隼人命ト此神ノ後胤日向大隅薩摩ニ繁榮ス此隼人等始者背ニ王命ニ後者服ス依レ之此ニ州ヨリ上ル者ヲ唱ニ隼人ト仁皇四十四代元正天皇御宇養老四年大隅日向ノ隼人等起レ亂依勅命ニ豊前守宇努首男入レ將軍ト而率シ神軍ヲ行ニ彼國ニ祈ニ八幡大神ヲ討レ是數多ノ隼人落レ命ニ此時依ニ大神宮御託ニ放生大會ヲ而隼人等カ敵心ヲ可レ拔ト也依レ是諸國ニ放生會此時ヨリ始ルト有り

如レ此舊記ニ見エタリ此事都方ニハ是ヨリ始タルヘキカ當宮ニハ景行帝ノ御時火ノ國ノ球摩田彦命不レ隨ニ王命ニ間日本武命ヲ副將トシテ下リ給ヒ賜レ令レ討ニ球摩田彦ヲ夫ヨリ大隅國ノ隼人ヲ攻玉フニ此隼人大力勇功ノ大人ニテ其形如レ鬼此隼人後者己カ住居スル上井城ニ引籠テ官軍攻近ケ者大石大木ヲ落シカケ官軍每度利ヲ失フ依レ是天皇數年隅州ニ御滞在ト云リ天皇隼人ヲ爲レ討ニ八幡大神ニ祈而橋ノ上ニテ御神樂ヲ奏玉ヘハ大人彌五良忽然ト顯レ來リテ此神樂ヲ聞其時ニ大穴持殿ニノ宮殿刃殿韋國殿戸神殿此五神顯レ出カラメ玉ヘハ日本武命隼人ヲハ討給ヒ畢此鋒ヲ崇ニ早風殿ニ御正躰日本武命也則是熱田大明神也隼人討玉フ所ヲ拍子橋トテ今唱也此大人彌五良世上ニ崇リ玉フノ間日州ニ隅州彌五良殿祭リ其數キ多也日州摩戸野八幡ハ彌五良殿也此神者人王四十三代元明帝和銅元年ニ建立ト云リ又

當宮ニモ大人退治大ノ祭リトテ有令レ執ニ行於野口ニ是モ彌五良也養老四年ノ隼人ノ祭リ當國ニテ其例ヲ不レ聞此大人者上ノ井城ニ住玉フノ間此人ノ住シ玉ケルトテ岩ノ肝脇ヲ大ク討ホカシタル舊跡有り

(後略)

(紀元式千六百年鹿兒島縣奉祝會 昭和14年刊)

青山日誌 (該部分のみ抜粹)

大正六年十一月五日 晴 月

下女朝仕事へ谷頭ノ稲干終テ 矢五郎市ニ行ク

大正七年十一月五日 雨曇 火

下男畦畔ヌリ 午後矢五郎殿市ニ行ク

大正八年十一月五日 晴 水

下男女九時迄田刈 夫レヨリ弥五郎市へ行

大正九年十一月五日 晴曇 金

実光飯キリへ草コバメヨリ矢五郎市へ

大正十一年十一月五日 晴 日

弥五郎殿参リ都城沖水村富松良助夫婦へ面会

大正十二年十一月五日 曇晴 月

岩川市へ出張

大正十三年十一月五日 晴 水

弥五郎殿見ニ行ク

(個人蔵)

澤貫一日記(該当部分のみ抜粋)

昭和八年十一月五日 雨天 涼

朝来ノ雨降りニテ終日止マズ夜ニ入りテヨリ漸ヤク止ミタリ、本日ハ方祭ニテ八幡神社ノ例祭ナリシモ雨ノ為メ矢五郎殿モ建テラレズ人出モ少ナシ誠ニ寂シキ祭日ナリキ、写真ハ内デ小二枚ヲ写シタルノミナリキ、(後略)

昭和八年十一月六日 曇天 涼

朝来ノ曇天ナリシモ降りモセズ風少々吹キタルモ後チ静カニナリタリ、本日ハ學校ノ運動會ニテ彌五郎殿モ校庭マデ下ラレ祭典アリ朝ヨリ人出多ク賑ヤカナリキ、午前一時行キ又タ十二時過ギ行キテ三時半ニ歸リタリ彌五郎殿外ニ枚ヲ写シタリ、(後略)

昭和九年十一月五日 晴天 暖

朝来ノ晴天ニテ暖カキ終日ナリキ、本日は方祭ニテ彌五郎殿祭モ賑ハヒタリ、八幡ニテハ小判ニ枚写シタリ、(後略)

昭和十年十一月五日 半晴曇 暖

朝来ノ晴天ナリシガ後チ曇リテ暗クナリタリ、本日ハ八幡神社ノ例祭デ早朝ヨリ人出多ク賑ヤカデアッタ早朝ハ八幡マデ行キ中ニ枚写シ午前ハ多忙デ行カレザリキ、(後略)

昭和十一年十一月五日 晴天 暖

本日ハ方祭デ天候ハ好シ□ニ良ヒ暖カイ終日デアッタ：(中略)：七時ニ菊ト人ヲ写シ直チニ八幡神社ニ□□青年團ノ招キニヨリ行キテ中判ヲ写シ終リ在宅忙シカリキ、(後略)

昭和十二年十一月五日 曇天 暖

朝来ノ曇天ナリシガ午前ニ至リテ小雨トナリタルモ大シタ事ナク夕景止ミタリ、本日ハ八幡神社ノ祭典ニテ朝ヨリ人出多カリシモ午前ノ小雨ニテ急ニ人足繁ク早ク淋シクナリタリ、早朝八幡神社ニ写シニ行キ午后ニ至ルモ忙シク行ク事デキザリキ、(後略)

(個人蔵)

岩川村郷土誌(該当部分のみ抜粋) 岩川村役場 大正時代

郷社八幡神社

鹿兒島囃歌郡岩川町五拾町字馬場五千七百四拾五番ノ二 鎮座

一 祭神 玉依姫 仲哀天皇 応神天皇 神功皇后

武内宿禰 天照皇大神 保食神 伊邪那岐命

一 由緒 不詳

八幡神社ハ後一条天皇万寿二年ノ創建ナリト云フ サレバ近衛家所領時代ニ近衛家ノ命ニ依リテ創建セシモノナルベシ

明治四拾參年四月拾六日指令甲一第一五一七、一五一八、一五一九、

一五二〇、一五二一号ヲ以テ岩川村五拾町 村社伊勢神社、無格社

藤原神社、同笠祇神社、同宇佐神社、同保食神社ヲ本社ヘ合祀許可、

同年五月廿六日指令甲一第一五二一号ヲ以テ岩川村五拾町字上馬

場無格社熊野神社ヲ本社ヘ合祀許可

本社ハ古来岩川村中之内字河崎九千五百五拾八番イ 二反六畝四歩
 官有地ニ鎮座ノ処境内地ハ河川ニ沿ヒ出水ノ際危険ノ虞アルヲ以
 テ現在境外所有地ヲ官有神社敷地へ上地ノ上移転願出大正貳年拾
 貳月貳拾貳日指令甲庶第三六四七号ヲ以テ鹿児島県ヨリ許可ヲ受
 ケ大正參年九月壹日移転済トナル

一 例祭其他

二月 二十三日 祈年祭
 十一月 五日 例祭
 十一月二十九日 神嘗祭

八幡神社例祭(十一月五日)ノ時ニ八幡神ノ浜殿下リト云フモノ
 アリ コノ時ニ弥五郎殿ト称スル偶像ヲ祇園祭ノ山車ノ如キモノ
 ニ載セテ青年輩ガ之ヲ推輓シテ神輿ノ先驅ヲナセリ
 古来例祭ハ十月五日ニテ岩川八幡神ノミハ独リ出雲ニ朝シタマハ
 ヌト云フテ郷人ハ之ヲ一ツノ誇リトナシ居リシモ今ハ神威モ衰へ
 テ出雲ニ朝シタマフニヤ
 弥五郎殿ノ偶像ハ身長一丈五、六尺竹ノ籠ニ梅染赭土色衣袴ヲ着ケ
 勇壮ナル風貌ノ面ヲ付ケ大刀小刀ヲ帯ビ鉾ヲツキ幼児等ハ一見戦
 慄スベキ姿態ナリ

コノ弥五郎殿ノ偶像ハ日向地方ニアル風俗ニテ飢肥ノ的野八幡北
 諸県郡山之口村其他高鍋地方ニモアリト云フ

而シテ高鍋地方ニテハ之ヲダイダラ法師ト云ヘルトカ
 三国名勝図会ト云ヘル書ニハ弥五郎殿ハ隼人ノ尸ナリトアリ

一 資産

境内地反別 二反七畝五歩 官有地第一種神社敷地

上馬場第五七四五ノ二

永続資本
 荒蕪地反別 七畝廿九歩 民有地第一種
 字宮ノ前下第七三三八イ

畑	反別	四畝拾七歩	同	第七三三八ノ四
畑	反別	貳畝廿歩	同	第七三三八ノ八
畑	反別	貳反九畝拾壹歩	同	字宮元 第三〇二六
山林	反別	六反八畝六歩	同	字上馬場 第五七四五ノ一
畑	反別	參畝參歩	同	字早馬場 第七〇三九ノイ
畑	反別	六反壹畝拾歩	同	第七〇三九ノロ
畑	反別	壹反貳畝貳歩	同	第七〇三九ノハ
山林	反別	四畝歩	同	字段 第三六三九乙ノ一
荒蕪地反別	壹反九畝拾七歩	同	字河崎 第九一五八ノイ	
田	反別	壹反六畝貳拾八歩	同	岩川町五拾町
			字道添通	第七二六二

(岩川村郷土誌は、大正時代に岩川村役場が作成しているが、八幡神社の項は、昭和八年二月八日に追記されたものである)

(大隅郷土館所蔵)

二級神社八幡神社誌(昭和五十八年記)

一、御創建

皇紀一六八五年(西曆一〇二五年)六八第御一条天皇の万寿二年今
 を去る九五八年前京都の石清水八幡宮より御勧請と伝えられる。

一、御祭神(主神五柱)

一、玉依姬命

二、仲哀天皇

- 三、神功皇后
- 四、應神天皇
- 五、武内宿祢

一、御祭典の日

例祭十一月三日（弥五郎どん祭）

春祭四月五日

夏祭七月十五日

秋祭十一月五日（岩川ホゼ祭）

一、月次祭

一日、五日、十五日

月次慰霊祭（毎月二十三日）

（岩川八幡神社所蔵）

弥五郎どんのごつ

石碑建立の趣意

この石碑は、昭和五十八年三月の岩川小学校卒業生とその父母が、母校への謝恩と母校の永遠なる発展を祈念して、遠く辺塚から花岡閃緑岩を運び、二月の吹きすさぶ寒風の中奉仕作業により手造りで建立したものである。

碑文の「弥五郎どんのごつ」は、岩川のおぶすな神である「弥五郎どん」にあやかっつて、本校に学ぶ子等が郷土岩川を愛し、弥五郎どんのように胸を張り、堂々と精一杯生きぬくようにという念願を込めたものである。

岩川小学校の教育のシンボルとしてこの石碑を贈呈する。

昭和五十八年三月二十三日

岩川小学校卒業生父母一同

碑文は第三十二代校長 川路郁夫氏

（岩川小学校校門付近に設置）

弥五郎どん（弥五郎音頭）

作詞 高城俊男

補作詞 島田陽子

一 どんとどどんと 弥五郎どん

お年は数百 大隅生まれ

日本の北から 南から

寄せる人波 見下ろして

幸せ招くよ 弥五郎どん

（ジャッドジャッド ほんのこて よかど

弥五郎どんは 巨きか男

大隅自慢のよか男 ジャッドジャッド

二 どんとどどんと 弥五郎どん

祭りもたけなわ 太鼓がひびく

腰には二本の 長い太刀

ギョロリまなこで そそり立つ

宿祢をしのばす 弥五郎どん

（ジャッドジャッド以下くり返し）

三 どんとどどんと 弥五郎どん

巨きな体じゃ 日本がせまい

そこでと旅立つ 巨人博

スペイン人も 総立で

驚き桃の木 弥五郎どん

(ジャッドジャッド以下くり返し)

(町制40周年記念・平成七年作)

平成九年十一月三日弥五郎どん祭り (県無形民俗文化財指定) 看板

当、岩川八幡神社は万寿二年(九七二年前)に京都石清水八幡宮に願いで今の元八幡に創建された神社です。

その後領地争い等で戦火にあい賊徒に神寶などうばわれたりしましたが天文四年(四六二年前)に肝付氏の手によって再建され(ここに移ったのは大正四年)この神面が天文時代に彫られ奉納されたものと思はれる面で楠丸太を彫り高さ六〇センチあります。

これを民族学資料として次々に弥五郎どん一式が模彫されました。

昭和四四年五月 大阪万国博覧会へ出展

(南洋材丸太彫高九〇センチ) 昔の面形

昭和五二年三月 大阪国立民族学博物館

(楠材丸太彫高九〇センチ) 昔の面形

昭和六一年九月 大隅町郷土館 (現在弥五郎の里 スペイン出場)

(楠材丸太彫高九〇センチ) 明治末期の面形

平成九年三月 大隅町

(楠材丸太彫高九〇センチ) 明治末期の面形

平成九年作の弥五郎どんは当県のシンボルとして東京・大阪等鹿児島県物産展やイベントに展示されます。

現在浜下りに出座の弥五郎どんは日露戦争記念に京都で彫られたと云われています。

(岩川八幡神社所蔵)

弥五郎面(古面)の修復記録

弥五郎どん神面修復記録 昭和五十二年八月十五日

氏子諸説に依るには元八幡より当上馬場へ神社移鎮の頃(大正三、四年)大津十七氏が児童、東条久・最勝寺俊信等を助手とし神面修復さる。然し昭和四十四年五月大阪・万国博に民族学資料として模刻一体一式を出品(泉木工、川上久雄作)更に昭和五十二年三月大阪国立民族学博物館に一式一体を同川上久雄作納入す。この頃神面の胡粉・辨柄の離剥・盡しく原形不明の懸念に及ぶ

依って昭和五十二年八月川上久雄修復全面カシューウルシ仕上とす

鼻頭 欠損部はポリエステル 充填

耳接合部 パテ

(弥五郎古面の裏に記入)

県指定証書

第40号

指定無形民俗文化財指定証書

- 1 名称 大隅町岩川八幡神社の弥五郎どん祭り
- 2 保護団体(名称) 大隅町弥五郎どん祭保存会

(所在地) 曾於郡大隅町岩川5020番地

鹿児島県文化財保護条例第25条の規定に基づき鹿児島県指定無形民俗文化財として昭和63年3月23日鹿児島県教育委員会により指定されました

昭和63年3月23日

鹿児島県教育委員会

教育長 濱里忠宣（教育長印）

岩川市場規約

明治四十二年旧十月

岩川市場規約

都城

志布志

小間物商同業組合

規約

第一条 本組合員ハ岩川市場ニ於テ相互之利益ヲ計ランガ為メ共同一致シテ本規約ヲ設クルモノトス

第二条 組合員ハ明治四十参年旧十月五日場所件ヲ協議ノ上記載人名番

ニ依ツテ旧十月三日ニ岩川ニ双方ヨリ一名ノ責任者ヲ派遣スル事

第三条 場所小屋掛等ハ其ノ責任者タル者ガ同地方人者ニ依頼監視ナシ

同市場之全責任負フ者トナシ戸板万事一切都合準備ナシ置クモノトス

第四条 本組合ハ十月四日正午十二時迄岩川ニ来着者ヲ壹番クジトナシ

正午ヨリ後ノ人ハ二番クジトナス事

第五条 本組合記載人名分之人来着之際ハ三番クジ数日前来着ナシ居ル

共其ノ人ニ退却ヲ命ズル事

第六条 責任者ハ前日ヨリ尽力ヲナスガ故場所賃ヲ無賃トナシクジハ正

午来着ト共二一番クジ引クベキ事

第七条 組合員ノ責任者ハ旧八月中旬前ニ岩川場所掛ヘ端書差出スベキ事

第八条 本規約ハ四拾参年旧十月ヨリ毎年履行ナシ若シ組合ニ依テ規約

ニ背ク者有ル時ハ置場所ニ出店成ス事ヲ得ス

第九条 責任者之頭名ニ〇印ヲナル事

右之条々固ク相守ル事実正也依テ眼前ニ於テ記載候也

都城組合員

猪俣武兵衛

鎌田八次

那須義一

松野松次郎

小牧栄次

鮫島直次郎

志布志組合員

野村浅次郎

吉見矢市

吉見金次郎

池畑栄太郎

（大隅「岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」調査報告書より転載）

岩川八幡神社「弥五郎講」規約

第一条 本講は八幡神社に附属し「弥五郎講」と称し神社崇拜者を以て組織する。

第二条 本講は「弥五郎どん祭り」が県の「無形民俗文化財」に指定（昭和六三年三月二三日付）された記念事業として御祭神の広大無辺な御神徳の昂揚を図り淳風な民風の作興に努め社会の福祉に寄与すると共に御神徳を奉賛するを目的とする。

第三条 本講は本部を八幡神社に置き各地に支部を置くことが出来る。

第四条 本講の目的達成のため次の各号の事業を行う。

良受守里 給比氏 県下三大祭乃 弥五郎 行年登志氏 今母生伎 統介留 八幡神社 尔 鎮座・今年
 波乃年神 乃 身体 新志久 作留 尔 当常母 常大神 乃 広 伎厚 御恵 蒙奉 里氏 予弥五
 郎殿 乃 保存 传承 勤 励 弥五郎 製作部 乃 益荒雄 等 今 仕方 孟宗 竹 力
 ラ 竹 乎 切 里 出 鳴 神 乃 び だ ま り 乃 工 場 運 込 美 愈 製 作 始 大 前 尔 御 酒 御 食
 種 々 乃 味 物 献 奉 里 氏 作 業 安 全 竹 割 機 ヒ ヅ 取 り 機 の 使 い こ な し の 安 全
 健康 祈願 奉 存 会 会 長 中 迫 勇 実 行 委 員 長 津 曲 芳 夫 伊 製 作 部
 長 中 迫 浩 志 伊 始 関 係 者 等 参 里 氏 大 玉 串 執 執 拜 奉 留 状 乎 良 介 久 安 良 介 久 諾
 聞 食 志 氏 事 勤 諸 人 朝 日 乃 如 清 明 留 久 幸 久 幸 久 真 幸 立 采 給 閉 登 神
 職 中 執 持 知 氏 恐 美 恐 美 母 白 須

(西留正昭)

弥五郎殿大祭祝詞 (令和元年11月3日)

常緑樹 乃 生 伊 茂 小 高 大 木 縮 其 鎮 麻 里 坐 志 氏 健康 長 寿 乃 神 弥 五 郎 殿 曰 異
 郷 内 見 守 里 給 布 八 幡 神 社 乃 大 前 尔 神 職 恐 美 恐 美 母 白 左 久 去 尔 志 乎 平 成 四 年 ス
 ペ イ ン 乃 バ ル セ ロ ナ 巨 人 博 尔 御 出 威 名 乎 世 界 尔 轟 御 稜 威 乎 廣 米
 伊 勢 乃 博 覧 会 尔 大 阪 乃 御 堂 筋 祭 明 治 神 宮 浜 下 里 鹿 兒 島 新 幹 線 開 通 式
 パ レ ー ド ・ 宮 崎 神 武 祭 曾 乃 偉 業 計 里 知 礼 奈 伊 平 成 乃 御 代 加 良 令 和 尔 替 里 新
 天 皇 陛 下 乃 御 即 位 奉 祝 令 和 元 年 十 一 月 三 日 此 与 里 曾 於 市 最 大 乃 祭 里 今
 始 麻 留 商 工 会 青 年 部 神 職 宮 仕 巫 女 氏 子 総 代 曾 尔 乃 役 割 知 恵 都
 伝 承 術 結 集 子 弥 五 郎 孫 弥 五 郎 踊 り 連 花 車 添 衣 氏 今 御 目 覚 目
 浜 下 里 登 母 奈 礼 婆 弥 五 郎 殿 太 鼓 乃 唄 平 聞 氏 子 崇 敬 者 乃 心 身 乃 健 康 五 穀 豊
 穰 家 内 安 全 乃 弥 采 念 自 氏 参 拜 者 加 良 乃 万 感 乃 拍 子 農 家 乃 暮 良 志 何 如 弥 加 里 加 氏 子 乃
 生 活 何 如 乃 弥 采 顔 乎 怒 加 良 世 益 々 尔 肩 乎 左 右 尔 振 部 氏 乃 道 程 氏 子 崇 敬 者 乃 産 業 弥
 進 尔 進 弥 采 尔 采 志 志 給 布 事 嬉 辱 奉 里 氏 斎 麻 里 清 麻 和 里 氏 大 前 尔 種 々 乃 物 乎 母
 合 世 献 奉 里 氏 今 往 先 大 神 乃 高 尊 御 神 稜 威 諸 人 等 上 尔 打 拜 志 米 給 比 弥

五郎殿 尔 肖 里 地域 発展 進 麻 志 米 給 衣 登 殿 鋒 中 報 持 恐 美 恐 美 母 乞 祈 奉 良 久 登
 白 須

(西留正昭)

秋祭祝詞 (令和元年11月5日)

掛 卷 畏 八 幡 神 社 乃 大 神 等 乃 大 前 尔 斎 主 恐 美 恐 美 母 白 左 久 此 乃 御 社 静
 宮 常 宮 鎮 麻 里 須 坐 大 神 等 乃 高 尊 御 恵 仰 奉 里 氏 称 奉 御 氏 子 総 代 責
 任 役 員 達 諸 々 大 前 尔 参 集 侍 御 縁 深 今日 乃 生 日 乃 足 日 年 例 随 隨
 一 年 尔 度 乃 八 幡 神 社 秋 大 祭 仕 開 奉 斎 麻 波 里 氏 献 奉 留 由 貴 乃 御 饌 御 酒 始
 海 川 山 野 種 々 乃 味 物 乎 机 代 御 座 置 尔 足 良 波 志 氏 乃 玉 串 取 掛 称 辞 竟
 奉 留 状 乎 良 介 久 安 良 介 久 聞 食 給 比 大 前 尔 奏 奉 留 太 鼓 乃 音 高 良 加 尔 納 奉 留 乎 米 具
 志 宇 牟 加 志 见 曾 奈 波 坐 志 氏 天 皇 乃 大 御 代 手 長 乃 御 代 殿 御 代 堅 磐 尔 常
 磐 斎 奉 里 幸 奉 里 給 比 御 氏 子 崇 敬 者 乎 始 米 氏 天 乃 下 四 方 乃 国 民 尔 留 迄 大 神
 等 乃 广 厚 恩 頼 弥 遠 永 蒙 良 志 米 給 比 氏 畑 津 物 田 津 物 諸 々 豊 許 々 太 久 乃 幸
 得 左 志 米 給 比 産 業 等 弥 獎 獎 麻 志 米 給 比 各 母 各 負 持 業 尔 勤 励 美 神 乃 道 尔
 違 事 無 久 清 明 直 正 志 伎 真 心 以 互 互 睦 賑 和 助 介 合 比 弥 益 々 尔 世 乃 為
 人 乃 為 成 良 志 米 給 比 氏 子 孫 八 十 統 五 十 檀 八 桑 枝 乃 如 久 立 知 采 開 志 米 給 比 茜 射 日
 乃 守 里 乃 暗 夜 乃 守 里 尔 守 里 惠 幸 给 開 登 恐 美 恐 美 母 乞 祈 奉 良 久 登 白 須

(西留正昭)

弥五郎殿布令太鼓祝詞 (令和4年11月3日)

掛 け ま く 畏 弥 五 郎 殿 の 里 八 幡 神 社 大 前 に 神 職 恐 美 恐 美 母 白 左 久 今 日 は 霜 月
 三 日 産 土 の 神 弥 五 郎 殿 祭 の 日 に 在 里 今日 乃 御 幸 の 先 祓 に 御 供 仕 奉 弥 五 郎
 殿 起 し 奉 弥 五 郎 殿 起 事 町 々 村 々 弥 五 郎 殿 起 事 布 令 太 鼓 知 知 知 知 知
 給 へ と 弥 五 郎 青 年 部 若 人 等 大 前 に 参 集 斎 回 清 事 事 申 告 奉 出 立 ち

奉りて 今 往先大神 乃高 尊御神威 諸人等 貢上 打拜 弥五郎 どん
尙里 地域 発展 進 給 殿 鋒 乃 中 執 持 恐 恐 恐 美 母 須 白

(△△△△…西留正昭)

弥五郎 造里 始 神事祝詞 (令和4年11月3日)

此乃大宮 天 乃 御蔭 乃 御蔭 鎮 坐 往 長 寿 郷 變 守 里 給 掛 畏
八幡神社 乃 大前 神職 乃 恐 恐 恐 美 母 白 左 久 今 日 波 志 母 霜 月 二 日 産 土 乃 神 弥 五
郎 祭 乃 日 志 在 御 幸 乃 先 祓 御 供 仕 奉 弥 五 郎 造 起 奉 神 幸
部 長 塚 本 一 義 頭 弥 五 郎 青 年 部 乃 若 人 等 大 前 參 集 齋 清 麻 波 里 尔
事 乃 由 告 玉 串 献 拜 奉 状 乎 目 具 志 宇 牟 賀 志 聞 食 諾 給 比 氏 喪 無 事 無
仕 奉 志 米 給 比 氏 関 係 者 等 直 久 正 志 久 忠 実 勤 志 美 励 殿 美 志 久 建 知 起 賀 留 借 久 誘 比
導 給 比 氏 今 年 又 御 氏 子 崇 敬 者 始 沢 集 參 列 諸 人 等 此 乃 地 域 健 康 長
寿 乃 神 乃 御 惠 受 給 恐 恐 恐 美 母 須 白

(△△△△…西秀一)

八幡神社新嘗祭祝詞 (令和4年11月5日)

常緑樹 生 茂 留 小 高 大 木 締 其 鎮 坐 健 康 長 寿 乃 神 弥 五 郎 曰 異
郷 内 見 守 里 給 布 八 幡 神 社 乃 大 前 神 職 乃 恐 恐 恐 美 母 白 左 久 今 年 祈 年 乃 御 祭 尔
乞 祈 奉 事 母 著 大 神 乃 高 尊 御 惠 以 奥 御 年 八 束 穂 乃 茂 穂 尔 成 幸 閉
給 比 氏 乃 産 業 弥 進 弥 進 弥 栄 給 布 事 嬉 奉 齋 清 麻 波 里 氏 大
前 秋 初 穂 御 食 御 酒 尔 仕 奉 山 野 乃 物 和 甘 菜 辛 菜 海 川 乃 物 和 鱈 広 物 鱈 狭
物 奥 藻 菜 辺 藻 菜 至 留 横 山 乃 如 久 置 足 良 波 志 氏 種 々 乃 物 乎 合 献 奉 里 氏 今 日
乃 新 嘗 乃 御 祭 仕 奉 留 状 乎 平 良 介 久 安 聞 食 天 皇 乃 大 御 代 手 長 乃 御 代 乃 殿 御
代 豎 馨 常 馨 齋 比 奉 里 幸 奉 里 給 比 宮 仕 責 任 役 員 總 代 会 御 氏 子 崇 敬
者 始 米 氏 天 下 四 方 国 民 至 留 麻 波 里 大 神 乃 広 厚 恩 頼 弥 遠 永 蒙 給 比 各

母 各 清 明 直 正 眞 心 以 負 持 職 業 勤 美 励 互 睦 和 美 都 浦 安 乃 世 乎
修 理 固 成 家 々 富 足 子 孫 八 十 統 五 十 檀 八 桑 枝 乃 如 久 立 采 給 開 登 恐
恐 恐 美 母 須 白

(△△△△…西留正昭)

町報おすすめ 第17号 (昭和36年11月1日付)

商工会で郷土名産も売りだす
県下三大祭りの一つ岩川八幡神社の弥五郎どん祭りが近づいてきました。
八幡神社奉賛会及び大隅町商工会では、このほど祭りの行事などにつ
いて打ち合せを行ない、ことしも11月5日、6日の二日間にわたりつぎ
のような計画で、例年以上に盛大な奉賛行事を行なうことをきめました。
▽11月5日 例祭午前10時から祭典、浜戸下り、ご神幸、還幸祭
11月6日秋祭五穀豊じょうの祈願
▽催し物 打ち上げ花火祝賀飛行、県警察学校プラスバンドによる特
別演奏、柔剣弓道の奉納試合、のど自慢、郷土民謡踊り、都城と鹿
屋自衛隊対抗角力などもりだくさんの催しものが計画されています。
またことしから町内中学校対抗の角力を計画し、とくに優勝旗を新
調しました。熱戦が期待されます。
▽弥五郎どん祭りにちなんだ素人写真コンクールを行ないます。キャ
ビネ以上×切り：11月20日まで 送り先商工会
また商工会では、弥五郎どんにちなんだ郷土色豊かなおみやげ品とし
て、ことし始めて弥五郎面をはじめ 弥五郎どん模様入りのハンカチや
竹細工などつくり売りだすことになりました。
弥五郎面は県立学校の某先生が八幡神社の依頼を受けて一年余りの月
日を費やし謹製されたもので、タテ20センチ、ヨコ12センチの床がけ柱

がけになる大きな面でその出来ばえは芸術品としても価値のあるりっぱなものです。

八幡神社では面を健康長寿のお守りとして祭りを行ない、各家庭の護り神としてもらいたいといっています。

(写真キャプション) ことしから売りだす弥五郎面

(町報おおすみでは、弥五郎どんの記事の初見となる)

(曾於市所蔵)

岩川(旧郷社) 八幡神社由緒記(平成二年四月吉日 有村光博謹書)

○八幡神社創建。皇紀一六八五年人皇六十八代後一條天皇(万寿二年)当時の莊園の領主近江家の所領鎮護の神として、京都岩清水八幡宮の祭神を勧請して、岩川郷吉井の里(今の元八幡)に創建。

天文四年肝付氏(檀越藤原重忠当地頭伴兼豊)造立。

○大正三年九月一日、現在地へ移転改築岩川町五拾町五七四五番地の式

○昭和十二年二月二十四日、岩崎与八郎氏寄附金参千円あり。新築の議定まり不足分氏子負担とし大津廿(町長)建築委員長となり工事をすすめ山頂を一丈五寸下げ広場を造り新築落成す。

○主祭神、応神天皇。副神 1. 天照大神 2. 神功皇后 3. 伊邪奈岐大神 4. 玉依姫 5. 仲哀天皇 6. 保食神 7. 武内宿祢命。

○当神社神職は江戸時代迄黒岩氏世襲し黒岩伊豆守を最後とし、その養子嚴彦に至る三十二代を最後とし大正末期伊勢健十郎三十三代社司となる。

昭和十一年八月二日伊勢氏死亡三十四代川崎龍助社掌、戦争末期より戦後しばらく末吉町堀良一就任、昭和二十八年一月二十九日宗教法人八幡神社二級社社となり二十八年八月藤井武志神職講習を終え直階試験に合格三十六代宮司に就任す。

○鹿児島県内神社数(全国八〇、〇〇〇社、神主二二、〇〇〇人)

計	一般	特別	種別	
			支部	鹿児島
93	80	13	指宿	
46	41	5	川辺	
50	45	5	日置	
109	103	6	薩摩	
210	208	2	出水	
139	136	3	伊佐	
53	53	0	始良	
153	147	6	曾於	
60	55	5	肝付	
146	142	2	熊毛	
35	32	3	上屋久・屋久	
18	17	1	大島	
26	25	1		
1,136	1,084	52	計	

○曾於神社級別数

1級	なし
2級	3
	日光神社
	住吉神社
	八幡神社
3級	3
	笠祇神社
	山宮神社
	投谷神社
4級	1
	櫛神社
5級	7
6級	2 7
7級	1 9
合計	6 0

○当神社の特殊神事、毎年(十一月三日例大祭 十一月五日秋祭り)弥五郎どん祭りで有名「健康長寿の神」として尊崇厚く「県下三大祭の二」として参詣者多く著名神社となる。

○社格、戦後宗教法人として更生二級神社となる。

○運営、旧岩川町在住の氏子二千戸初穂料を奉納し、宮司一、祢宜二、玲人一、氏子総代十九名、宮仕十名が祭儀の厳修と神社の管理、維持経営に万全を期している。

○当神社に合祀された神社（明治四十三年四月十六日 五月廿六日）

・伊勢神社（新田場部落御鎮座）

・笠祇神社（折田部落御鎮座）

・藤原神社（竹山部落御鎮座）

・熊野神社（現在地御鎮座）

・宇佐神社・保食神（西山部落御鎮座）

○当神社境内に建設されている諸記念忠魂碑

・明治維新戊辰の役戦没者慰霊記念碑

・全 記念碑、同五十年祭記念碑

・日清、日露戦役の記念碑

・明治十年西南の役戦没者忠魂碑

・明治百年祭記念碑

・太平洋戦没者（岩川地区）慰霊塔並永代神楽奉納記念碑

※毎月二十三日遺族参拝当月戦死者の慰霊祭厳修されている。

○当神社に奉賛会あり「昭和五十年神社の創建九五〇年奉祝大祭」の記念事業として先づ「明治維新百年祭」を手始めに氏子有志の浄財の御寄付を仰ぎ境内、社殿の整備をなし、名実共に面目の一新を計り社運の向上発展を期し、道義日本の建設に寄与して、御神徳の発揚につとめ郷土大隅の精神文化の向上に貢献し之を後世に伝えんとするものであり、今日迄に計画し実現せる事業左の如し。

1. 神社境内の御神木の保護整備美化。

2. 神社参道の大改造、舗装整備。

（渡辺生コン K.K.の原材料御寄贈と氏子並氏子総代労力奉仕による）

約一ヶ月奉仕す。

3. 社殿の雨漏り、屋根修理、他便所新設。

4. 修葺所新設、神饌所増設。

5. 倉庫新設（弥五郎祭り祭具格納庫）。

6. 明治百年記念碑建立。

7. 社務所の改造、更衣室新設。

8. 炊事場大改造近代化さる。

9. 歴代宮司の写真飾り付け。

10. 商工会青年部の協力に依り弥五郎祭りの台車の近代化。御身体鉄骨

入れ。

11. 御神輿の新調（京都松島屋発注）（百二十万円）

12. 御神幸用威儀物新調更新。

13. 本殿、斎殿の塗装、鳥居塗装。附属建物補修整備。

14. 社務所記念品販売所の窓硝子を「サッシ」に取換え近代化。

15. 祭具、祭服等備品の整備。

16. 国旗掲揚台新設（昭南病院徳留医師贈）

17. 終戦前後の弥五郎祭り奉仕の馬場青年団員等の記念写真の引伸しを

野口、沢両氏より寄贈あり社務所に掲示しあり。

18. 社殿、斎殿の屋根大改修。

19. 泉木工社長川上久雄殿（昭和五十一年万国博覧会場 昭和五十二年

国立民族博物館）に展示のため、「弥五郎どん」面、帯刀（大小）他創作奉仕、当神社宝物の旧面を装ひ新たに修復、保管箱と共に奉納いた

だき大事に保管しあり。

20. 参道の両側に一対つづつ左の方々の献燈奉納あり。

①原田善吉（九〇才）昭和五十三年十一・五。

②杉永六男（七一才）昭和六十二年十一・五。

③伊勢神宮（別府チカオ（八十五才）昭和五十七年一月吉日

参拝記念（山下ヒモ（七十五才））

（山口ユワミ（八十二才））

（川原田国次（八十三才））

④ 原田藤徳 昭和五十八年秋

⑤ 辰巳会同窓生一同 昭和五十六年一月吉日。

⑥ 岩川中昭和三十四年卒同窓生一同 昭和五十九年一月吉日。

⑦ 川原田国次（八十八才） 昭和六十一年吉日。

21. 「弥五郎どん」衣袴（四年毎新調（梅染め反物25反））

昭和二十五年末吉町より岩川本町に移住の京屋店主宮田満志氏の篤志寄附奉納に依り昭和27年始まり、31年、35年、39年、43年、47年、51年、55年、59年、平成元年の十回に及び永久に継続いたしたいと申出あり。

22. 氏子崇敬者他参拝客のため役立てたいと神社総代の発意に依り社有林の間伐材を利用し控へ所兼記念品売場新設。

◎昭和六三・三三・二三付「弥五郎どん祭り」が県の「無形民俗文化財」に指定の栄誉に接し、記念事業として御祭神の広大無辺な御神徳の昂揚を図り淳風な民風の作興に努め社会の福祉に寄与すると共に御神恩に奉賛する目的で「弥五郎講」を発足講員の浄財を奉納いただき

1. 神社社殿齋殿他一切の塗装並に廊下等を「サッシ」張り近代化を期し、陛下の御即位式記念とし、

2. 境内の美化、緑化に依る整備等につとめたい念願なり、

慶応	明治	大正
四年	六月	三月
元年	元年	三月
二年	二年	三月
九二五	九二五	三月
五年	五年	三月
四月	四月	三月
七月	七月	三月
八月	八月	三月
十年	十年	三月
十二月	十二月	三月
二月	二月	三月
廿二年	廿二年	三月
廿四年	廿四年	三月
十一月	十一月	三月
廿七年	廿七年	三月
三十年	三十年	三月
三十七年	三十七年	三月
一月	一月	三月
四年	四年	三月
七年	七年	三月

<p>伊勢家の家臣私領五番隊（小隊長大津十七以下一二四名）出征京都守護、奥州関川の戦に戦功拔群翌二年二月凱旋す。</p> <p>「弥五郎どん祭り」始まり、御神幸浜下り行わる。</p> <p>「岩川郷」「末吉郷」より分離独立許可（戊辰役戦功認められ）</p>	<p>当社 郷を大区、村を小区と呼ぶ。</p> <p>神職 学制布かる。郷校を愛則小学校に充つ。</p> <p>黒岩 西南の役始まる。7月当地方激戦地となる。官軍墓地（馬場）74基。9月城山陥落。</p> <p>世襲 郡役所置かる。郡長任命。12月官制戸長を廃し一般公選とす。</p> <p>31代 町村制実施。郷を村に村を大字とす。</p>	<p>飯田開田着工神職黒岩嚴彦測量監督主任として27年5月完工。（水田十五町歩）</p> <p>日清戦争開戦。</p> <p>現在の曾於郡となる。</p> <p>日露戦争開戦。</p> <p>桜島大爆発。</p> <p>32代 中山嘉兵衛貴族院議員に選ばれる。大津十七日翁、一月二十八日逝去。</p>
--	---	--

宮本利平、清明	西留正昭
西山静雄	徳永菊雄
岡留徳馬	緒方篤行、博
湯田時良	永田正矩、良一
津留辰矢	
久留治夫	

大正		昭和	昭和					大正			
十三年		元年	十一年	十六年	廿年	廿八年	四十五年	五十年	六十二年		
伊勢	健十郎	33代	川崎 龍助	堀 良一	藤井 武士	鮫島 利雄	原田 藤德	山口 長森	39代		
岩川町制実施。4月岩川志布志間鉄道開通。		郡制廃止。笠木開田竣工（水田八十町歩）。									
<p style="text-align: center;"> (権祢宜) 川 畑 龜 之 助 (祢宜) 寺 勝 最 (祢宜) 原 田 (祢宜) 鮫 利 島 雄 (祢宜) 藤 川 英勝 </p>											
◎神社初穂料		部 落 公 民 館 長 を 神 社 の 世 話 役 に 委 嘱 し て 徴 収									
55年	51年	48年	40年	30年	25年	21年	戦前一戸当30銭				
500円	400円	200円	150円	100円	50円	30円					

◎神社総代（昭和六年度より記録あり）三年毎改選

岩川校区				菅牟田校区				笠木校区				折田校区																																																																																					
岩崎宗五郎	吉瀬 鋭吉	菅牟田校区	菅牟田校区	岩元嘉之助	山田 武熊	山之内善二	緒方 英吾	永田庄左エ門	山田武右エ門	川原田國次	渡辺幸右エ門	黒木 良行	吉留勇右エ門	八木 直熊	渡辺 竜一	立元 為治	藤井 武志	中園 陸藏	原田 藤德	本村 栄吉	入來 均	小川 種義	大津 廿	鮫島 利雄	富岡 清定	伊地知 栄	谷川 一雄	野村 直市	大脇 忠平	伊地知 栄	迫井 清二	入江 覚二	山田 親雄	岩崎 宿弥	狩谷 茂	渡辺 常吉	西山 静雄	龜石 鼎	八木 光	山之内善三郎	高橋 喜寿	永田 秀夫	新穂 利助	山口 長至	川崎 祐三	加塩 正歳	和田 勘助	八木 兼義	室屋 秀吉	有村 光博	原田 洋	中村 愛藏	小浜 清	松元 正夫	前田 重行	馬場進一郎	金沢 佳三	園田 愛藏	満 義則		鮫島 勇助		留岡 忠光	川原田国次		竹下 重夫		福満 一雄	渡辺 貢	池之上正雄	兒玉 清盛	八木 忠	大 路 砂雄	中村フサエ	上原 孝二	金沢 義雄	桑原 栄次	岩下 雅人	前田 幸子		漆間 達美		松下 栄	牧之瀬幸三		桂 信夫		山口 恒春	永田 良一		新穂 文利		川崎 純夫	永田 良一		新穂 文利	

（岩川八幡神社所蔵）

第三節 新聞記事

本節は、大正四年(一九一五)から令和四年(二〇二二)までの弥五郎どん祭りに関する新聞記事をまとめたものである。ここでは鹿児島県の地方新聞社である南日本新聞(前身は鹿児島新聞・鹿児島日報)の記事を収録(令和五年二月十日付掲載許可)した。なお一部、鹿児島新報(廃刊)の記事を収録した。

(凡例)

- ・原則、原文のとおり表記しているが、表示できない文字については、適宜新字体に改めた。
- ・明らかな誤植は、適宜修正した。
- ・複数の段で表記された見出しは、一字空けて、同じ行にまとめた。
- ・記事の一部分を省略したこともある。その場合、(省略)と表記した。
- ・見出しは○、写真・図等の見出しは◇を冒頭に冠した。

大正4年11月4日『鹿児島新聞』

各地より 岩川
彌五郎様市 本月五日は本村八幡神社例祭にて則ち彌五郎様市開場さるべく既に金物商を初め多数市場使用申込みありと云へば盛大雑沓を來すなるべし(一日發)

大正5年11月5日『鹿児島新聞』

今日日舉行すべき岩川八幡神社の大祭呼物彌五郎殿(岩川村澤寛眞館撮影)

大正10年11月5日『鹿児島新聞』

本日例祭執行の岩川八幡神社の巨人彌五郎どん(澤寛眞館撮影)

昭和5年11月7日『鹿児島新聞』

岩川名物彌五郎殿祭 盛大に舉行
古くより岩川名物として廣く知られ例年行はれる八幡神社彌五郎殿祭は既報の如く五日、馬場、中國青年團後援の下に極めて盛大に舉行された此日秋色濃き未明より冲天高く響く煙火の音にお祭り気分をいやが上にも高め参拝者は早朝より絶へ間無く押し寄せ他町村よりは汽

車毎に長蛇の如く流れ込みさしにも廣き神社境内も人波を以て埋めて居た、式典は午前十一時より伊勢宮司に依り、いと厳かに行はれ町内各小学校生徒職員全部社前に参列十二時より彌五郎殿先頭に、濱戸下りがあり小学校庭に於て、午後三時迄御休憩の後御遊行された、尚當日最も一般より期待された抽籤は午後四時群衆の目前に於て開票されたが當籤者は左記の通りである
△一等(又ザマ)時計 一四九五(末) 前原繁光一四七六(岩) 池之上末藏三二五(岩) 山本光夫二二五(岩) 野村光夫
△二等(上反物) 二五(一)松 久木田繁二二六三(岩) 中間宗次郎一五〇(一) 赤松あつ子二〇五(岩) 緒方正夫二四五四(岩) 荒田重夫三二二(岩) 馬場繁三五四(松) 平原繁造二二九四(岩) 長吉繁吉二〇七(岩) 有村大二郎二九九(岩) 片岡滿藏三二六(岩) 三坂功一〇三九(岩) 岩重虎夫六八三(岩) 中西ふみ子二六九(野)
△三等(反物) 二四四(末) 榎園廣五六(鹿) 市川野屋旅館一七九(岩) 有園二〇〇 一九(岩) 岡野商店三三三(岩) 富重裕利三七四(岩) 永野時盛九五〇(岩) 山下二〇〇 一三九八(志) 持田二二七二(岩) 石田久三三三(恒) 原田朝熊
△四等(スコップ) 一四四七(岩) 江口文夫一四七(岩) 不明二二五三(末) 山田有造
△五等(バケツ) 一四九四(岩) 津留市助二二五五(松) 馬場利夫

昭和18年11月8日『鹿児島日報』

彌五郎どん豊祭賑ふ
十一月五日は岩川町郷社八幡神社の大祭で例年遠く宮崎や西薩地方より俗に「彌五郎どん豊祭」と稱へ、参拝者頗る多く、大隅地方に於ける最も盛なる行事の一とされてあるが、本年は特に人も多く午前一時より引きも切らず夜明けより一刻一刻と雑沓を加へ、十時過ぎより更に参拝者を以て埋め、各方面道路は腕腕長蛇の列を要し、祭神冠衣宿禰の御姿といはれる身の丈二丈八尺、実に十三反半を要する衣冠装束の彌五郎どんを拝み、大東亜戦争と武運の長久を祈る人達は幾萬に及んだといはれた、此日岩川商報挺身隊、岩川署主催、本社岩川支局の後援にて、兵器獻納集を行つたところ、淨財實に七百四十六圓餘に上る盛況であつた、尚同挺身隊は今後あらゆる方面に於て活動し兵器製作に取纏め獻金する筈
◇(表題無し) 彌五郎どんの前で法被姿の男たちの集合写真

昭和23年11月8日『南日本新聞』

岩川名物彌五郎どん祭り 一千年近い歴史 武内宿禰をかたどる
◇(表題無し) 彌五郎どんの前で法被姿の男たちの集合写真

今から九百二十三年前当時岩川地方は近衛家の所領であつたので京都石清水八幡宮から勧請し祭神は應神天皇神功皇后ほか六神問題の彌五郎どんは應神、神功両祭神の守護役であつた武内宿禰をかたどつたもの、十一月五日には祭神の神幸が例祭となつてゐるが、この先拂いに彌五郎どんが毎年おでましになるというわけで、記録によれば同社の創建以來一年もかかたことがないというからざっと二千年近い歴史をもつてゐる、身の丈一丈六尺(五メートル二〇) 四輪車の上に乗つて梅染

めかつち色のヒトエ袴帯鉢巻して三六反の衣類が必要でこれまでは一丈四尺の大刀、九尺四寸の小刀をたばき両手で一丈八尺のホコを杖にしていたが、軍國主義の追放にあつて刀剣をかなぐり捨てたのは丸腰に大キセル大下駄ワラ草履手にはしゃやくという姿に姿装、顔いばいにひろげた大口らんと大きく見ひいた目頭にかざした風の羽根飾り、威風あたりを拂つてはじめてみる子供は思はず息をむとまうありさま、しかしこの彌五郎どんは何より子供好きで渡船ともなれば氏子青年はもちろん子供供たちがわきまきになら下つたり押したりほおえまじ風景を展開する

なおでも例年同町新城、別府両部落氏子一同が奉納する藁草履は長さ六尺、幅三尺片方だけで十三貫四匁も持たねばハコベないというしろもの、これに必要なワラ三十束も必要ということになつてゐる、この神体は竹か製で当日このことを話せば腹がいたくなる、むかしはもつと大柄なつくりだつたが明治の末から岩川の街に電線が張りめぐらされたのでさすがの彌五郎どんも押しよせる文化の波には抗しかねて前掲の身の丈にちぢめられたやせな来歴もある

この彌五郎祭りは朝二時から彌五郎起しにはじまるが、社司をはじめ氏子一同が徹夜でつくりあげ、寝たままになつてゐる彌五郎どんを町民の老いも若きも八幡の森にかけつけ太鼓の音にあわせてよりよいしよと午前四時ごろまで汗つて起す、午前十一時ごろ祭神の神幸一時間前に氏子青年にとまなわれて二百六十もある石段を降り、縣道に出て馬場先にある馬場の廣場の祭場に出張り、祭事をおわつて夕刻八幡社に引きかえすという行事になつてゐる
当日は前日から鹿児島県下はもちろぬ宮崎、熊本北九州方面から乗りこむ露天商人をはじめ地元承認なるも出展を張る、特色あるのは農機具市場の開催で参拝人は必ずスキ、クワの類からカゴ、ミノなどを手に手に買つて帰るならわして、これも呼びものひとつ、最近までは大かりなサーカスなどもあつた、この市場は五日につづいて二三日は店をはるがあとになるほど値段が安くなるので当日よりむしろあの方が繁昌する、藤井社司の話では戦争中はさつぱりさびれていたが一昨年あたりから人出もふえむかしのように「写真眞は彌五郎どん祭り」(N記者)

昭和26年11月6日『南日本新聞』

ワンス四万人の出 岩川町の彌五郎どん祭賑ふ
万寿二年前約九百年前昔から続いているといはれる岩川町の彌五郎どん祭は、五日おからの快晴に恵まれ、近郷近隣の参拝客約四万余人が押しよせにぎやかにおこなわれたこの日、ス台風の損害で入った気分を吹き飛ばし、講和樹立の元気を奮い起そうと氏子総代が努めただけに、身の丈十メートルに近い彌五郎どんは馬場部落の氏子青年團にかしつがれ岩川町の本町通りをのつしつとねり歩いたが今年からニュー・ルックとなつた彌五郎どんは、途中の電源や電話線にはやお腹をかかめてスリと通って抜けやんやのキャサ。町内料亭から出たきれいだころの山車に加えて各部落の踊りも奉納され、かねてかむしをかみつたような彌五郎どんも今年ばかりはご気分だに参拝客のもつぱらの評判であつた。

◇町をねり歩く彌五郎どん

◇町をねり歩く彌五郎どん

昭和27年11月11日 『南日本新聞』

○五万人の出入 立太子礼に

彌五郎どん祭賑う立太子式の十日を迎えた岩川町では折から雨のため延期された名物の弥五郎どん祭とカチ合って郡内各町押しよせ大賑いを見た。この日身のたけ十メートルの弥五郎どんは立太子式を祝って参加した各町村伝統の郷土舞踊隊をしたがえ八幡神社から番協広場まで県道筋をノッシ、ノッシとわり歩いて浜下りしたが、沿道はゴツタ返す人波で動きがつかず、囃歌地区署員も総動員で交通整理にのりだすありさまこの日の出入はざっと五万とぞえられた。

さすがにイカツイ表情の弥五郎どんも各町村のクレイビこころの踊子たちのやしに乗ってご満悦のまつ。午後三時半弥五郎どんはふたたび人波をぬって八幡神社に還幸した。歌や踊りも夕刻まで岩川町を沸かせた。立太子式奉祝風景は囃歌地方切つての盛況ぶりであった。◇写真はごった返した弥五郎どん祭り

昭和28年11月7日 『南日本新聞』

○弥五郎どん祭り

彌五郎どんのヨカニセぶり
秋晴れのもと十万人の参詣客を迎えてひらかれた岩川町の弥五郎どん祭りは近年にない賑わいであった。その日の弥五郎どんの晴れ姿をカメラでご紹介しよう。
①身の丈一丈六尺、身にまとう着物は鉢巻、帯などしめて三十六反といた彌五郎どんのヨカニセぶり。②岩川町本町少年団のおみこし、ワッショイワッショイ。③鹿屋保安隊音楽隊の熱演(岩川小学校校庭の架設舞台で)。④弥五郎どん祭りは、農機具の市でもある。大隅、日向両地方から業者が出て露店商売も大繁昌。池之上本社写真部撮影

昭和29年11月6日 『南日本新聞』

○六万人の出入で賑わう 町制30年を祝い、彌五郎どん祭り

【岩川】大隅地方随一の行事といわれる囃歌郡岩川町の、弥五郎どん祭りは、恒例の五日午前二時から弥五郎どんみこしの祭事にはじまった。午前十一時から本祭典を同町八幡神社で挙行、おわって浜下りが行われ、弥五郎どんを先頭に行列はしらずと八幡神社階段を下り、馬場通りから本町通りとわたりある。ことしはとくに町制三十周年を兼ねているだけに、隣接町村からも六万人の人が押しかけた。一方午後から鹿屋自衛隊吹奏楽団が市中行進、小学校校庭で演奏したが、同校庭には都内シウウチュウ・メーカー主催の、のみくらべもひらかれ、左党を喜ばせた。

なおきょう六日は引きつづき町制三十周年式典が小学校講堂でひらかれ、つづいて祝賀行事として、ラジオ南日本ののどじまん大会柔剣道、弓道、相撲大会、宝クジなど盛りたたくさんの行事が行われる。◇鳥居下におり立つた彌五郎どん

昭和30年11月6日 『南日本新聞』

○彌五郎どん 罷通る 岩川八幡恒例祭典開け

【大隅】県下三行事のつづき囃歌郡大隅町岩川八幡の、弥五郎どん祭りは恒例の五日盛大に行われた祭りは午前二時打揚花火と大太鼓の合図で弥五郎どんみこしの祭事にはじまり、十時から同社境内で本祭典を挙行、終つて浜下りに移り、一丈六尺、十八反の衣袴をまとい、丈余の太刀二本をさした弥五郎どんを先頭とし、そのいのハッピの氏子が四輪車を押して町内目抜き通りをねり歩いた。

この日好天に恵まれ遠く県外の宮崎、串間をはじめ、隣接町村から押し寄せた参拝人はやく八幡神社付近の道路には農機具をはじめ各種の出店がずらりと軒をならべにぎわった。この日祭典行事のほか午後二時から大隅町柔道同好会主催の奉納柔道大会と専売公社大隅出張所主催のタバコ早吸い、吸わけ競技が岩川小学校校庭でひらかれた。きょう六日は引き続き大隅町商工会主催の秋祭り行事として素人相撲のど自慢、郷土舞踊など多彩な催しが計画されている。◇まかり通、彌五郎どん

昭和31年11月6日 『南日本新聞』

○彌五郎どん ねり歩く

【大隅】恒例の囃歌郡大隅町八幡神社の、弥五郎どん祭りは五日絶好の秋晴れに恵まれ、にぎやかにひらかれた。午前二時には早くも青年や子どもたちをはじめ、一年間の健康を祈願する人たちが約五百名が晴い中を神社境内におしかけ、弥五郎どん起し(弥五郎どんに衣装をつける)の神事がはじまった。東の空白みかける午前五時半ごろ、身長一丈五尺、カッ色の衣に八尺余の太刀をたばさんた弥五郎どんが、子どもたちの歓声の中に出上がり、夜明けの空に立ち上がった。

夜明けとともに、露天商が軒をならべ、店びらきするとともに臨時バス、臨時列車から続々と参拝人や見物人がぐりこみ、大隅町はことし最高やく一萬五千の人数となり、せまい街々は人の波でこつた返し、大隅警察署も、本通りは車馬の通行禁止で整理に汗だくのありさま。午後一時すぎ弥五郎どんは神社を出発、岩川小学校校庭で午後二時から神幸祭がひらかれた。

一方岩川小学校庭では午後一時からの専売公社大隅出張所の管内たばこクイズの抽選発表会や奉納柔道大会が行われるなど、終日お祭り一色にぬりつぶされた。◇町内にくり出す、弥五郎どん

昭和32年11月6日 『南日本新聞』

○御神幸も花やかに 彌五郎どん祭り開く

【大隅】囃歌郡大隅町八幡神社大隅商工会共催の弥五郎どん祭りは五日盛大に開催した。午前二時古式ゆかし弥五郎どんおこし祭り行事が行われ、善男善女が神社に参拝、四十五反の着物を着替えさせた。十時からおそかな祭典に移ったが、このころ秋雨が降り、弥五郎どんはせつかくの新調の衣裳もすぶぬれになったが、正午ごろから天気は回復、秋晴れのもと十九尺の大男弥五郎どんを先頭に御神幸を行い、昔なつかしい祭典絵巻をくりひろげた。夕方まで岩川小学校の御旅所で休憩、このころ校庭では呼物の剣道、柔道、相撲大会、三つの歌、郷土踊りなどで町内はお祭り一色にぬりつぶした。◇まかり出た彌五郎どん

昭和33年11月6日 『南日本新聞』

○三万人がくり出す 賑わった、彌五郎どん祭り

【大隅】囃歌郡大隅町岩川八幡神社の弥五郎どん祭初日の五日は午前二時打上花火の合図で開幕、彌五郎どんは六メートル(十九尺八寸)の巨体に四十五反の反物の晴着をまとい、大小二本の刀をぶち込んだ巨大なさまに姿になった。快晴に恵まれ近郷から押しかけた参拝客はざつと三万人(大隅警察署調べ)。午前十一時から祭典が始まり、正午ごろご神体の浜下りつづいて待望の弥五郎どんはのつしと大きな体をゆすぶって岩川小学校校庭までのし歩いた。身のたけ四メートル八十八センチ(一丈六尺) 太刀四

枚のしあるいた。午後一時から岩川小学校校庭で呼びものミスター弥五郎どんの表彰式が行われ、準ミスターの丸岡順一郎さん、小浜進さんらに賞品がおくられた。これと同時に、奉納弓道、柔剣道大会、芸能大会など盛り沢山の催しがつぎつぎにくりひろげられ、午後四時すぎ弥五郎どんは神社に引上げた。また二日目の六日は前日に引きつづき祭典を行い、午前十時から岩川高等学校で大隅町体育祭が催される。◇街をのし歩く彌五郎どん

昭和34年11月4日 『南日本新聞』

○ミスター弥五郎どん決まる あすから盛大にひらく 大隅町岩川

【大隅】伝統を誇る大隅町岩川八幡神社の秋とあつて例年以上の六両日盛大に開幕するが、ことしは豊年の秋とあつて例年以上の大きさをいを呈するだろうと予想されている。以下お祭前景気のスナップ。呼びものミスター弥五郎どんを決める審査会は三日午後三時から八幡神社で行なわれ、ミスター弥五郎どんと準ミスター二人がそれぞれ決まった。この三人男は御神幸には露払い役を承る。

大隅町商工会主催の商店街連合大売出しは二日から始まり、買い上げ二百円ごとに、抽選券一枚を奮発してサービスに努めたが、三日の文化の日にはふだんより一五倍以上の売り上げがあった。このふんだと昨年より二倍以上の景気が出そうだと商店街ではホクホクしている。国鉄志布志管理所では五日、岩川駅を中心に、都城、志布志両駅間に上下線合計六本の臨時列車と各便に客車一両を増結する、一方三州自動車会社もいつか岩川営業所では各線に臨時バスを運行してサービスに努める。

なお午前八時から笠木、牧之原鹿鹿島方面は岩川高校前、また百引、市成方面は岩川小学校下から始発することになっている。申込みを受けているが、三日まで受け付ける。五日午前七時まで受け付ける。郷土民芸やのど自慢、三つの歌大会の芸能コンクール、南日本新聞社後援の弓道をはじめ柔剣道、相撲大会もすでに出場選手が申し込んでいる。

地元大隅町をはじめ鹿屋市、肝付、囃歌両郡、都城あたりから一流どころがお目見えすることになり、活気をみせている。そのあとを受けて、六日午前十時から岩川高等学校で大隅町民体育祭、七日は午後一時から岩川中学校でバドミントン大会のスポーツ絵巻をつぎつぎにひろげる。なおミスター弥五郎どんの審査会では、囃歌郡内から十四人が参加、審査の結果つぎのとおり決まった。

△ミスター弥五郎どん 田代司氏四十九歳、大隅警察署勤務防犯主任
△準ミスター弥五郎どん 勝目竹一氏五十一歳、大隅警察署勤務、警ら交通係長、警部補、大隅町在住、身長一メートル七〇、体重八十七キロ、柔道六段△同 中江光雄氏三十二歳、大隅職業安定所勤務、松山町在住、身長一メートル七〇、体重七十六キロ。

昭和34年11月5日 『南日本新聞』

○巨体ノッシ、ノッシ 大隅 三万人の出入に賑わう

【大隅】囃歌郡大隅町岩川八幡神社の弥五郎どん祭りは、五日午前二時打ち上げ花火を合図に、弥五郎どん起しこの行事があり、夜明けには社務所前の広場に巨体を現わした。夜明けを待つて参拝客の数は増え正午ごろ祭典が終つてから御神体の浜下り。露払いを受け賜つて待望の弥五郎どんが岩川小学校校庭までのし歩いた。身のたけ四メートル八十八センチ(一丈六尺) 太刀四

メートル五十四センチ(二丈四尺) 小太刀三メートル(九尺九寸) 持つた。ホコが五メートル四十五センチ(二丈八尺) 紅梅どめの晴れ着が二十五反、かぶった。面が一メートルという弥五郎どんのつしと参拝客を押しわけて登場ついで、ミスター弥五郎どんと準ミスターの三人男がまかりでて人気を呼んだ。御旅所で大休止してから午後四時過ぎ神社に引き揚げた。

この日絶好の秋日和にめぐまれ、参拝客はおよそ三万人(大隅署調べ) 汽車、バスは臨時運転した。

◇町をねり歩く弥五郎どん

昭和35年11月5日『南日本新聞』

○三万人の外出で賑わう 大隅の弥五郎どん

【大隅】昨下三人行事の一つ大隅町の弥五郎どん祭りは五日早朝から行なわれ、昨夜来の雨もあがって三万人の外出で賑わった。このあさ午前二時 打ち上げ花火と太鼓を合図に地元馬場壮年団 氏子ら二百人のかけ声で巨大な弥五郎どんが起され、二十五反(七十五メートル、大隅町K呉服店寄贈)の新調の衣しよをつけた。

午前十時祭典と浦安の舞いが奉納され、つづいて浜下りが行なわれたが、つゆい(原文ママ)の弥五郎どんは六メートルのてっかい体に四二メートルと三メートルの大小二本の太刀をぶち込んださむらい姿に早変わりし、ノッショッシと参拝客を押しわけてまかり通った。

一方、岩川小学校校庭では柔剣道、弓道、相撲大会、写真コンクールや色とりどりの芸能コンクールが繰り広げられた。この弥五郎どん祭りは六日も行なわれる。

◇まかり通る弥五郎どん

昭和36年11月4日『南日本新聞』

○あすから弥五郎どん祭り 演芸や相撲大会なども

【大隅】嚙喉郡大隅町岩川八幡神社の弥五郎どん祭りは五六の両日ひらき、多彩な催しをくりひろげる。五日は午前二時打ち上げ花火を合図に、氏子二百人がフエ、タイコに合わせて、ワッショイワッショイとかけ声をかけ、弥五郎どん起し。その後身のたけ五・七メートルの弥五郎どんに武士の衣装をつける。午前十時から祭典。正午から神幸にうつり、弥五郎どんは岩川小学校庭までねり歩き、午後四時帰る。六日は祭典だけ。このほか奉納行事はつきのとおり。

▽相撲大会 五日岩川小学校庭で都城 鹿屋両自衛隊対抗。高、中、小学校生徒対抗▽柔、剣、弓道大会 五日岩川小学校庭で▽芸能大会 五日町内特設舞台で県警察本部の音楽隊の演奏をはじめ、ノド自慢大会、三つの歌コンクール▽大隅町民体育祭 六日午前九時から県立岩川高校で。

昭和36年11月6日『南日本新聞』

○巨人、町をのし歩く 弥五郎どん祭りにぎわう

【大隅】県下三大祭りのひとつとして有名な嚙喉郡大隅町岩川八幡神社の「弥五郎どん祭り」は秋晴れの五日早朝から行なわれ、嚙喉郡内をはじめ鹿兒島、鹿屋、都城方面からの参拝客でにぎわった。

豊作景氣も手伝って、午出は昨年より多く、およそ五万人(大隅警察署推定)にのぼった。午前二時打ち鳴らす太鼓の音に合わせ、氏子、青年団など六百人の手で弥五郎どん起し行事に移った。身長五・五メートルに、二十反の梅染め衣装をまとい、十反の白もめんを帯びにし、大小二本の刀を腰に差した。巨人弥五郎どんの晴れ姿がで上がった。午前十時からの祭典は藤井宮司ののりにつづいて岩川中一年生の三

坂恵美子、北川加代、有村啓子、新原ヤス子さんらが、浦安の舞いを奉納した。そのあとご神幸に移り、岩川小学校までのお旅所まで沿道を通り、人垣をかき分け、ワッショイ、ワッショイ、とかけ声も威勢よく、六十人の人々に引かれながら、ノッショッシとまかり通り、お祭気分は最高潮。

午後一時から岩川小学校校庭で奉納柔、剣、弓道、相撲大会、写真コンテスト、三つの歌などがくりひろげられ、汽車、バスは終日臨時運行した。なお六日は午前十時から祭典を行なう一方、岩川高校で大隅町民体育祭を催す。

◇人がきをぬつてのし歩く弥五郎どん

昭和37年11月6日『南日本新聞』

○ハッピ姿も勇ましく 小雨の中、3万人の外出 岩川の弥五郎どん祭り

【大隅】県下の三大祭りの一つ嚙喉郡大隅町岩川八幡神社の「弥五郎どん祭り」は五日早朝から行ない、郡内をはじめ鹿兒島、都城方面から参拝客が詰めかけたが、早朝の小雨もようで外出は昨年より少なかった。午後からは雨もあがり、岩川小学校の演芸会場、相撲大会、柔剣道大会に人が集まり、およそ三万人の外出でにぎわった。

午前二時花火を合図に打ち鳴らす太鼓の音に合わせて、馬場壮年同志会員十五人が弥五郎どん着下りのハッピ、向こうはち巻ぎで弥五郎どん起し行事に移り、身長五・五メートル、二十反のシブ染めの衣装を着せ、面をかぶせ、十反の白もめんの帯をし、大小二本の刀を腰にさし同四時には、巨人弥五郎どんの晴れ姿がで上がった。

午前十時から祭典が始まり、藤井宮司ののりにつづいて岩川中女生徒が浦安の舞いを奉納した。同十一時から参拝客が押しかけ、人がきの中を岩川町のお旅所までワッショイ、ワッショイと掛け声も威勢よく数十人の人々に引かれながら階段をおり、お祭気分は最高潮に達した。

午後一時からは岩川小学校校庭に設けられた仮設舞台で、岩川中ブラバンドの演奏、陸上自衛隊音楽隊の演奏、三つの歌のど自慢大会、また街頭には約二百軒の店舗が立ち並び、終日にぎわった。

◇にぎわった弥五郎どん祭り

昭和38年11月6日『南日本新聞』

○晴れ姿弥五郎どん 岩川 参拝者せつと

【大隅】鹿屋三大祭りの秋の大祭として有名な嚙喉郡大隅町岩川八幡神社の「弥五郎どん祭り」は五日早朝から行ない、都城、鹿兒島方面から参拝客が押しかけた。

身長五・五メートル、竹籠製のからだに二十反の着物を着せ、十反の白もめんの帯をしめ、六メートルの大小二本の刀を腰にさし、同四時には、巨人弥五郎どんの晴れ姿がで上がった。

午前十時から祭典が始まり、藤井宮司ののりにつづいて岩川小六年坂元エツ子さんら四人が、浦安の舞いを奉納した。同十一時から押しかけた人がきの中をかきわけ、岩川小のお旅所まで子供に引かれ浜下りした。

一方、岩川小学校校庭では演芸会場、相撲大会、柔剣道大会、大隅署の弓道大会と神賑行事に人が集まり、また参道には出店が立ちならび、およそ三万五千人の外出で賑わった。

なお六日は五穀豊じょう感謝祭として午前十一時から祭典を始め午後三時に弥五郎どんを神社に収納する。

◇にぎわった岩川八幡神社の弥五郎どん祭り

昭和39年11月6日『南日本新聞』

○どつと三万人 大隅、弥五郎どんにぎわう

【大隅】嚙喉郡大隅町岩川八幡神社の弥五郎どん祭りは五日、三万人の外出でにぎわった。農業の神、武内宿禰を象徴する、弥五郎どんの祭りは、毎年収穫後の十一月五日に行なわれる大隅地方独特の秋祭り、鹿兒島神宮の初午祭り、志布志のお釈迦祭りとともに、大隅地方の三大行事の一つ。

この日八幡神社では午前二時から、弥五郎どん起し、の前夜祭が始まり、竹カゴをつくった身のたけ五メートル二十の弥五郎どんが梅染めのシヤク土色の単衣を着て刀を腰に六メートルのてっかいホコで持って仁王立ちする。夜明け前の午前五時ごろには神社に参拝する近郊の農家の人たちがどつと返した。昔は弥五郎どんの巨体を車にのせて神社から町をねり歩いたというが、今年は町の混雑や事故を防ぐために弥五郎どんの御神幸も神社の境内から神社下の岩川小学校の校庭どまり。

午前十時に御神幸の祭典が行なわれ、八幡神社の境内と岩川小の校庭は柔道、剣道、弓道、相撲の奉納試合や歌や踊りの奉賛演芸大会で大にぎわい。警察署前から八幡神社までの沿道には百三十軒の出店が立ち並んで雑踏整理のおまわりさんたちも汗だく。弥五郎どんの偉容をひと目みようと殺到する人の波は、朝から夕刻まで続いた。

都城や肝属、鹿兒島方面から見物に来る人もいて、この日だけでさつと三万人近い人出だった(大隅署の調べ)。昨年までは地元工の商工会が主催していたが、今年から大隅町と商工会の共催で行なっただけに、祭気分も一段と盛り上がり、刀剣展示会や盆栽交換会も人気を集めた。

◇ねり歩く弥五郎どん

昭和40年11月6日『南日本新聞』

○豊作祝いノッショッシ、ノッショッシ 盛大に弥五郎どん祭り

【大隅】曾於郡大隅町岩川八幡神社の秋の豊年祭、弥五郎どん祭りは五日、六万人を超える外出でにぎわった。

稲刈りもすみ久しぶりのカンシヨ景氣で笑顔をとりもどした農家の人たちがバスや汽車で続々つめかけた。恒例の八幡神社の例大祭はじまる午前十時ごろは演芸大会、相撲、柔道、剣道、弓道など奉賛行事会場の岩川小学校の校庭は人でいっぱい。神社の境内はもちろんで、岩川駅前から神社までのせまい道路は百五十余の露店が立ち並んで祭りの景氣をあおった。色とりどりに飾りたてた岩川の商店街から小学校まで県警察音楽隊と岩川中生徒の演奏パレード、数十発に打ち上げ花火で祭りは最高潮。昼すぎ名物弥五郎どんの五メートルもある巨体が山の上の神社からノッショッシと小学校の校庭までくりだすと黒山の群衆がドツと弥五郎どんのまわりを群がり交通整理のおまわりさんも汗だく。

MBCバンド伴奏のにぎやかなのど自慢大会をはじめ町内小中校対抗の相撲、柔道、弓道の試合が夕暮れまで続いた。一方商店街は神社創設百四十周年記念の大売出し。本町公民館の切手展や菊花展、オモト展示交歓会など盛りだくさんの催しで町は終日どつとがえした。

◇人波ぬつてねり歩く弥五郎どん

昭和41年11月7日『南日本新聞』

○巨体見ようと六万人 大隅、弥五郎どんにぎわう

【大隅】秋の豊作を祝う名物、弥五郎どん祭り、とライオンズクラブの晴れの証伝達式がささって五六の二日間、曾於郡大隅町はお祭一色に包まれた。人出も例年の約一倍、延べ六万人を超す見物客で

町は大にぎわい。

岩川八幡神社の弥五郎どん祭りの初日は、氏子や青年たちの手でつくられた身のたけ五メートルあまり、三メートルあまりの両刀を差した祭神武内すくねに似たり。弥五郎どんがノッソ、ノッソと神社下の岩川小学校庭まで浜下りして最高潮。快晴にめぐまれ、初日の人出は約三万人、岩川小の校庭では舞台がつくられて県警や岩川中のブラスバンドの演奏会、そして小、中学生の相撲や柔道、弓道の奉納試合でにぎわった。神社下から岩川の町へ通ずるせまい道路は二百軒近い露店が軒をならべた。二日目の六日は、大隅ライオンクラブのチャーターナイトが午後零時半から岩川小講堂で行なわれ、七地区ガバナーの荒巻逸夫氏から大隅ライオンズクラブの渡辺信雄会長に国際クラブからの晴れの認証状が手渡された。遠く愛知県一宮市の中クラブをはじめ九州各県、県内の各クラブなどから六百人の会員たちが出席して、大隅クラブの会員四十五人を祝福し合った。

二重のお祭りにわきたつ岩川の町は、近郊からバスを仕立てた見物客でいっぱい。県外のライオンズクラブのお客さんたちも弥五郎どんの巨体にはびつくりしていた。

◇弥五郎どんを囲んでにぎわう岩川小の校庭

昭和42年11月6日『南日本新聞』

○弥五郎どんのつし、のつし 大隅町に五万人

【大隅】鹿野三太祭りの一つ曾於郡大隅町名物の、弥五郎どん祭りは五日、小雨の降る中で開かれ、近郊近から約五万の観衆が押しかけ町は祭り一色に包まれた。

この日、大隅町岩川の八幡神社では午前二時から弥五郎どん起こしの祭事にあつ、同十一時半、同社を出発した弥五郎どんは参道を埋めつくす観衆に見守られながら岩川小学校庭に姿を見せた。身長四・八五メートルの巨体を二十五反もある梅ぞめの衣に包み、腰には四メートルと一五メートルの大小の刀をさした威容を見ようとして校庭は人波で埋まった。

弥五郎どんはいつたん校庭に安置され午後三時すぎ、八幡神社に帰ったが、校庭では奉納行事の剣道、柔道、相撲大会やのど自慢、演芸大会が開かれ黒山の人だかり。旧県道の馬場通りには約百軒の出店がずらり並び、人どおりで身動きもできないありさまだった。

とくにこしは米、カンショ作など記録的な豊作とあつて人出は小雨もよりの天気にもかかわらず、昨年を上回るにぎわいを見せ、出店の売れ行きも上々。農村景気よさを物語り、汽車やバスは超満員だった。

◇岩川の八幡神社から校庭へ姿を見せた弥五郎どん

昭和43年11月5日『南日本新聞』

○きょうから弥五郎どん祭り 大隅町 十数年ぶり浜下り復活

【大隅】鹿野三太祭りの一つに数えられる、曾於郡大隅町八幡神社の弥五郎どん祭りは五、六の二日間、開かれる。こしは十数年ぶりに同町岩川の市街地へ弥五郎どんの浜下りも復活、一日で終わつた祭りが二日間、盛大に行われるとあつて、前年をささっている。

五日は、午前二時に弥五郎どん起こしのふれ太鼓が、青年たちの手でたかれるのはじまり、四時から弥五郎どん人形づくり、十時から八幡神社で祭典、十一時に浜下りの神賑(しんじん)行列が八幡神社を出発、岩川小学校庭にたん落ち着いたあと、午後三時に小学校を公発して岩川中心街を、鹿交バス駐車場まで浜下りして、同夜は中央公民館のご神幸所に一泊する。

六日は午前十時に出発、八幡神社へ帰るが、二日間のご自慢や演芸大会、ナンコ大会、オモト展、奉納柔剣道など盛りたくさんの神賑行

事が計画されており、二万人を越す人出でにぎわいそう。神賑行事日程次の通り。

五日 相撲、剣道、柔道、弓道大会(いずれも午前十時から岩川小ナンコ大会(午後一時、同) 演芸大会(午後六時、同) オモト展(午前九時、中央公民館六日まで)

昭和44年7月17日『南日本新聞』

○弥五郎どんでできる 来月末に万国博へ発送

【大隅】大阪で開かれる万国博覧会に出品が決まった曾於郡大隅町の名物、弥五郎どんの模型ができ上がり十五日、同町岩川の八幡神社で県文化財保護委に引き渡しの儀を終わり、同日組み立てのりハサルがあつた。

身長五メートルのおばけ人形の弥五郎どんは、同町岩川、泉木工の川上久雄さん三人の手で二カ月かかりで製作、二十五反もある梅染めの着物は同町岩川の馬場婦人会が引き受けて縫い上げた。また長さ一・二メートル、幅七センチもあるおばけけたと長さ三メートル、幅一メートルのおばけぞりも新調。制作費は二十三万円の打ち切りで出血サービス。

万国博出品は東京の民俗研究会からの依頼だが、同町商工会青年部が発送までの管理と荷造り、組み立てを引き受け、八月末に発送して九月に会場での組み立てをする予定。

十五日は、たまたま同社の六月灯、新調の弥五郎どんを同社境内で青年部員らが組み立て、できぐあいを調べたが、本物をしのぐすばらしいできばえに、これなら万国博で国際的な顔になる、と、関係者たちもほっと安心。

◇万国博に出品される本物顔負けの弥五郎どん

昭和44年7月28日『南日本新聞』

○弥五郎どん繰り出す

【大隅】曾於郡大隅町の夏まつりは万国博に出品される弥五郎どんをはじめ、町内各地の棒踊りなど郷土民芸も新たに参加、こしは例年になりにぎわいだった。

二十五日の前夜祭は、同町岩川の官軍墓地の慰霊祭を中心に、柔剣弓道、銘柄あて、スイカ割りなどで祭り気分を盛り上げた。二十六日の本祭りは、午前十時半に鹿児島交通駐車場をスタートしたパレードが、岩川の中心街をねり歩いた。

子どもみこしを先頭に、岩川中のブラスバンド、小学生の武者行列についで万国博参加の弥五郎どんが登場、沿道を埋めた町民の人氣が大隅音頭、月野、神幸礼の棒踊りや太鼓踊りなど延々一キロ以上の行列が続き、暑気も吹き飛ばすにぎわいだった。

夜は中央公民館前広場で演芸大会が開かれた。

◇初めて夏祭りに登場した弥五郎どん 大隅町岩川で

昭和44年11月5日『南日本新聞』

○きょうから弥五郎どん祭り 大隅町 郷土民芸も初参加

【大隅】曾於郡大隅町岩川、八幡神社恒例の弥五郎どん祭りは、五、六の両日催される。こしは祭りを一段と盛り上げるため、町内の郷土民芸も初参加、浜下りに色をそえる。

二日間の日程は、五日午前五時弥五郎どん起こしのあと午前十時本殿祭、十一時八幡神社と弥五郎どんが出動、岩川小学校庭の第一ご神幸所にて、正午浜下りに出発する。浜下りは上馬場一郡畜産連前町役

場前―鹿交バス駐車場から折り返し、第二ご神幸所の中央公民館に午後四時着、同夜は公民館に一泊する。

六日は午前十時、第二ご神幸所を出発して大隅合庁前―上道―上馬場を経て午前十一時、岩川小の第一ご神幸所へ帰る。奉納行事は岩川小と中央公民館を主会場に、剣道、弓道、オモト展、演芸会などがあり、万余の人出が予想されている。

昭和44年11月6日『南日本新聞』

○ノッソノッソ弥五郎どん

【大隅】鹿野三太祭りの一つ、曾於郡大隅町の弥五郎どん祭りは五日あつた。例年小出で終日たたられどおしだったが、こしは快晴に恵まれ、二万を越す人出で終日ににぎわった。

祭りは午前二時、同町岩川八幡神社の神事に始まり、町民たちが深夜から参拝に押しかける中で、午前五時弥五郎どん起こしが行なわれた。午前十一時、弥五郎どんが出動、神社下の岩川小学校庭に定められた第一ご神幸所に着き、校庭では弓道、剣道、相撲のほか、国分自衛隊のブラスバンド、それにこし初参加のから手など奉納行事が繰り広げられ、校庭は人の波でうまった。

午後三時、弥五郎どんの浜下りに移り、上馬場通りから役場前―中心街―鹿交バス駐車場―中央公民館のコースを身のたけ四・八メートルの巨大な弥五郎どんがノッソノッソとねり歩き、沿道は見物客で人がきをつくった。一方、小学校から上馬場、東馬場の県道筋には鹿児島市や都城方面から押しかけた露店が店を張り、客寄せに懸命。岩川の商店街でも立ち出しに例年ない力を入れ、近年になりにぎわいだった。

◇子供たちにも引かれて、浜下りに町に出る弥五郎どん

昭和45年10月28日『南日本新聞』

○来月五日、弥五郎どん 大隅町 から手、柔、剣道大会も

【大隅】県下三太祭りの一つ、曾於郡大隅町の八幡神社弥五郎どん祭りは、十一月五、六の両日盛大に行われる。

初日五日は、午前二時から起こし太鼓のあと前夜祭「弥五郎どん起こし祭」がある。午前十時から本殿祭について、岩川小学校庭で浜祭。いよいよ祭りは最高潮に達し、弥五郎どんの浜下りとなって市街地をねり歩く。パレードには岩川中学校のほか自衛隊ブラスバンド、岩川小鼓笛隊、同町神幸礼の太鼓踊り、月野の棒踊りも参加する。

この日、岩川小学校庭では、本社後援の全大隅地区選抜から手道選手権大会をはじめ、柔、剣、弓道、銃剣道、相撲大会などが開かれ、各選手が目ごころのわざを競い合う。また、町中央公民館では、オモト、生花、菊の展示会も開かれる。

二日目六日は、町中央公民館から、弥五郎どんが公発、目抜き通りを歩き、八幡神社へ向かう。なお祭りに、約五万人の人出が予想される。岩川商店会は、二日から三十日まで大売り出しを行なうとともに、各商店の店頭には「奉納のぼり」を立て、祭り気分を盛りあげる。

昭和45年11月5日『南日本新聞』

○きょうから弥五郎どん祭り 大隅町

【大隅】県下三太祭りの一つ、曾於郡大隅町岩川八幡神社恒例の弥五郎どん祭りは五、六の両日、にぎやかに繰り広げられる。

初日は、まず午前二時から同神社境内で神事が始まり、同五時、弥五郎どん起こしが行なわれる。本殿祭について午前十一時から浜祭。いよいよ弥五郎どんが出動、神社下の小学校校庭の第一ご神幸所に着き、午後三時から浜下りとなって市街地を練り歩く。パレードには岩川小

鼓笛隊、岩川中、それに自衛隊のプラスチックバンド、さらに同町神幸礼の太鼓踊り、月野の棒踊りも参加、祭りに花を添える。

この日、岩川小学校では本社後援の全大隅地区選抜から手選選手権大会、柔道、剣道、弓道、銃剣道、相撲の各大会のほか、演芸会が開かれる。また第二会場の町中央公民館では日本刀やつばのほかに生け花、菊の展示会も開かれる。

二日目六日は町中央公民館から弥五郎どんが出発、目抜き通りを練り歩いて八幡神社へ帰る。祭りには約五万人の人数が予想され、岩川の商店街ではすでに各店が染め抜きの奉納のぼりを立てて祭り気分を盛り上げるとともに、二日から大売出しを始めている。

昭和45年11月6日 『南日本新聞』

○弥五郎どん祭り ノッシ、ノッシと浜下り

【大隅】県内三大祭りの一つ、曾於郡大隅町岩川八幡神社の「弥五郎どん祭り」は五日行なわれた。朝から快晴に恵まれた三万人を超える人出でにぎわい、「過疎の町」も近年にない活気にあふれた。

同日午前二時同神社境内で神事。町商工青年部の若者八人が触れ太鼓をたたいて街中を練り歩いた。早朝から町民たちが参拝に押しかけるなかで午前五時半、弥五郎どん起こしが行なわれた。この起こしの綱を引くと元気な子どもに育つといい伝えがあり、約百五十人の子どもたちが綱を引き、大男弥五郎どんが台車の上にもつくと立ち上がった。

泣く子も黙るいかめしい顔。身のたけ四・八五メートル、左腰には四・二五メートル、二・八五メートルの大小刀を差し、黒塗りの印ちろう、右腰には茶色のたばこ入れ。さらに大げた、大ぞうり、大がさをそろえてのいでたち。午前十一時半、打ち上げ花火とともに弥五郎どんが出動。神社下の岩川小学校庭に定められた第一神幸所に着いた。岩川小の鼓笛隊を先頭にしたパレードが町を練り歩くなど祭りは最高潮。

同小学校庭では本社後援の全大隅地区選抜から手選選手権大会、剣道、柔道、弓道、相撲、銃剣道大会。それに岩川中や自衛隊のプラスチックバンド演奏、演芸大会などが練り広げられ、校庭は人の波で埋まった。午後三時半から弥五郎どんの浜下り。上馬場通りから役場前、中心街、鹿兒島交通駐車場前、さらに折り返し、第二神幸所の町中央公民館へと、巨大な弥五郎どんは「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声で白はち巻きにはつぎ姿の子どもたちに引かれてノッシノッシと練り歩いた。

一方、第二神幸所では日本刀や生け花、菊の展示会も開かれた。また岩川小から上馬場、東馬場の県道沿いには鹿兒島市や都城城市方面の露天商が軒をつらね大にぎわい。岩川の商店街でも「奉納のぼり」を立てて大売出しに懸命だった。

二日目の六日は弥五郎どんが午前十時町中央公民館を出発して正午八幡神社に帰り着く。ノッシ、ノッシと「浜下り」に向かう弥五郎どん。子供たちに引かれ、ノッシ、ノッシと「浜下り」に向かう弥五郎どん。

昭和46年11月6日 『南日本新聞』

○ノッシ、ノッシ弥五郎どん 大隅町 「過疎の町」に3万人の人出

【大隅】鹿島三大祭りの一つ、曾於郡大隅町岩川八幡神社の「弥五郎どん祭り」は五日から始まった。初日は朝から快晴に恵まれ、約三万人を超える人出でにぎわい「過疎の町」と思えぬ活気にあふれた。

身のたけ四・八五メートル、さげた口にギョロリとした目、泣く子も黙るいかめしい顔に、二十五反の梅染めのかつ色のひとえはかま、二十

反のさらしめんの帯、左腰には大小刀をさし、右腰には黒塗りの印ちろうの肩に乗つての若者もまるで小人のよう。

午前十一時半打ち上げ花火とともに二十四人の子供たちの引く綱に引かれて、弥五郎どんはユラリユラリと参道をおりて、岩川小の神幸所についた。五穀豊じょう、商売繁盛を願う人々が参道に列をなし、岩川小鼓笛隊や岩川中プラスチックバンドが町を練り歩くと、祭りは最高潮。

境内では、ことし初めての茶道裏千家の野だても開かれ、一方同小学校庭では、本社後援の全大隅地区選抜から手選選手権大会、剣道、柔道、相撲、弓道、銃剣道大会。

午後三時半から浜下り。上馬場通りから役場前、商店街を抜けて、第二神幸所の町中央公民館へ。「ヨイショ」「ヨイショ」のかけ声で、白はち巻きに梅染めのハッピ姿の子供たちに引かれて、弥五郎どんはノッシ、ノッシと練り歩いた。

昭和47年11月4日 『南日本新聞』

○太鼓踊り演芸会も 大隅町 あすから弥五郎どん祭り

【大隅】県内三大祭りの一つ、曾於郡大隅町岩川八幡神社の弥五郎どん祭りは五、六の両日、盛大に行なわれる。

初日は午前二時から氏子三十人の弥五郎どん起こしで始まる。午前十時から本殿祭。同十一時から第一会場の岩川小へ身たけ五メートルの弥五郎どんがノッシノッシと浜下り。このあと、午後三時から岩川小を御神幸が出発、目抜き通りを歩いて第二会場の町中央公民館へ。弥五郎どんは公民館に一泊。二日目の六日午前十時から御旅所の同公民館を出発して、同午後四時、八幡神社に奉納される。

この日は熊本自衛隊のプラスチックバンドが参加するほか、岩川小学校庭では太鼓踊り、本社後援の相撲、柔道、剣道、弓道、空手道、銃剣大会がある。

また第二会場の町中央公民館では、午後六時から演芸大会。町文化協会のコーラスのほか、美術、短歌、俳句、写真、刀剣、ツボ、菊、オモト展が開かれる。祭りには四・五万人の人出が予想される。このため、大隅署は、図のように交通規制を行ない、一般の車は岩川高校下の県道志布志、福山線の片側駐車を呼びかけている。

昭和47年11月6日 『南日本新聞』

○「弥五郎どん」 人の波ぬい練り歩く、武道や演芸も

【大隅】鹿兒島三大祭りの一つ、曾於郡大隅町岩川八幡神社の「弥五郎どん祭り」は五日から始まった。初日はくもり空の天気だったが、ことしは日曜日と重なり、四万人を超える人出でにぎわい「過疎の町」と思えぬ活気にあふれた。

同日午前二時、若者たちがふれ太鼓をたたいて町を練り歩くと、同神社には早朝から参拝客が詰めかけ、弥五郎どん起こしが行なわれた。起こしの綱を引くと元気な子どもに育つと伝えもあつて、子供たちに引かれて大男・弥五郎どんが台車の上にもつくと立ち上がった。身のたけ四・八五メートル、さげた口にギョロリとした目、泣く子も黙るいかめしい顔。四年ごとに着物と帯をつくりかえるならわしがあつて、ことしは真新しい二十五反の梅染めの着物に、同じく二十五反のさらし木綿の帯、左腰には大小刀、右腰に黒ぬりの印ちろう、たばこ入れ、大げた、

大ぞうりをそろえてのいでたち。弥五郎どんの肩に乗つた若者もまるで小人のよう。

午前十一時半、二十人の子供たちの綱に引かれて、弥五郎どんはユラリユラリと参道をおり、岩川小の神幸所についた。五穀豊じょう、商売繁盛を願う人々が参道に列をなし、岩川小、中学校、熊本自衛隊の鼓笛隊やプラスチックバンドが町を練り歩き、祭り気分を盛り上げた。

境内では、茶道の野だてもあり、岩川小では本社後援の空手、剣道、柔道、相撲、弓道、銃剣道の武道大会もあつて、校庭は人の波で埋まった。午後三時半から上馬場から第二神幸所の町中央公民館へ。ご神幸の露払い役・弥五郎どんは「ヨイショ」「ヨイショ」のかけ声の子供たちに引かれて、ノッシ、ノッシと歩いた。

同神社前から上・東馬場の道路わきには百軒を超える露店が並び、昔ながらの市でにぎわい、同公民館では夜演芸大会も開かれた。なお二日目の六日は、弥五郎どんが午前十時公民館を出発して、正午八幡神社に帰りつく。

昭和47年12月18日 『鹿兒島新報』

○11月5日の弥五郎どん祭り 来年から文化の日 大隅町一心会 日程変更働きかけへ

【大隅】曾於郡大隅町一心会（盛田政義会長・会員八十五人）十二月定例会は十三日、同町岩川のかさで会員五十人が出席して開き、新会員の紹介や、弥五郎どん祭りの日程変更など提案があつた。

同日はまず大隅税務署長の内田信男さん（三〇）ら八人の新会員紹介、ついで会長の盛田政義氏が町政の概況について説明、このあと会員紹介、オリエンテーリング（歩行競技）に参加し社会体育の振興について考えること（野上田耕二）②祝祭日に国旗を掲げる運動の推進について（山口長至）③電柱の貼紙規制について（長井順一）、また坂口鷹町商工会町から例年十一月五日の弥五郎どん祭りを、来年から時代の流れに沿い、文化の日の十一月三日に祭日変更したいとの意見提言につき、同会これらを認め、近く神社側に働きかけることにした。このほか鹿兒島交通岩川営業所の安楽益一所長から、当営業所で航空券の取り次ぎが電話一本でできるようになったので、利用してほしいとの要望があつた。

また町当局からも、明るく住みよい町づくり運動の推進についての連絡事項を傳達した。なお新会員の次のとおり。内田信男（大隅税務署長）佐賀直幸（鹿兒島銀行岩川支店長）東良一（岩川高等中学校長）川崎祐幸（大隅町教育委員長）横川忠幸（岩川郵便局長）井戸義治（九建コンクリート大隅工場長）大月昭男（福田紡績大隅工場長）森田信太郎（農林省宮崎種畜場鹿兒島支場長）

昭和47年12月1日 『鹿兒島新報』

○きょう要望を協議 大隅町の岩川八幡神社 弥五郎どん日程で

【大隅】曾於郡大隅町商工会（坂口篤会長）は、同町の岩川八幡神社側（例年十一月五日の弥五郎どん祭りを文化の日）の十一月三日に変更してほしい」と要望を出した。

同祭りは九百五十年の伝統をもつ県下三大祭の一つで、また巨匠人崇拜の異色の祭りとして全国にも広く知られている。祭りは毎年十一月五日に行なわれ、最近では祭りは祭りのあおりを受け休日説が高まっていた。

ところがことし祭りがたまたま日曜日と重なったことから、例年五万人を割っていた人出がこれをはるかに上回る七万人近い参拝客でにぎわ

い、休日祭礼の効果を立証させた。こうしたことで町商工会、町観光協会など関係機関の間で急にその「三日説」を推進する声が高まったもの。

同要望書は「祭りを単なる神社側だけのものではなく地域住民みんなのものとして今後発展させていくために、国民の休日である十一月三日が望ましいので来年からぜひ変更してほしい」という趣旨。

これに対し同神社の殿島司は「私たちの独断ではできないが、しかし地域住民のこうした声が強ければ、みんなの意思に沿うよう最善の努力をしたい」と話している。

なお、神社側としては同問題について三十日午後一時から社務所で宮司、氏子総代それに代々社家として仕えている宮仕（みやだち）三者が集まって協議会を開くことにしている。

昭和48年6月26日『鹿兒島新報』

○さて行事さばきいかに？商工会と八幡神社 近く両者で話し合い 弥五郎どん祭り日程で

【大隅】名物行事、弥五郎どん祭り、の日程問題でもめ続けた。曾於郡大隅町では、意見の対立していた八幡神社と町商工会の両者による話し合いが近日中に開かれることになった。この話し合いは仲裁役を買って出た町観光協会（真竹善範会長）のキモ入りで行われるもので、町長の盛田政義氏も観光協会顧問という立場で出席し、両者の意見調整に乗り出す予定。最近、両者とも歩み寄りの姿勢を示しているといわれるだけに、町民全体が深い関心をもちその成りゆきを見守っている。

関係者の話によれば、今秋の「弥五郎どん祭り」は両方の言い分を半分ずつ取り入れて「十一月三日、五日」の三日間にわたって開催される見通しをもっとも強いという。「変則的なスケジュールにはなるが、これなら両方とも文句のつげようがない」というのが大方の見解。もともこの祭りは毎年十一月五日の両日行なわれるのが慣例になっていたが、三四五日の三日間にわたって開かれるのは今回が初めて。事の発端は毎年十一月三日、四日に変更してほしいと神社側に文書で申入れ、これに対し「氏子の総意からも従来の十一月五日を変更できかねる」と神社側が回答したことに始まる。ここで意見が真っ向から対立、ヘソを曲げた商工会は、弥五郎どん祭りには協賛しないことを理事会で決定済みだった。しかし、商工会が協賛しないと祭りの運営に支障をきたすことは目に見えて明らか。町当局も両者の意見対立に苦慮していたが、さいわい観光協会の「助け舟」で今回は円満に決着がつけそうな模様。

今回の話し合いが取り急ぎ開かれることになった裏には、八幡神社の「六月灯」が間近に迫っていることがあげられる。この「六月灯」には商工会青年部の奉仕活動が是非とも必要で、弥五郎どん祭りの日程問題が解決しない限り商工会青年部としては「六月灯」にも協力できないとする強硬な意見があるため。

いずれにせよ、弥五郎どん祭り、は県下三大行事のひとつといわれるほどの大々的な祭りにのしってきた。とすれば県民が気軽に見物に行けるよう十一月三日（文化の日）に日程を引き寄せた商工会側の意見にも一理ある。また「祭りの伝統をそのままに保たれるものではない」とする神社側の主張もゴモットモ。町観光協会がどんな行司さばきを見せるか、関心が持たれている。

昭和48年10月18日『鹿兒島新報』

○11月3、4、5の3日間 大隅町 弥五郎どん祭り 町商工会 八幡

神社 話し合いで円満解決
【大隅】県下三大行事の一つとして名高い曾於郡大隅町の「弥五郎どん祭り」は、日程変更をめぐって意見が食い違い、調整が続けられていたが、町商工会と岩川八幡神社の間でこのほど円満に話し合いがつき、今年から十一月三、四、五日の三日間にわたって開催されるのが正式に決まった。

この話し合いにはオブザーバーの盛田政義町長をはじめ、橋渡し役を買って出た町観光協会、商工会、同青年部、八幡神社宮司、氏子総代など関係者が集まり、日程変更の問題をめぐって真剣な討議がなされた。その結果、町商工会は「十一月五日の例祭はどんなことがあっても変更できない」とする氏子の総意を尊重して素直に受け入れ、そのかわりに武道大会をはじめ各種の奉賛行事を十一月三日（文化の日）と四日に引寄せるとして合意をみたもの。

このなりゆきをヤキモキしながら見守っていた町民たちもホッと表情。町商工会ではさっそくこれから本格的な祭りのプランづくりに乗出す予定だが、調停役をつとめた真竹善範氏（町観光協会会長）は「大々的に、弥五郎どん祭り」を盛り上げようとする熱意が、かえって意見の食い違いを生んだ。町内の低迷ムードを打ち破るためにも「弥五郎」を大隅町発展のための起爆剤にしたい」と語っている。

昭和48年11月2日『南日本新聞』

○浜下り行列や演芸会 あすから「弥五郎どん祭り」
【大隅】県下三大行事の一つ、曾於郡大隅町岩川、八幡神社の「弥五郎どん祭り」は、十一月三日、四、五日の三日間、盛大に行われる。

初日の三日は、午前二時から氏子三十人の弥五郎どん起こしで始まる。午前十時から本殿祭。午後一時から第二会場の岩川小へ身のたけ五メートルの「弥五郎どん」がノッシ、ノッシと浜下り。このあと午後二時から岩川小を御神幸が出發。目抜き通りを歩いて第二会場の町中央公民館で休憩後、同四時すぎには八幡神社に奉納される。ことしは国分自衛隊と県警 brass band が二日目の四日にパレードするほか、スポーツ大会や演芸大会など盛りだくさんのプログラムが組み込まれている。

三日は午前九時から岩川小グラウンドで本社後援の相撲、柔道、剣道、弓道、空手道、銃剣道、町中央公民館では午後六時から演芸大会。町文化協会のコーラス、詩吟、剣舞、民謡、美術、短歌、俳句、写真、刀剣、民具、菊、オモト、盆栽展などがある。

二日目の四日はパレードのあと岩川小で神幸礼部落の太鼓踊りや月野の棒踊りなど郷土民芸大会もあり、夜は中央公民館ホールで演芸大会。また期間中、大隅町内小中生の作品も岩川小体育館で展示される。なお祭りには、四、五万人の出入が予想されるため、大隅警察署は三、四の両日午前九時から午後六時までⅡ上Ⅱのような交通規制を行う。◇弥五郎どん祭り交通規制

昭和48年11月4日『南日本新聞』

○ノッシノッシ浜下り 岩川八幡 弥五郎どん 四万人
【大隅】曾於郡大隅町岩川八幡神社の「弥五郎どん祭り」は三日からはじまった。朝から快晴に恵まれ、四万人を超える人出でにぎわい、かねての「過疎の町」も活気にあふれた。

三十人の子どもたちが綱を引き、大男の弥五郎どんが台車の上にむくと立ち上がった。
泣く子も黙るいかめしい顔、身のたけ四・八五メートル、左側には四・二五メートル、二・八五メートルの大小刀を差し、黒塗りの印ろう、右腰には茶色のたばこ入れ、さらに大げなをそろえてのいでた。午後一時、打ち上げ花火とともに弥五郎どんは出發。神社下の岩川小学校庭に定められた第一神幸所に着いたあと町を浜下り。「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声で白はち巻きにはつび姿の子どもたちに引かれてノッシ、ノッシと練り歩いた。

昭和49年11月2日『南日本新聞』

○大隅町 浜下りや郷土芸能 あすから「弥五郎どん祭り」
【大隅】曾於郡大隅町岩川、八幡神社の「弥五郎どん祭り」はことしも三、四、五日の三日間、盛大に行われる。

三日は、まず午前五時から氏子二十人がでて弥五郎どん起こし。午前十時から本殿祭が行われる。このあと午後一時半から第一会場の岩川小へ身のたけ五メートルの「巨人」弥五郎どんがノッシ、ノッシと浜下り。午後二時半から岩川小を御神幸が出發。中園、河原、高校下、目抜き通りをのし歩き第二会場の町中央公民館へ。昨年はその日に神社に奉納されたが、ことしは例年どおり公民館に一泊する。

翌四日は午前十時に旅所を出發、同十一時半には還奉される。この日は陸上自衛隊 brass band と岩川小バンド、鼓笛隊も出場。午前十時半、鹿兒島交通バス駐車場から岩川小まで市中パレードする。また特設舞台では郷土芸能の棒踊り、太鼓踊り、そばきり踊りも披露される。

一方、午前九時から岩川小グラウンドでは、恒例の武道大会、相撲、柔道、銃剣道、剣道、弓道、空手道がくりひろげられる。また町中央公民館では文化協会のコーラスやギタークラブの演奏会、詩吟、民謡グループの演舞。さらに町文化協会の絵画、書道、写真、菊、オモト展示、伝統美術などが五日まで展示される。ことしは特に町老人趣味の会の手になる作品展示即売会も慰霊塔前広場にアイデアいっぱいのお土産品が出品され、好況が予想されている。

二日目の四日は午前十時から岩川小仮設舞台でふるさとの舞踊大会。夜は午後六時から町中央公民館でも開催の予定。最終日の五日は行事はほとんど終わり、八幡神社の大祭が行なわれる。なお祭りには五万人の出入が予想されるので、大隅警察署は三、四日の両日、午前九時から午後六時まで交通規制を行う。◇弥五郎どん祭り交通規制

昭和49年11月4日『南日本新聞』

○ノッシと、弥五郎どん 岩川八幡 五万人押す安押すな
【大隅】鹿兒島県三大祭りの一つ、曾於郡大隅町岩川八幡神社の弥五郎どん祭りが、三日から始まった。快晴に恵まれ、約五万人の出入。過疎の町でも久し振りに活気があふれた。

同日午前五時商工会青年部の若もたちが弥五郎どん起こしを行なった。綱を引くと元気な子に育つとあって、子供たちに引かれて大男、弥五

郎どんが台車の上にもつくと立ち上がった。身のたけ四・八五メートル、さけた口にギョロリと目、泣く子も黙るいかめしい顔。二十五メートルもあるさらし木綿の帯、左腰に大小刀、右腰に黒い巾着。たばこ入れ、大ゲタ、大ぞうりをそろえていた。さらにこのしは新しいもう宗竹の太とくりまで巻きつけた。

午後二時打ち上げ花火とともに二十人の子供たちの綱に引かれて弥五郎どんはユラリ、ユラリ参道をおり岩川小の神社所につく。参道は五穀豊じょう、商売繁盛を願う人たちがいっぱい。岩川小鼓笛隊と陸上自衛隊ブラスバンドは町をパレード、祭り気分をさらに盛りあげ最高潮に達した。

境内には野だてや老人クラブの人たちが丹精こめてつくりあげた作品展示会など特設され、おみやげ品の、やごろうとつくり、が人気を呼んだ。スポーツ会場の岩川小グラウンドは空手、剣道、柔道、相撲、弓道、銃剣道の武道大会で熱戦をくりひろげ、広いグラウンドも人の波で埋まった。

午後三時から浜下り、町をねり歩いて町中央公民館へ。弥五郎どんは「ヨイショ」「ヨイショ」のかけ声で白はち巻きにはび姿の子供たちに引かれてノッソ、ノッソと歩いた。

神社周辺には百軒を超える露店が並び、昔ながらの岩川の市でにぎわう。中央公民館は演芸会や文化祭の展示物でいっぱい。

◇子供たちにひかれノッソ歩く弥五郎どん

昭和50年11月3日『南日本新聞』
文化祭、武道大会も
○きょうから、弥五郎どん、大隅町、文化祭、武道大会も
【大隅】曾於郡大隅町岩川八幡の「弥五郎どん祭り」が三日から五日まで行われる。

三日は八幡神社境内で午前五時からまず氏子代表による、弥五郎どん起こし。午前七時半本殿祭が行われ神楽など奉納。このあと午後二時身のたけ五メートルの巨人弥五郎どんが御座所を出発。のつしと石段をおり、いったん岩川小校庭へ。休息のあと午後四時かたやいよ御神幸の、浜下りがスタートする。道順は中園、河原をへて本町本通りに出、鹿児島交通車庫付近から折り返し中央公民館に至るコース。中央公民館に一泊した弥五郎どんは四日午前十時ここを出発、馬場の旧道を通って神社に帰る。最終日の五日は午後三時から神社大祭が行なわれ弥五郎どんは解体される。この三日間、武道大会、演芸大会、町文化祭などが岩川小や中央公民館で行われ、およそ五万人の人数が見込まれる。なお三、四日は馬場本通り一帯が車進入禁止となるほか、国道なども大幅な交通規制が行なわれるので、特に町外からの見物客は十分注意するよう大隅署は呼びかけている。

昭和50年11月4日『南日本新聞』
秋さわやか、弥五郎どん、街へ のつし、のつしと浜下り 岩川
○秋さわやか、弥五郎どん、街へ のつし、のつしと浜下り 岩川
連休も重なってどこも人出最高
秋の連休さわやかな秋晴れに恵まれた鹿児島は、祭りで明け、祭りで暮れた。「文化の日」の三日、鹿児島市の「おはら祭」は、二日目に入ってさらに盛り上がり、二、三日の両日でこれまでの最高五万人の人数を記録した。大隅町では伝統の「弥五郎どん祭り」。過疎の町は素朴なムードで久しぶりに活気づいた。また紅葉シーズンに入った霧島には約五千台のマイカーが繰り出し、指宿・長崎鼻も新婚さんや家族づれでいっぱい。どの観光地もこの秋最高の行楽客でにぎわった。

【大隅】鹿児島県三大祭りの一つ大隅町名物「弥五郎どん祭り」がことしとも三日開幕、観光客など約五万人の人数(大隅署推定)でにぎわった。

弥五郎どんは岩川八幡の祭神である武内宿禰がモデルといわれ、身のたけ四・八五メートル、二十五反の梅染めの衣をまとい四・二五メートルと二・八五メートルの太刀を腰におびて町をのし歩く巨人弥五郎どんの、浜下りがハイライト。

初日の三日はまず午前五時から八幡神社境内で、弥五郎どん起こし。組み立てられた弥五郎どんを引きこす時、綱をさわれれば無病息災との言い伝えがあり、早朝の境内は暗いから親子づれがつかめかけた。弥五郎どんは午後二時境内を出発、いったん石階段を降りきつた近くの岩川小校庭に休息し、おちから校庭いっぱいになり広げられた少年たちの柔道、剣道の試合をじろりじろりと観戦。

午後四時、花火を合図に弥五郎どんはやおら腰を上げ、ハッピー姿の子どもたちにひかれて浜下りへ出発。沿道からは「ヨイショ、ヨイショ」と掛け声が飛び、祭り気分は最高潮。岩川の街をひと回りした弥五郎どんはことしの日の宿泊所、中央公民館へ午後五時過ぎ到着した。

◇のつし、のつしと街をのし歩く巨人、弥五郎どん

昭和51年3月9日『南日本新聞』
四代目の雄姿披露 13日、大阪の民族博物館へ 弥五郎どん人形完成
【大隅】大阪の国立民族学博物館入りする弥五郎どん人形ができてから、八日曾於郡大隅町で晴れ姿を披露した。

弥五郎どんは県内三大祭りの一つ、同町岩川八幡例祭(十一月三日)の名物男 日本を代表する伝統行事のシンボルとして博物館入りが決まり、面を同町の工芸家川上久雄(五二)が担当した。

この日の披露は大阪での組み立てりハハサルをかねたもので、町商工会館前広場にトラックで鬼神門や、テールセットほかもある巨大なゲタなどの持ちものを運び込み、午後一時真竹善範町観光協会会長の指揮で作業開始。道行く人々も時ならぬ、弥五郎どん起こしに足を止め、お面の前で記念撮影したり、ロープに引かれてむつくり起き上がる弥五郎どんの雄姿に拍手を送っていた。

この人形、昭和四十五年大阪万国博の際製作されたのに続いて歴代四代目。モデルはもちろん岩川八幡門外不出のご神体だが、川上さんによると原型よりやや面長にしてあるそう、それだけに二セぶりの方も一段と上がったとは関係者の評。

なお人形は十三日早朝トラックで大阪に向かうが、面だけは化粧のため正式の博物館入りの前にもう一度単帰りする。

◇4代目ごむす：でき上がった弥五郎どん人形Ⅱ大隅町商工会館前で

手洗いはちのひしゃくも作って寄付することになった。それにしても、悩みも、量産。がきかぬこと。「ま、二百個がせいぜいでしょね」とお年寄りたち。この日も秋の日を浴びながらたんねんに、手作りの味を楽しんでた。

◇始まった弥五郎どん祭り作り

昭和51年11月4日『南日本新聞』
きょう名物、浜下り、弥五郎どん祭り幕あけ
【大隅】鹿児島県内三大祭りの一つ、曾於郡大隅町岩川の「弥五郎どん祭り」が三日フタあけした。呼びもの弥五郎どん浜下りはことしは四日に行なわれるが、好天に恵まれた岩川八幡の参道下には約五万人(町商工会、大隅署推定)が詰めかけ奉納武道大会などにぎわった。

弥五郎どんは同八幡例祭(五日)御神幸のいわば露払い役。三日未明、一年の眠りから目をさますところから祭りが始まる。

まず午前二時、たいこを先頭に子どもたちが「弥五郎どん、起きやたまもせ」とはやしなが岩川の町をねり歩く。さそわれて住民たちは続々境内へ急ぐ。この「弥五郎どん起こし」に参加すれば向こう一年間無病息災と伝えられているからだ。

はち巻き姿の町商工青年部の若者たちが掛け声勇ましく起こし立てた弥五郎どん人形は身のたけ四・八五メートルの偉丈夫。ことしは四年も一段と上がった。使った生地はしめて四十八反なり。

真新しいサラシの胴巻きに四メートルの太刀をぶち込み、夜があけるころにはようやく大人形の出来上がり、その弥五郎どんがギョロリと見おろす境内下の岩川小校庭では、午前九時から県内各地のスポーツ少年団や同好会が参加して奉納武道大会がスタート。また、一部の旧道はクルマを締め出して昔ながらの竹細工や農具の露店が並び、夕方まで人波が続いた。弥五郎どん浜下りは四日午前十時岩川八幡をスタート、市街地をのべ三時間ねり歩く。

昭和51年12月2日『南日本新聞』
民族学博物館入りする弥五郎どん人形の鬼神面を彫る 川上久雄(かわかみひさお)へ期待する弥五郎どん祭り作り
【大隅】大隅町名物「弥五郎どん祭り」は十一月三日から三日間、同町岩川の岩川八幡一帯で行われるが、その新名物「弥五郎どん」として作りがことしもお年寄りの手で始まった。

このことし、モウソウ竹を油抜きし中をくり抜いて作る。竹ぐしを両刀がわりにくりつけた野趣たぶりのデザインで、一昨年の例祭に同町老人趣味の会が初出品し大好評、またたく間に売り切れた。昨年は二百個を用意したが、相次いだため、お年寄りたちは真夏の八月末から製作にかかるといった。

ことしの製作開始は昨年よりおそいが、これは竹を十分乾燥させてから油抜きしたほうがいいという判断から。つまり三年目を迎え一段と、改良、が進んだわけだが、ことしはとつくりのほかに、八幡境内の

まさに人を得て、弥五郎どん人形が今よみがえる。

鹿兒島市下荒田出身。父は説教所の住職だったが、寺の貧乏ぐらしにあいそをつかして十七歳の時中国へ渡り造船所の内装デザイナーに従事。戦後二十三年引き揚げ会社勤めのあと二十六年岩川高校講師に招かれ大隅町へ。三十八年、同町岩川上馬場の岩川八幡鳥居下に木工所を設立した。三重婦人と一男一女、県技能検定協会理事。五十三歳。

◇(本人の顔写真)

昭和52年11月4日『南日本新聞』

○弥五郎どん 浜下り、にとつと歓声 大隅町岩川八幡 約八万人が繰り出す

【大隅】曾於郡大隅町名物の「弥五郎どん祭り」が三日、同町の岩川八幡境内で行われ、好天に恵まれ観光客でにぎわった。県内三大祭りの一つに数えられるこの祭り、身のたけ五メートル近い巨人弥五郎どん人形がそのシンボルだが、夜のまだあけきらぬ神社境内で行われる。弥五郎どん起こし、も見どころだ。午前二時、太鼓を打ち鳴らしながら子どもたちが「弥五郎どんが起きるぞー」と叫び町をねり歩く。

境内ではたき火に照らされながらハッピ、ハチマキ姿の若者たちが神殿から一年ぶり鬼神面を取り出し身長四・八五メートルの人形組み立てにかかる。午前五時、この秋一番の冷え込みのなかを見守っていた数百人の観客は、ロープにひかれやお立ち上がりした巨人の姿に「起きた、起きた」と歓声をあげていった。

弥五郎どん人形は同日午後二時、火花を合図に神社を出発。河原、森園を経てゆるゆる、浜下り、としゃれ込むころは、お祭気分も最高潮に達した。道筋約一キロの歩行者天国には露店が軒をつらね身動きも出来ないほどだ。この日一日の出はざと八万人(町商工会推定)に達した。

なお同日は神社隣の岩川小を中心に合計七種目の奉納スポーツ大会があり、祭り見物を兼ねてやってきたスポーツ少年団の子どもたちが目立った。◇「ウワーでつかいなー」姿を現した弥五郎どん人形に、参道から歓声が上がると大隅町岩川八幡で

昭和53年11月4日『南日本新聞』

○ノッソノッシと弥五郎どん 浜下りの沿道に5万人の歓声わく 大隅町

【大隅】曾於郡大隅町の「弥五郎どん祭り」が三日、岩川八幡境内を中心に行われた。好天に恵まれ県内はもちろんで、都城などからも見物客が詰めかけ約五万人(町商工会推定)の人出でにぎわった。

祭りは、主役の弥五郎どんが、一年の眠りから目をさますところから始まる。まず午前二時、チビっ子が太鼓を打ち鳴らしながら「みんな起きよー。弥五郎どんが起きよー」と叫んで町をねり歩く。町民たちは続々境内へ。

境内ではたき火をたきながら、ハッピ、ハチマキ姿の若者が、神殿から一年ぶり鬼神面を取り出す。このあと身長四・八五メートルの人形組み立てにかわり、午前四時四十分、ロープに引かれて、巨人が立ち上がると、見守っていた数百人の観客から「起きた、起きた」と大歓声。このロープにさわると向こう一年間、無病息災とあて見物客が先を争う。

午後一時、弥五郎どん人形は火花を合図に神社出発。二本刀を差しギョロリと目をむいて、ゆっくり岩川高校前―役場前―本通り―鹿兒

島交通駐車場折り返し―中央公民館―合庁舎前―八幡神社までを、浜下り。このころから祭り気分も最高潮に達し、特に合庁前から神社までの旧国道第一キロは歩行者天国となり、露店も並んで身動きできないほどだった。

同日は神社隣の岩川小で六種目の武道大会、岩川高でスポーツ少年団によるバレエボール大会があった。神社境内では相撲踊り、ソバ切り踊りなどの郷土芸や自衛隊音楽団などの演芸大会のほか老人作品展もあり、弥五郎とつくり、がよく売れていた。

◇岩川八幡神社をゆるりと、浜下り、する弥五郎どん

昭和54年11月2日『南日本新聞』

○伊集院町妙円寺参りの記事のあとに 弥五郎どんも

【大隅】曾於郡大隅町名物の「弥五郎どん祭り」は三日、同町の岩川八幡境内を中心に繰り広げられる。祭りの主役、弥五郎どん人形は、同神社の祭神・武内宿祢がモデルとされており、身長は四・八五メートルの大男。帯に太刀を突っ込み、ギョロリとした目つきと巨太さがみどころだ。

同日未明、境内で、起こし行事があり、一年間の眠りから目をさます。二十五反の梅染めの衣をまとって正装。午後一時に子どもたちのかけ声とともに境内を下り、町中をねり歩く。浜下り。中央公民館前で、いったん休んだあと旧国道を経て、同神社へ午後五時ごろ帰りつく。

この旧国道筋は、日中、歩行者天国となり露店が立ち並ぶ。また神社境内では相撲踊り、ソバ切り踊りなどの郷土芸能や演芸大会、お年寄りの作品、弥五郎どん、即売会もある。

◇弥五郎どん浜下りコース

昭和54年11月4日『南日本新聞』

○ソラ！ふるさとの祭りだ 弥五郎どん ノッシと、浜下り

【大隅】曾於郡大隅町名物の「弥五郎どん祭り」が三日、岩川八幡神社境内を中心に行われた。あいにくの曇り空だったが、県内をはじめ都城、小林などから見物客が詰めかけ、約六万人(町商工会推定)の人出でにぎわった。

県内三大祭りの一つ、弥五郎どん祭りは身のたけ約五メートルの巨大な人形がシンボル。また夜が明けぬうちから行なわれる。弥五郎どん起こし、も見どころの一つだ。午前二時、チビっ子たちが「弥五郎どんが起きよー」と太鼓を打ち鳴らしながら、町内を一巡。起きた町民は境内へ急ぐ。

境内ではたき火をしながら、ハチ巻き、ハッピ姿の商工会青年部員たちが、神殿から一年ぶり鬼神面を取り出す。このあと、ライトに照らされ、身長四・八五メートルの人形組み立て作業にかかる。午前五時前見守っていた数百人の町民が、八本の綱を引っぱると、ゆっくり立ち上がり「起きた、起きた」と歓声をあげ、一斉に拍手。この綱に触れれば向こう一年間、無病息災とあて町民は大喜びだった。

午後一時すぎ、弥五郎どん人形は火花を合図に神社を出発。真っ白の帯に二本刀を差し込み、ギョロリと目をむきながら、岩川高校前―役場前―鹿兒島交通駐車場折り返し―中央公民館―合庁前―八幡神社まで、約四キロを、浜下り。このころ、お祭気分も最高潮に達し、浜下りにあたる合庁―神社は終日、歩行者天国となり、露店が軒を連ね人ごみの波が続いた。

また神社境内では相撲踊りなどの郷土芸能、演芸大会や老人作品による、弥五郎どん、即売が人気を呼び、岩川小学校庭などで武

道大会、バレエボール大会が開かれた。

◇岩川八幡神社をゆっくり、浜下り、する弥五郎どん

昭和55年11月2日『南日本新聞』

○あす弥五郎どん祭り 郷土芸能や武道大会も 大隅町

【大隅】曾於郡大隅町名物の「弥五郎どん祭り」は三日、岩川八幡神社境内を中心に盛大に行われる。

祭りの主役、弥五郎どん人形は、同神社の祭神・武内宿祢がモデルとされており、身の丈四・八五メートルの大男。太刀を帯に突っ込み、ギョロリとした目つきで、町内をねり歩く。浜下り、が見どころ。まず三日未明、境内で一年間の眠りから目を覚ます。起こし行事、から始まる。

このあと午後一時、チビっ子たちのかけ声とともに、境内の坂道を下り、町内の中心街を一巡する。途中、中央公民館前で、いったん休憩し町農協から旧国道を経て、同神社へ午後五時ごろ帰りつく。この旧国道は終日、歩行者天国となり、両側には露店がズラリと立ち並ぶ。また、岩川小学校庭では剣道や柔道、相撲など六種目の武道大会があるほか、岩川中・岩川高校体育館ではスポーツ少年団によるバレエボール大会も開かれる。神社境内には特設舞台を設置、太鼓踊りなどの郷土芸能と歌謡漫談があり、名物の老人クラブ作品による、弥五郎どん、即売も予定されている。

◇弥五郎どん浜下りコース

昭和55年11月4日『南日本新聞』

○弥五郎どん祭り ゆつたり浜下り 衣装新調ピカピカの男前

【大隅】県内三大祭りの一つ、曾於郡大隅町名物の「弥五郎どん祭り」がことしも同町の岩川八幡神社境内に三日にぎやかに行われた。好天に恵まれ、県内や都城などから見物客が詰めかけ、その数ざと六万人(町商工会推定)。

祭りは、主役弥五郎どんが、一年の眠りから目を覚ますところから始まる。この日まだ夜の明けぬ午前二時ごろ、チビっ子たちが「みんな起きよー。弥五郎どんが起きよー」と太鼓を打ち鳴らし、岩川の町をねり歩く。起きた住民たちは、続々同神社へ。

冷え込みが激しい境内。たき火にあたりながら、ハッピ、ハチ巻き姿の商工会青年部による身長四・八五メートルの人形組み立て作業を見守る、午前五時十五分。ロープに引っぱられて巨人弥五郎どん人形は又ツクと立ち上がり、数百人の観客から一斉に拍手。このロープにさわれば、向こう一年間、無病息災という。ことしは四年に一度の、衣替えの年にあたり、衣装をそっくり新調した弥五郎どんは、ピカピカの男前姿、ハイライトは午後一時すぎ出発の、浜下り。火花を合図に、ギョロリと目をむきながら、弥五郎どんは境内を下り、岩川高校前―役場前―鹿兒島交通駐車場折り返し―中央公民館―合庁前―八幡神社まで約四キロをチビっ子たちに引かれ、ねり歩いた。合庁―神社間は終日歩行者天国となり、露店が立ち並び見物客でいっぱいだった。

一方、神社境内では太鼓踊りなどの郷土芸能と歌謡漫談があり老人作品による名物、弥五郎どん、も飛ぶよな売れゆき。また、岩川小学校庭では剣道や柔道、相撲など六種目の武道大会、岩川中、岩川高校体育館では、スポーツ少年団のバレエボール大会に熱戦が続いた。

◇一年ぶりのお出まし。ゆっくり、浜下り、する弥五郎どん

◇岩川八幡神社境内で

昭和56年11月2日『南日本新聞』

○あす弥五郎どん祭り 大隅町
【大隅】鹿兒島県内三大祭りの一つ曾於郡大隅町の「弥五郎どん祭り」は三日、岩川八幡神社境内を中心に行われる。

祭りは同神社境内で午前三時から始まる「弥五郎どん起し」で開始。五メートルの大神、武内宿禰がモデルと言われる弥五郎どんは身の丈四・八五メートルの大男で、一年間の眠りから目をさますとみづくろいをする。

呼びものの浜下りは午後一時から、神社境内の坂道を下り、岩川地区中心街をねり歩き、町中央公民館前で休憩して午後五時ごろ神社に帰り着く。また、この日は県庁前通りは歩行者天国となり、露店がズラリと並ぶ。

恒例の奉納武道大会は岩川小で剣道、柔道、銃剣道、弓道、空手、相撲が、岩川中・高でスポーツ少年団バレーボール大会が開かれる。このほか、神社境内では郷土芸能大会、歌謡大会などがあり、町老人クラブ連合会が、弥五郎どんトックリ、の即売もする。

◇弥五郎どん浜下りコース
弥五郎どん浜下りコース

昭和56年11月4日『南日本新聞』

○弥五郎どん祭り 子供らにひかれ堂々浜下り 大隅町
【大隅】鹿兒島県内三大祭りの一つ、曾於郡大隅町名物の「弥五郎どん祭り」は三日、岩川八幡神社一帯で行われ約六万五千人（大隅署推定）の人数でにぎわった。

祭りの主役・弥五郎どんは、同神社の御祭神武内宿禰をかたどるものと言われ、身の丈四・八五メートル。午前二時、子供たちが太鼓を打ち鳴らしながら岩川の町を「弥五郎どんが起きよ。みんな起きよ」とふれ回って、祭りは開始。住民は次々と神社へ詰めかけ、三時から弥五郎どん起しをした。弥五郎どんは梅染めの衣をまとい、腰に四・二メートルと二メートルの太刀を差して一年ぶりのおめかしは終わった。午前六時ごろになると、雄姿を一目見ようという善男善女やアマチュアカメラマンなどが続々と訪れ、境内はなかなかのにぎわいに。

祭りのハイライト「浜下り」は午後一時すぎに始まった。長い階段を子供たちの「ヨイショ」「ヨイショ」のかけ声で一気に下り終えた弥五郎どんは、六年ぶりで岩川小学校庭に入り、奉納武道大会の模様をギョロ目で観戦した。これが終わるとそそくさと岩川の町へ。威風堂々、四方を圧するよう弥五郎どんが、かつ歩、すると、町行く人は今後一年間の無病息災を願って競うようにロップにさわった。町中央公民館で休憩の後、弥五郎どんは午後五時前神社に帰り着いた。

また、この日は県合同庁舎前から神社まで終日歩行者天国となり、露店がズラリと並びたいへんな混雑。神社境内では町老人クラブ連合会特製の「弥五郎どんとっくり」の即売や郷土芸能大会、歌謡大会が、岩川小や岩川中では奉納武道大会が開かれた。

◇四方を圧するよう浜下りへ向かう弥五郎どん

昭和57年11月2日『南日本新聞』

○あす弥五郎どん祭り 大隅町岩川八幡
【大隅】曾於郡大隅町岩川八幡神社の秋の例祭で、鹿兒島県内三大祭りの一つ「弥五郎どん祭り」は三日、同神社境内を中心に行われる。

祭りの主役の弥五郎どんは、同神社の祭神・武内宿禰がモデルと言われており、身の丈四・八五メートルの大男が岩川の町を行くさまは、まさに圧巻。同日は午前二時ごろ、町内の子供らが「弥五郎どんが起きよ」と、大声でふれ回ること始まる。

午前八時半からは剣道、柔道、弓道、銃剣道、相撲の奉納武道大会、少女バレーボール大会（南日本新聞社後援）が、岩川小などで始まる。同十一時から祭りを盛り上げる市中パレード。岩川小鼓笛隊を先頭に、同小児童手作りの子弥五郎どん三体が初めてパレードに加わり、町婦人の踊り連が続く。また、町商工会青年部の弥五郎太鼓もこの日デビュー、鮮やかなパチさばきを披露する。

◇弥五郎どん浜下りコース
当日の交通規制などは図の通り。

昭和57年11月4日『南日本新聞』

○お祭りだ！秋空ルンルン 弥五郎どん祭り ゆつたりと浜下り 太鼓、子弥五郎も初登場 大隅町
【大隅】鹿兒島県内三大祭りの一つ曾於郡大隅町の「弥五郎どん祭り」は三日、同町岩川八幡神社を中心に行われた。さわやかな秋晴れに誘われて、鹿兒島県内外から続々と見物客が詰めかけ、前年より一万五千人も多きと八万人（大隅署推定）の人数、特に初めて登場した弥五郎太鼓、子弥五郎どん三体が、稚児行列が祭りをおおいに盛り上げた。

祭りは主役の弥五郎どんが一年の眠りから目をさますところから始まった。午前二時、岩川地区の子供らが太鼓を打ち鳴らしながら「弥五郎どんが起きよ。みんな起きよ」とふれ回った。住民らは厳しい冷え込みのなか、次々と神社境内へ集まる。ロップに引かれた身長四・八五メートル、同神社の祭神武内宿禰がモデルと言われる弥五郎どんが起き立つのは同五時半。打ち上げ花火と同時に、町商工会青年部がこの日のために二カ月余り特訓を続けてきた「弥五郎太鼓」が岩川の町々に鳴り響いた。太鼓にビクビクしたのか、身づくろいを終わった弥五郎どんのギョロ目は、段と大きく見える。あとはカメラマンの格好の被写体。

同十一時にはパレード隊が鹿兒島交通車庫を出発、同神社へ。町消防団ラッパ隊、岩川小鼓笛隊に続いて、同小四年生百五人が制作、自ら引く子弥五郎どん三体の行列。大きさは本物のちよど半分、見物人のなかから「ウン、よくできている」の声が続出した。県合庁前通りに入ると、見物人が多くパレードが行く手を阻まれる場面がしばしばあった。

ハイライトの浜下りは午後一時半、同神社を出発した。境内の急な坂道をゆつくりと下った弥五郎どんは、岩川小児童二十人に引かれて岩川の町へ練り出した。後には大型トラックに乗った弥五郎太鼓隊、さらに八十人を超す着飾った稚児行列が続く。弥五郎どんは歩行者天国となり露店がズラリと並んだ県合庁前通りも威風堂々、あたりを圧倒するかのようにつく歩、して、同五時ごろ神社に帰り着いた。

一方、神社境内では、太鼓踊りなどの郷土芸能、津軽三味線の披露や、町老人クラブ連合会の弥五郎とっくりの即売が行なわれた。また、岩川小学校庭では剣道や相撲など六種目の奉納武道大会、岩川小高体育館では少女バレーボール大会が開かれ、熱戦が相次いだ。

◇子供らに引かれ、浜下りをする弥五郎どん
大隅町・岩川八幡神社

◇子供らに引かれ、浜下りをする弥五郎どん

◇子供らに引かれ、浜下りをする弥五郎どん

◇子供らに引かれ、浜下りをする弥五郎どん

◇子供らに引かれ、浜下りをする弥五郎どん

◇子供らに引かれ、浜下りをする弥五郎どん

◇子供らに引かれ、浜下りをする弥五郎どん

◇子供らに引かれ、浜下りをする弥五郎どん

◇子供らに引かれ、浜下りをする弥五郎どん

◇子供らに引かれ、浜下りをする弥五郎どん

◇子供らに引かれ、浜下りをする弥五郎どん

昭和58年11月4日『南日本新聞』

○西も東も浮かれ調子 弥五郎どん祭り ミスターが初登場
【大隅】鹿兒島三大祭りの一つ曾於郡大隅町岩川八幡神社の「弥五郎どん祭り」が三日行われた。住民投票で選ばれたミスター弥五郎とミスター秋祭りが登場するなど話題も多く、道道には約八万人（大隅署推定）がくり出した。

祭りの主役弥五郎どんは、同神社の祭神武内宿禰がモデルと言われている。午前二時、岩川地区の子供らが「弥五郎どんが起きよ」と太鼓を打ち鳴らしながらふれ回って祭りが始まった。

境内で町商工会青年部員らが手ぎわよく弥五郎どんの身づくろい。五時前には身長四・八五メートルの弥五郎どんが一年ぶりで起き上がった。長い眠りからさめた弥五郎どんのギョロ目が一段と目立つ。境内には多くの人が練り出しカメラにおさめていた。

景気を盛り上げるパレードは六年ぶり参加の自衛隊音楽隊を先頭に、ミスター弥五郎の水流純雄さん、ミス秋祭りの三人、岩川小児童の手作りの子弥五郎三、神幸礼太鼓踊り、踊り連と続いた。

ハイライトの浜下りは午後一時に神社発。剣道、柔道など奉納武道大会が行われて、岩川小学校庭に入り、子弥五郎と面会した後、岩川の繁華街へ。大型トラックに乗った弥五郎太鼓隊、稚児行列を従え、威風堂々、かつ歩、するさまは圧巻。歩行者天国となり、露店がズラリと並んだ県合庁前通りをゆつくり進んだ。

神社境内ではのど自慢大会、自衛隊音楽隊の演奏会などのほか、町老人クラブ連合会手作りの弥五郎トックリや弥五郎どんの姿を刷り込んだのがき即売会などもあり、人気を集めた。

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん
3日、大隅町岩川・八幡神社

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りをする巨人の弥五郎どん

神社であった「縫い初めの祭り」に梅染めの見事な布地二十五反を届け、関係者を喜ばせた。

国鉄・岩川駅前で衣料品店を開いている宮田満志さん（六六）葉子さん（六〇）夫婦。宮田さん一家は、戦後の混乱のさめやらぬ二五年十一月、隣町・末吉から移住、現在地に店を構えた。末吉町本町の店をたたみ、「大決心」の移転だったという。

ところが、運よく開店日が弥五郎どん祭りの当日（当時は五日）と重なり、その後も商売は順調に伸びた。夫婦はこれも弥五郎どんのご利益と感謝。「開店当時の気持ちを忘れないために」と二年後の「改造」から寄進を始めた。

岩川八幡神社の祭神・武内宿禰がモデルといわれる弥五郎どんは身の丈四・八五メートルの巨人形。このため着物に必要な梅染めの布地は大人二十五反分に当たる二十五反が必要。梅染めの布地は四十年代の初めごろまでは各家庭でフントンの裏地に使っていたため、自分の店で仕入れた品物を寄進していた。しかし、四十年代半ばごろから花模様

が主流になり、布地調達の苦労が始まった。とうとう三倍も高くついで洋服地を寄進したが、町民の評判はあまりよくなかった。このため、五十五年からは改造二年前から鹿兒島市の問屋を通してメーカーに特注している。

宮田さん夫婦は、これまで「神様を利用して宣伝していると思われたくない」として、表面に出ることを嫌ってきたが、「弥五郎どん」のご利益には感謝でいっぱいという。

ことしの「縫い初めの祭り」には葉子さんだけが出席。縫い子、役の上馬場、東馬場の両婦人会代表と一緒におはらいを受けたが、葉子さんは「感謝の気持ちで続けているので、騒がれると恥ずかしい」と控えめに語っていた。

◇弥五郎どんの着物の布地をこどもも寄進した宮田さん（前方）と、縫い子、役の婦人会の代表

昭和59年11月2日 『南日本新聞』

○あす弥五郎どん祭り 大隅町

【大隅】県内三大祭りの一つ曾於郡大隅町の「弥五郎どん祭り」は三日、岩川八幡神社を中心に開かれる。

弥五郎どんは岩川八幡神社の祭神・武内宿禰がモデルといわれる身の丈四・八五メートルの巨人形。例年通り午前二時、岩川地区の子どもたちが打ち鳴らす「弥五郎どん起こし」のフレ太鼓で祭りの幕が開く。弥五郎どんが岩川神社で身づくろいを終え出来上るのは午前六時。自衛隊音楽隊、岩川小鼓笛隊、同小の子弥五郎どんなどによる市中パレードは午前十一時から正午まで、同パレードには町民投票で選ばれたミスター弥五郎とミス秋祭りの三人は花を添える。ハイライトの弥五郎どんの浜下りは午後一時から午後五時まで。

一方、午前八時半からは岩川小学校などで剣道、柔道、弓道、空手、銃剣道、相撲の奉納武道大会と女子バレーボール大会（いずれも南日本新聞社後援）が行われる。また岩川小体育館では午前十時から町内外の子ども自慢による素人のど自慢大会、審査員、作曲家・遠藤実氏、音楽評論家・斎藤茂氏も聞く。

なお当日はパレードと弥五郎どんの浜下りコースになる道路などでは交通規制が行われる。国道269号の岩川バイパス高架橋部分は午前八時から午後六時まで通行止めになるため、う回路を利用すること。◇弥五郎どん祭り浜下りコース

昭和59年11月4日 『南日本新聞』

○でばらにや損々： 弥五郎どん祭り 8万5千人が見物 「改造」にせぶりもよく

【大隅】鹿兒島三大祭りの一つ曾於郡大隅町の弥五郎どん祭りは三日、岩川八幡神社を中心にくり広げられた。県内外から訪れた約八万五千人の見物人（大隅署推定）は、巨人弥五郎どんの勇壮な浜下りに目を見張り、弥五郎太鼓を楽しんだ。この日、町制三十周年と町文化会館の落成を祝った大隅町民はこし、秋が大豊作とあつて二重、三重の喜びを祭りにつづけていた。

「弥五郎どんが起きつどい」。未明の午前二時、岩川地区の子供たちがにぎやかに太鼓を打ち鳴らしながら町内を回り、弥五郎どん起こしのフレ太鼓を合図に祭りが始まった。無病息災、家内安全を祈る参拝客の列が、暗い境内にくり出した。

境内ではハッピー姿の町商工会青年部員らが手ぎわよく弥五郎どんの身づくろい。午前五時半、祭神・武内宿禰がモデルとされる弥五郎どんがロープに引かれ、四・八五メートルの巨体がむっくり起き上がった。二十五反の梅染めの着物の腰には純白のサラシ帯。四年に一回の「改造」のせい、今年はよくできている」と評判。

午前八時半から岩川小学校庭などで奉納武道大会も始まり、境内は押すな押すなの人波。午前十一時、打ち上げ花火を合図にパレード隊が鹿兒島交差車庫を出発。自衛隊音楽隊を先頭に今年のミスター弥五郎の安田恵明さん（二〇）と、和服姿のミス秋祭りの三人、岩川小児童の引く子弥五郎どん、踊り連が延々と続き、祭りを盛り上げた。

メーンの弥五郎どんの浜下りは午後二時過ぎから。坂道をゆつくりと下りた弥五郎どんは、ハッピー姿の岩川小児童三十九人に引かれ、威勢のよい弥五郎太鼓隊を従えて悠々と、かつ歩、ギョロ目で町内を見渡していた。今年は初めて国鉄岩川駅も訪ね、開業六十周年を祝福した。

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りに向かう弥五郎どん（3日、大隅町岩川・八幡神社で）

昭和60年11月2日 『南日本新聞』

○おいどんが、長男 でこわす 弥五郎どんは3人兄弟 北諸県でもあす浜下り 焼酎、バクチ好き ポロ着姿で登場

【郡城】鹿兒島三大祭りの一つとして知られる曾於郡大隅町岩川の「弥五郎どん」の兄貴に当たる、もう一人の「弥五郎どん」が、三日北諸県郡山之口町富吉で行われる「丹野神社浜下り」の主役として登場する。

山之口町は大隅町から県境を越えて北東に二十五キロ離れたところにある町。地元には弥五郎どんは三人いて、長兄が山之口の弥五郎どん、二男が岩川、三男が鉄肥（日南市）にいたという話が伝わっている。

大隅の弥五郎どんは大変な働き者で金持ち、よい衣装を着ていたのに対し、山之口の弥五郎どんは、焼酎とばくちが大好き。貧乏で冬でも古い麻の薄着を着ていたといわれ、毎年十一月三日に行なわれる丹野神社の浜下りの主役、弥五郎どんは、ポロポロの着物をつけて登場するのがならわし。

しかしあまりにも着物が古くなったため、町民から古い麻布を出してもいい、着物を新調。昨年からは少し小さくつばりした晴れ姿で祭りに出ていくという。

三日は午後零時半、神社を出発。五百メートル離れた分社まで大勢の子供らに押された弥五郎どんが復讐する。地区の人たちは、祭りにそなえて一日、代表が神社に集まり弥五郎どんに着物をつける作業をした。竹を組み合わせた高さ約四メートルの巨体に、麻着をつけ、大小の木刀を腰にさした朱色の面の弥五郎どん

は、四つ車の上に堂々と立ち、晴れの出番を待っている。この祭りは地元の人々の努力で、戦時中も中止されず、今日まで続いており、岩川の弥五郎どんほど有名ではないが地元の人々にとっては、なにもにも替えがたい大切な弥五郎どんである。

◇山之口の弥五郎どんに麻着をつける氏子たち

○山（山）の口弥五郎どんの記事のあとに） 午前八時から交通規制 大隅町もあす祭り

【大隅】県内三大祭りの一つ曾於郡大隅町の「弥五郎どん祭り」は三日、岩川八幡神社を中心に盛大に催される。

弥五郎どんは、岩川八幡神社の祭神・武内宿禰がモデルと言われる身の丈四・八五メートルの巨人形。午前二時、「弥五郎どん起こし」のフレ太鼓で一年の眠りから覚めた弥五郎どんの浜下りは例年通り午後一時から、ハッピー姿の岩川小児童らに引かれて、目抜き通りを、かつ歩。そのユーモラスな巨体を披露する。

町婦人会員二百人の踊り連と町民投票で選ばれたミスター弥五郎どん、ミス秋祭り、子弥五郎どんが繰り出す市中パレードは午前十一時から今年も自衛隊音楽隊、岩川小鼓笛隊の先導で祭りを盛り上げる。一方、午前八時半から同神社周辺の岩川小、中、高校などの各会場では、剣道、柔道などの武道大会が繰り広げられる。なお、当日はパレード、弥五郎どんの浜下りコースになる道路が交通規制される。国道269号、県道垂水一南之郷線の主要道路は、午前八時から午後六時まで車両通行止めとなり、う回路利用になる。

◇弥五郎どん祭り浜下りコース

昭和60年11月4日 『南日本新聞』

○巨神 ユツタリ浜下り 県内外から9万人 驚きの声しきり

【大隅】鹿兒島県内三大祭りの一つ曾於郡大隅町の「弥五郎どん祭り」は三日、同町岩川八幡神社を中心にあつた。身の丈四・八五メートルの弥五郎どんを一目見て、御利益にあらざらうと県内外から訪れた見物人は、ざつと九万人（大隅署推定）。見物人たちは、一万六千人の大隅町民と心をつなげて、のどかな秋空のもとで繰り広げられた純粋で壮大な秋祭りを満喫した。

「弥五郎どんが起きつどい」。午前二時。子どもたちが打ちならす弥五郎どん起こしのフレ太鼓を合図に、無病息災、家内安全を祈る町民の参列者の列が、暗い八幡神社の参道に続いた。

境内ではいなせなハッピー姿の町商工会青年部員らが、しきりに従って弥五郎どんの身づくろいを進めていく。午前五時すぎ、祭神の武内宿禰がモデルと言われる弥五郎どんがロープに引かれムックと起き上がった。二十五反の梅染めの着物にサラシ帯、ギョロ目の鬼顔面はよく見るとユーモラス。

町商工会青年部が打ち鳴らす勇壮なリズムが人を呼ぶ。神社下の岩川小の主会場で各種の武道大会が始まるころには境内は押すな押すな。午前十一時には花火を合図に一千人が練り歩く市中パレードがスタート。今年のミスター弥五郎の内村圭一さん（二二）を先頭に堂々の行進が続く。岩川の町は祭り気分一色に包まれた。

弥五郎どんの浜下りは午後一時過ぎから。人垣で埋まった参道をユツタリと下りる巨人に「イヨッ」の掛け声が飛び、今年も、大隅ライオンズクラブの創立二十周年記念を祝い、祝宴会場の町農協広場に初めて立ち寄ったが、県外客は初めて目にする「巨神」に「ホー」と驚きの声を上げていた。

◇岩川小の児童に引かれ、浜下りに向かう弥五郎どん

昭和61年11月2日『南日本新聞』

○あす弥五郎どん祭り 大隅町

【大隅】県内三大祭りの一つ「弥五郎どん祭り」は三日、曾於郡大隅町の岩川八幡神社を中心に盛大に開催される。

弥五郎どんは、岩川八幡神社の祭神・武内宿禰がモデルと言われる身丈四・八五メートルの巨人形。祭りは午前二時の弥五郎どん起しから始まる。一年の眠りから目覚めた弥五郎どんは同神社で午前六時までかかて身づくろいを完了。午後一時からハッピー姿の岩川小児童町商工会青年部員らに引かれて、目抜き通りをゆつたりと浜下り。そのユイモラスな巨体を披露する。

町婦人委員会二百人の踊り連と町民投票で選ばれたミスター弥五郎どん、ミス秋祭り、岩川小児童が作った子弥五郎どんが繰り出す市街パレードは午前十一時から。今年も自衛隊音楽隊、岩川小鼓笛隊が先導、約一時間わたって祭りを盛り上げる。一方、午前八時半からは同神社周辺の岩川小、中、高校などの各会場で剣道、柔道、空手などの奉納武道大会が行われる。

なお、当日はパレード、弥五郎どんの浜下りコースの道路は交通規制される。国道269号、県道垂水・南之郷線の主要道路は、午前八時から午後六時半まで車両通行止めのため、う回路利用となる。

昭和61年11月4日『南日本新聞』

○弥五郎どんのし歩く 秋空に映える巨人 人出8万、お祭り気分一色に 大隅町

【大隅】仰ぎ見る五メートルに近い身の丈。二十五反の梅染めの衣がやわらかい秋の日差しによく映える。子牛価格の好転、大豊作の出来秋に見物人の顔も底抜けに明るい。県内三大祭りの「弥五郎どん祭り」は三日、曾於郡大隅町の岩川八幡神社一帯で盛大に繰り広げられ、約八万人（同祭り奉賛会推定）の人出でにぎわった。

午前二時、威勢のいい子どもたちの弥五郎どん起しの触れ太鼓を合図に祭りは始まった。神事とあわせて、一年の眠りから覚めた弥五郎どんは、町商工会青年部員らの手で身づくろい。午前六時前、神社境内の山車の上に四・八五メートルの巨体を「ヨイショ」とばかり持ち上げられた。

午前八時になると、「無病息災」「商売繁盛」のご利益を願う近郷近在の老若男女の列で境内は押すな押すな。神社下の岩川小学校庭など奉納武道大会場では熱戦の口火も切られた。

十一時からは市中パレード。自衛隊音楽隊、若小鼓笛隊の音楽に乗って、弥五郎どん、踊り連が目抜き通りを練り歩き、祭り気分一色に町民投票で選ばれたミスター弥五郎の牧野潤治さん（三三）も三人のメインの弥五郎どんの浜下りは午後一時半から。勇壮な弥五郎太鼓を露払い役に黒山の人たかりをかき分けて、鳥居下に雄姿を現すと見物人から「ワァー、でかい」との驚きの声があがった。鋭い目をギョロリつかせ、四方を圧するかのような浜下りには約五キロ。弥五郎どんは町内の平安を見届けながら約三時間がかりでユツタリと歩いた。

◇町商工会青年部員らに引かれて浜下りに出る弥五郎どん

昭和62年11月2日『南日本新聞』

○あす、弥五郎どん祭り 大隅町

【大隅】県内三大祭りのひとつ、曾於郡大隅町の「弥五郎どん祭り」は三日、岩川八幡神社を中心に開催される。

弥五郎どんは同神社の祭神武内宿禰がモデルといわれ、身の丈が四・八五メートルの巨人形。午後二時のふれ太鼓で一年の眠りから覚めた弥五郎どんの浜下りは午後一時半から始まり、町商工会青年部員らに引かれて町の中心部をかき歩する。

町の婦人踊り連や小中学生などが繰り出す市中パレードは午前十一時から。先に町民投票で選ばれたミスター弥五郎、ミス秋祭り、先頭に町内を練り歩き、祭りを盛り上げる。このほか、岩川小学校校庭などでは空手、柔道、剣道などの奉納武道大会も開かれる。

当日は浜下り、パレードのコースが交通規制される。国道269号、県道垂水・南之郷線の主要道路は午前八時から午後六時半まで車両通行止めとなり、う回路利用となる。

昭和62年11月4日『南日本新聞』

○弥五郎どん 天空をにらみ、威風堂々 浜下りを5万人が満喫

【大隅】鹿児島県内三大祭りのひとつ、曾於郡大隅町の「弥五郎どん祭り」は、岩川八幡神社一帯で行われた。午後から雨に見舞われたが県内外からやって来た約五万人（大隅署推定）の見物人は大男・弥五郎どんの浜下りに目を見張り、秋の大祭りを満喫した。

「弥五郎どんが起きつ、みんな起きよ」。午前二時、子どもたちが太鼓を打ち鳴らしながら町内を巡った。これを合図に無病息災、家内安全を祈る参拝者が続々と八幡神社へ。

境内では町商工会青年部員らが弥五郎どんの身づくろいに取りかかった。夜明けとともに一年の眠りから覚め、むくむくと起き上がった身の丈四・八五メートルのその姿は威風堂々。

午前九時すぎには市中パレードがスタート。町民投票で選ばれたミスター弥五郎の坂口幸夫さん（三三）とミス秋祭りの三人のお嬢さんを先頭に約千人が商店街に繰り出し、町は祭り一色に。

そしていよいよ弥五郎どんの浜下り。曇り空からあいにくと雨もようとなったが、午後一時すぎ、はつた姿の岩川小児童らに引かれた巨大人形が参道に姿を現すと、見物人からは「わー、でかいなあ」との大歓声。つり上がった太くて黒いまゆ。ギョロリと四方をにらみ回すかのような鋭い目でゆつりと町内をまっ歩。引き手に加わると病気をなどしないうの言い伝えに、雨にもかわらず、大勢の見物人が弥五郎どんに駆け寄った。

昭和63年10月4日『南日本新聞』

○弥五郎どん祭り、中止 天皇陛下ご病気で 神事だけは挙行

【大隅】県内三大祭りのひとつ、曾於郡大隅町八幡神社の「弥五郎どん祭り」が、天皇陛下のご病気を配慮して、今年（十一月三日）は中止されることになった。同祭り奉賛会（会長・野上田耕二商工会長）が三日決めたもので、戦時中も途絶えることになった同祭りは、長い伝統のなかで初めての中止となった。

祭りを取りやめたの中止については、野上田会長は「陛下が病床上に就かれていた状態のなかで、祭りをを行うのはいかなるものか」と考えて、中止を決定した。奉賛会の内部でも中止に反対する声は出なかった」と説明。同神社の山口長森宮司も「ご神幸行列などをにぎやかにするのとは、この時期には適当ではない。礼を失うと思う」としている。

同祭りのメインは、神社の祭神、弥五郎どんの巨人人形が町中を歩く浜下り。昨年は県内外から約八万人が見物に訪れた。今年は浜下りををはじめ武道祭、行列、踊りをすべて中止するが、境内での弥五郎

どん起こしなど、神社の神事に限っては十一月五日に予定通り行う。

昭和63年11月4日『南日本新聞』

○自粛ムードの中 秋祭り賑わう 山之口、弥五郎どんに2000人

（省略）

また山之口の町野神社浜下り神事では、弥五郎どんが今年も元気な姿を披露。約二千人を楽しませた。曾於郡大隅町岩川の「弥五郎どん祭り」は五日の神事だけに自粛されたが、こちらは地元のため願ひで行われた。

山之口の弥五郎どんは、岩川の次男、飯肥（日南市）の三男の三人兄弟の長男。焼酎とばくちが大好きな長兄は、貧乏で汚れた麻の薄着しか身にまといないが、地元の人たちは心から愛し、第二次大戦中も休まず続けてきた。

木製の車に乗った高さ四メートルの弥五郎どんは朱色のいかつい面に腰には大きな木刀。六百メートル離れた分社まで進む浜下り行列の先頭に立ち、のびやかな太鼓の音に乗って参道を往復、主役を無事に務めた。

一方、大隅町岩川の八幡神社は、近くの町民が参拝に訪れるだけでひっそり。町商工会青年部が神事にそなえて組み立てた二男の弥五郎どんは、境内に到着しに参拝客の祈願を受けた。

昭和63年11月5日『南日本新聞』

○きょう神事だけを実施 大隅町、弥五郎どん祭り

【大隅】曾於郡大隅町八幡神社の「弥五郎どん祭り」は天皇陛下のご病気を配慮して今年（三日）は中止されたが、神事に限っては、五日午前十時半から、例年通り、境内で行われる。

神社の御神体で、身の丈四・八五メートルの巨人人形・弥五郎どんは町商工会青年部の手で組み立てられ、二日夜から境内に据えられている。参拝、祈願できるのは五日午後三時までで、その後、この巨人人形は解体される。

昭和63年11月6日『南日本新聞』

○「立ちん坊」弥五郎ちよつぱり寂しげ 大隅町 神事だけで解体

【大隅】曾於郡大隅町の八幡神社で五日、弥五郎どんの浜下りなど、三日に予定していた祭行事はすべて中止されたが、神事に限っては例年通り、挙行された。巨人人形・弥五郎どんは今年も町中に繰り出すこともなく、境内に据えられたまま、寂しげに秋祭りとなった。

神事は午前十時半から、神社や町の関係者約三十五人が出席して行われ、寒いの秋に感謝した。この間、境内には参拝客が次々と練り出し、弥五郎どんの前に置かれたさい銭箱に、無病息災を願ってお金を投入したり、人形をバツクに記念撮影をしていた。近くの望星幼稚園舎の園児三十人もお祈りにやっつき、「弥五郎どんが動かなくて、子供たちも寂しそうです」と引率してきた保母の富田厚子さん（三三）は話していた。

弥五郎どん人形は神事が終わったあと、午後には町商工会青年部の手で解体された。

◇弥五郎どんに手を合わせ、お祈りするチビっ子たち

平成元年1月31日『南日本新聞』

○大隅、日向に、三兄弟、交流の深さを象徴

「弥五郎どんが起きつと、みんな起きよ」。十一月三日午前二時、曾於郡大隅町岩川の街を、子供たちが太鼓をたたきながら大声でふれ回る。「弥五郎どん起し」の始まりだ。

寝ほけまなごをこすりながら、白い息をはきながら、住民らは八幡神社への階段をかける。すぐに明かりと暖をとるためのたき火が始まり、青年たちが中心になって弥五郎どんの身づくろいをする。約二時間がかり、境内にいる若男女がロープを引くと、巨体がゆつくりと起き上がる。一年ぶりのお目覚めだ。ギョロ目があたりを威圧する。身長四メートル。梅染めの衣装は四年に一回作り替えるが、これに要する布は三十反とも四十反とも。一反は約十メートル、大人一人分の着物が作れる量だから、その大きさが分かる。腰には白帯。四二メートルの太刀。二メートルの小刀さえ頼りなく見える。台車に乗せられ、午後は「浜下り」。岩川の中心街をのし歩くさまは、まさに威風堂々。

大隅町と同じような「弥五郎どん祭り」が、実は宮崎県北諸郡郡山之口町富吉の円野（まるの）神社Ⅱ昔は野八幡Ⅱと、日南市飲肥の田ノ上八幡神社にもある。文化財保護審議会は最近、二つを国の無形民俗文化財として選定するよう文化庁長官に答申した。

山之口の弥五郎どんは身長四メートル余。赤ら顔、粗末な麻の着物のいでたちで浜下りをする。「この弥五郎どんは焼酎飲みで、ばくち打ち。それで貧乏になり、冬になっても薄いこんな着物しか着られなかつた」（同町企画開発課、川内邦昭課長補佐）。祭りは岩川と同じ十一月三日。

飲肥では「弥五郎さん」と呼ぶ。佐師兼美宮司（七四）らの話によると、もとの弥五郎さんは六メートル前後、大人でもまた下をくぐるほどだったという。「浜下りをする道路に電線が張られたため、だんだん小さくなって、昭和十五年以降は姿を見せただけ、と中島俊一さん（八六）。昨年十一月、身長五メートル余り、台車つきの弥五郎さん一、二分、を作って寄進した。例祭は十一月二十三日、つきは浜下りも復活しそう。

都城市都北町の本村秀雄さん（六八）は、昭和二十七年、岩川高校に赴任したのが縁で「弥五郎どん」とりつかれてしまった。以来三十七年間研究を続け、現在は南九州文化研究所長として多くの著書がある。

「弥五郎は養老四年（七二〇年）の単人の反乱の首領で、なかなかの偉丈夫。朝廷から鎮圧されて死ぬが、多くの戦死者をもなった。たたりがないよう朝廷が放生会（ほうじょうえ）をした名残が弥五郎どん祭り。日向や大隅に残る弥五郎どんの足跡伝説や巨人伝説が信仰に発展、そのうち二つの神社が今も祭りとして続けているのです」

「弥五郎どん」といって、本村さんの説を紹介するにどうもたい。ただ、弥五郎どんにまつわる話が、大隅から日向にかけてしか残っていないことは、この地区の昔からのつながりの深さを示すものといえる。

ところで、宮崎県大百科事典に二つの話として「弥五郎どんは山之口が長男、岩川が二男で、既肥が三男」と紹介されている。この話に反発する向きもある。「もとと一人の人間で、三兄弟というは近世になってきた俗説」（本村さん）。

しかし由来はともかく、今私たちの身近に弥五郎どんが三人いるのは事実だ。「祭りは楽しく夢が必要。にせぶりも三者三様。せび三兄弟を対面させてあげたい」という声もある。左から山之口町富吉、大隅町岩川、日南市飲肥。それぞれ顔つきが異なる。

平成元年11月2日「南日本新聞」
○あす弥五郎どん祭り 大隅町

【大隅】県内三大祭りのひとつ、曾於郡大隅町の「弥五郎どん祭り」は三日、岩川八幡神社を中心に行われる。昨年は昭和天皇の御病氣で中止されており、二年ぶりの開催。弥五郎どんは、同神社の祭神・武内宿禰がモデルとされ、身の丈四・八五メートルの巨大人形「弥五郎どん起し」は同日午前二時、神社境内で始まり、午前六時すぎに終了。祭りのハイライト、浜下りは午後二時からで、岩川小の児童たちに引かれ、巨大人形が街中にゆつたりと歩く。

祭りのパレードは午前十一時からで、先に町民投票で選ばれたミスター弥五郎、ミス秋祭りを先頭に、踊り連が約五百人繰り出す。岩川小校庭では、午前八時半から武道大会も開かれる。同日は神社付近から県大隅合庁間の道路は歩行者天国となり、車が進入禁止となるほか、パレード、浜下りが行われる時間帯（午前十時半―正午、午後二時半―四時）に限り、農協―鹿児島交通駐車場の県道が車両通行を規制される。国道269号は規制はない。遠方からの見物客のために、各駐車場には、祭りの行事内容など記したチラシ入りの案内ボックスが設置される。

○弥五郎どん浜下りコース
平成元年11月4日「南日本新聞」
○威風堂々、浜下り 入浴は7万人 弥五郎どん祭り

県内三大祭りのひとつ、曾於郡大隅町の弥五郎どん祭りは、岩川八幡神社一帯で行われた。昨年は昭和天皇のご病氣で中止され、二年ぶりの開催。約七万人（大隅署推定）の見物客が大隅・弥五郎どんの勇壮な浜下りに目を引きつらした。午前二時、岩川地区の子供たちが打ち鳴らすフレ太鼓を合図に祭りが幕を開け、無病息災、家内安全を祈る参拝者の列が、暗い神社境内へと続いた。境内では、町商工会青年部員らが弥五郎どんの身づくろいに取りかかった。梅染めの着物が白いさし帯。祭神・武内宿禰がモデルとされ、夜明けとともに、綱に引かれ、むつくと起き上がった、身の丈四・八五メートルのその姿は威風堂々。

午前八時半、神社わきの岩川小学校庭では奉納武道大会が始まり、一帯は人で埋まった。午前十一時からパレード。町民投票で選ばれたミスター弥五郎・馬場和文さん（三七）は、鹿兒島相互信用金庫岩川支店Ⅱと、ミス秋祭りの三人のお嬢さんを先頭に約五百人の踊り連が商店街へと繰り出した。そしていよいよ弥五郎どんの浜下り。午後二時前、はつぴ姿の岩川小児童に引かれた巨大人形が、秋の日差しを浴びながら、紅葉の参道から姿を現すと、見物客から歓声が上がった。つり上がった太いまゆ。四方をききまわると見回すようないかつい顔。引き手に加われば縁起直し、との言い伝えに大勢の見物客が弥五郎どんを取り囲み、祭りは最高潮。弥五郎太鼓隊、稚児行列を従え町内を約三時間、ゆつたりと歩いた。

○参道から浜下りに向かう弥五郎どんⅡ大隅町岩川八幡神社
○ばくちが好きが大酒飲み こちらは弊衣弥五郎どん 山之口町
【郡城】ことごとく、文化庁から国の無形民俗文化財に指定された宮崎県北諸郡郡山之口町富吉の円野神社「弥五郎どんまつり」が、秋晴れの三日、のどかに行われた。南九州に残る大人信仰の象徴の弥五郎

どんは、曾於郡大隅町岩川と日南市にも現存、秋祭りの主役として人気がある。

山之口の弥五郎どんは三人の長兄だが、大酒飲みでばくち好きの放とつ者。そのせいで身上つぶして、祭りには麻布でつくった朱着をまとって登場する。身の丈四メートルの弥五郎どんは、顔にたねの木彫りの面をつけ、腰には大小の木刀姿。浜下りの行列の先頭に立って、五百メートル離れた分社までしつこく行進する。

岩川の弥五郎どんまつりが数万人の見物客が詰めかけるのに対し、こちらは、せいぜい千人とまり、稲刈りの終わった田んぼわきの参道には、近くの農家や南九州各地からやってきたひとがたたずみ、牧歌的な弥五郎どん行列を楽しげに眺め、古くゆたかな日本の農村の田園風景にひたっていた。

○地元の子供らに引かれ、参道を進む弥五郎どん
平成2年11月2日「南日本新聞」
○あす弥五郎どん祭り 大隅町

曾於郡大隅町岩川八幡神社恒例の「弥五郎どん祭り」は三日、同神社を中心で開催される。弥五郎どんは身の丈四・八五メートル、梅染めの着物がつめかせるのに対し、こちらは大男。由来はさまざまだが、同神社の祭神・武内宿禰とか、単人の首領とかいわれている。同日は午前二時、神社境内の「弥五郎どん起し」で祭りが開始。ハイライトの「浜下り」は、午後二時から岩川小学校の児童らが町内を引いて行われる。午前十一時から、投票で選ばれたミスター弥五郎、ミス秋祭りを先頭に、総勢千人が踊りやパレードを行うほか、岩川小学校庭では武道大会、神社境内では各種イベントが開かれる。このため神社周辺は歩行者天国で解放されるほか、一部車両進入禁止の規制がある。またパレード、浜下りの行われる時間帯（午前十時半―一時半、午後二時半―四時）は、農協―鹿児島交通駐車場の県道が通行止めになる。このため国道269号など、回路が設けられる。同祭りの奉賛会（野上田耕二商工会長）は八万人の出入を予想している。

○弥五郎どん祭り浜下りコース
平成2年11月4日「南日本新聞」
○お祭り最高潮 よかにせぶり一段とアップ 弥五郎どん

ノッソリ、ノッソリ神社の大鳥居をくぐり抜け、周囲を威圧する五メートル近い大男。無病息災、商売繁盛を祈願する参拝者からどつと歓声がわき、祭りはクライマックスに。曾於郡大隅町の岩川八幡神社を中心に行われた「弥五郎どん祭りⅡ」には、八万人が詰めかけた。午前二時過ぎ、弥五郎どん起しを告げる子供たちの触れ太鼓で祭りがスタート。身づくろいをし、午前六時に四本の綱で引れ起さ上げた弥五郎どんは、梅染めの着物が白いさし帯。大きな目玉の独特の面は、約二十年ぶりに化粧直し、ぐつとよかにせぶり。メーンの浜下りは午後二時から。弥五郎どんが引く子弥五郎どんがパレード。メーンの浜下りは午後二時から。宮崎県北諸郡郡山之口町富吉の円野神社であった。弥五郎どんの浜くたりⅡでは、巨人伝説の主人公、弥五郎どん三兄弟の長兄とされる山之口の弥五郎どんが、御神行列の先導役を務め約六百メートルの参道を堂々と進んだ。浜下りに向かう弥五郎どんⅡ大隅町岩川八幡神社。

平成3年11月1日 『南日本新聞』

○弥五郎どん祭り 3日大隅町で あす前後夜祭

曾於郡大隅町の「弥五郎どん祭り」は三日、ご神体が祭られている岩川八幡神社を中心に行われる。弥五郎どんは同神社の祭神・武内宿祢がモデルといわれ、身の丈が四・八五メートルもあり、威風堂々の大男。「弥五郎どん起し」と呼ばれる巨大人形の組み立てが神社境内で行われる。同時から本殿祭、祭りのハイライト「浜下り」は、弥五郎どんが岩川小の児童らに引かれ午後二時に同神社を出発し、約三時間半かけて市街地をゆつくりのし歩く。

浜下りに先立ち午前十一時からパレードがあり、町民投票で選ばれたミスター弥五郎とミス秋祭りが先導役。続いて子弥五郎、約五百人の踊り連などが繰り出す。また岩川小学校で終日武道大会があるほか、周辺では各種スポーツ大会が開かれる。今年から前後夜祭として二日午後六時半から町文化会館前で県内太鼓競演、太陽の子保育園児の俵踊りなど郷土芸能発表、完成したばかりの高さ五・九メートルの弥五郎どんの「ご分身」も公開する。

祭日当日、神社周辺は歩行者天国で開放され、車は進入できないほかパレード、浜下りが行われる午前十時半～十一時半、午後二時半～五時の間、県道志布志福山戦のバイパス高架橋一八合原交差点間が通行止めになる。国道269号の交通規制はない。遠方からの見物客のために、近辺には駐車場が十数カ所設けられている。

平成3年11月4日 『南日本新聞』

○祭り沸騰 酔う人波、威風堂々、浜下り

「ワッジョイ」、そして「エイヤサー」。文化の日の三日、曾於郡大隅町と鹿兒島市が沸騰した。「弥五郎どん祭り」と「おほら祭」。五メートルの大男・弥五郎どんを曳く子供は威勢のいい掛け声とともに大鳥居をぐりぐりぬけ、一万七千人の踊り連は軽快な民謡に合わせて市街地を練り歩いた。大陸の高気圧に覆われ、澄み切った青空のもと、見物人も一体となって「秋の祭り」を満喫した。

【弥五郎どん】 威勢のいい子供たちの掛け声に引かれながら、威風堂々の大男「弥五郎どん」が大鳥居をぐりぐり抜けると、無病息災、家内安全を願う見物人の間からドッと歓声がわき上がった。曾於郡大隅町岩川八幡神社の伝統行事「弥五郎どん祭り」には、近在近郷から八万人余が訪れ、同境内周辺は終日祭り一色に包まれた。午前二時過ぎ、「弥五郎どん起し」を告げるふれ太鼓でスタートした。祭りは午後二時から「浜下り」でクライマックスを迎えた。梅染めの着物は白い帯、大小の刀を差した身の丈五メートルの弥五郎どんは、岩川小五年の児童に引かれ、三時間半にわたる町内をかつ歩。昨年「お色直し」したばかりのギョロ目でもちよびりユーモラスな面が、周囲を威圧する。また今は数少なくなった「巨神伝説」の主もあつて、アマ、プロの写真家が町内各所に陣取り、盛んにシャッターを切った。

【浜下り】に先立ち、午前十一時から町民多数が参加する市パレードがあり、祭りを盛り上げた。町民投票で選ばれた「ミスター弥五郎」の松ノ下広和さん（二四）と、「ミス秋祭り」の三人娘が先導役を務めたほか、子弥五郎を引く岩川小児童や約五百人の踊り連に、沿道から大きな拍手が送られた。

◇大鳥居をぐりぐり、浜下りに向かう弥五郎どん

平成4年5月14日 『南日本新聞』

○7月のスペイン巨人万博 弥五郎どんに招待状 資金なく断念？

あす締め切り、苦悩の大隅。弥五郎どんに招待状 資金なく断念？ 〇7月のスペイン巨人万博。弥五郎どんに招待状 資金なく断念？ 〇7月のスペイン巨人万博。弥五郎どんに招待状 資金なく断念？

【弥五郎どん】 威勢のいい子供たちの掛け声に引かれながら、威風堂々の大男「弥五郎どん」が大鳥居をぐりぐり抜けると、無病息災、家内安全を願う見物人の間からドッと歓声がわき上がった。曾於郡大隅町岩川八幡神社の伝統行事「弥五郎どん祭り」には、近在近郷から八万人余が訪れ、同境内周辺は終日祭り一色に包まれた。午前二時過ぎ、「弥五郎どん起し」を告げるふれ太鼓でスタートした。祭りは午後二時から「浜下り」でクライマックスを迎えた。梅染めの着物は白い帯、大小の刀を差した身の丈五メートルの弥五郎どんは、岩川小五年の児童に引かれ、三時間半にわたる町内をかつ歩。昨年「お色直し」したばかりのギョロ目でもちよびりユーモラスな面が、周囲を威圧する。また今は数少なくなった「巨神伝説」の主もあつて、アマ、プロの写真家が町内各所に陣取り、盛んにシャッターを切った。

平成4年5月17日 『南日本新聞』

○弥五郎どん巨人博招待 航空便で出張検討 大隅町商工会青年部 実現へ募金活動

【弥五郎どん】 威勢のいい子供たちの掛け声に引かれながら、威風堂々の大男「弥五郎どん」が大鳥居をぐりぐり抜けると、無病息災、家内安全を願う見物人の間からドッと歓声がわき上がった。曾於郡大隅町岩川八幡神社の伝統行事「弥五郎どん祭り」には、近在近郷から八万人余が訪れ、同境内周辺は終日祭り一色に包まれた。午前二時過ぎ、「弥五郎どん起し」を告げるふれ太鼓でスタートした。祭りは午後二時から「浜下り」でクライマックスを迎えた。梅染めの着物は白い帯、大小の刀を差した身の丈五メートルの弥五郎どんは、岩川小五年の児童に引かれ、三時間半にわたる町内をかつ歩。昨年「お色直し」したばかりのギョロ目でもちよびりユーモラスな面が、周囲を威圧する。また今は数少なくなった「巨神伝説」の主もあつて、アマ、プロの写真家が町内各所に陣取り、盛んにシャッターを切った。

【弥五郎どん】 威勢のいい子供たちの掛け声に引かれながら、威風堂々の大男「弥五郎どん」が大鳥居をぐりぐり抜けると、無病息災、家内安全を願う見物人の間からドッと歓声がわき上がった。曾於郡大隅町岩川八幡神社の伝統行事「弥五郎どん祭り」には、近在近郷から八万人余が訪れ、同境内周辺は終日祭り一色に包まれた。午前二時過ぎ、「弥五郎どん起し」を告げるふれ太鼓でスタートした。祭りは午後二時から「浜下り」でクライマックスを迎えた。梅染めの着物は白い帯、大小の刀を差した身の丈五メートルの弥五郎どんは、岩川小五年の児童に引かれ、三時間半にわたる町内をかつ歩。昨年「お色直し」したばかりのギョロ目でもちよびりユーモラスな面が、周囲を威圧する。また今は数少なくなった「巨神伝説」の主もあつて、アマ、プロの写真家が町内各所に陣取り、盛んにシャッターを切った。

【弥五郎どん】 威勢のいい子供たちの掛け声に引かれながら、威風堂々の大男「弥五郎どん」が大鳥居をぐりぐり抜けると、無病息災、家内安全を願う見物人の間からドッと歓声がわき上がった。曾於郡大隅町岩川八幡神社の伝統行事「弥五郎どん祭り」には、近在近郷から八万人余が訪れ、同境内周辺は終日祭り一色に包まれた。午前二時過ぎ、「弥五郎どん起し」を告げるふれ太鼓でスタートした。祭りは午後二時から「浜下り」でクライマックスを迎えた。梅染めの着物は白い帯、大小の刀を差した身の丈五メートルの弥五郎どんは、岩川小五年の児童に引かれ、三時間半にわたる町内をかつ歩。昨年「お色直し」したばかりのギョロ目でもちよびりユーモラスな面が、周囲を威圧する。また今は数少なくなった「巨神伝説」の主もあつて、アマ、プロの写真家が町内各所に陣取り、盛んにシャッターを切った。

◇大鳥居をぐりぐり、浜下りに向かう弥五郎どん

平成4年5月20日 『南日本新聞』

○巨人万国博招待の弥五郎どん スペイン行けるゾ 寄付1000万円 確保 町も支援検討 大隅を25日出発 船便で

【弥五郎どん】 威勢のいい子供たちの掛け声に引かれながら、威風堂々の大男「弥五郎どん」が大鳥居をぐりぐり抜けると、無病息災、家内安全を願う見物人の間からドッと歓声がわき上がった。曾於郡大隅町岩川八幡神社の伝統行事「弥五郎どん祭り」には、近在近郷から八万人余が訪れ、同境内周辺は終日祭り一色に包まれた。午前二時過ぎ、「弥五郎どん起し」を告げるふれ太鼓でスタートした。祭りは午後二時から「浜下り」でクライマックスを迎えた。梅染めの着物は白い帯、大小の刀を差した身の丈五メートルの弥五郎どんは、岩川小五年の児童に引かれ、三時間半にわたる町内をかつ歩。昨年「お色直し」したばかりのギョロ目でもちよびりユーモラスな面が、周囲を威圧する。また今は数少なくなった「巨神伝説」の主もあつて、アマ、プロの写真家が町内各所に陣取り、盛んにシャッターを切った。

【弥五郎どん】 威勢のいい子供たちの掛け声に引かれながら、威風堂々の大男「弥五郎どん」が大鳥居をぐりぐり抜けると、無病息災、家内安全を願う見物人の間からドッと歓声がわき上がった。曾於郡大隅町岩川八幡神社の伝統行事「弥五郎どん祭り」には、近在近郷から八万人余が訪れ、同境内周辺は終日祭り一色に包まれた。午前二時過ぎ、「弥五郎どん起し」を告げるふれ太鼓でスタートした。祭りは午後二時から「浜下り」でクライマックスを迎えた。梅染めの着物は白い帯、大小の刀を差した身の丈五メートルの弥五郎どんは、岩川小五年の児童に引かれ、三時間半にわたる町内をかつ歩。昨年「お色直し」したばかりのギョロ目でもちよびりユーモラスな面が、周囲を威圧する。また今は数少なくなった「巨神伝説」の主もあつて、アマ、プロの写真家が町内各所に陣取り、盛んにシャッターを切った。

平成4年5月21日 『南日本新聞』

○巨人博招待の弥五郎どん 大隅町が500万円拠出

【弥五郎どん】 威勢のいい子供たちの掛け声に引かれながら、威風堂々の大男「弥五郎どん」が大鳥居をぐりぐり抜けると、無病息災、家内安全を願う見物人の間からドッと歓声がわき上がった。曾於郡大隅町岩川八幡神社の伝統行事「弥五郎どん祭り」には、近在近郷から八万人余が訪れ、同境内周辺は終日祭り一色に包まれた。午前二時過ぎ、「弥五郎どん起し」を告げるふれ太鼓でスタートした。祭りは午後二時から「浜下り」でクライマックスを迎えた。梅染めの着物は白い帯、大小の刀を差した身の丈五メートルの弥五郎どんは、岩川小五年の児童に引かれ、三時間半にわたる町内をかつ歩。昨年「お色直し」したばかりのギョロ目でもちよびりユーモラスな面が、周囲を威圧する。また今は数少なくなった「巨神伝説」の主もあつて、アマ、プロの写真家が町内各所に陣取り、盛んにシャッターを切った。

【弥五郎どん】 威勢のいい子供たちの掛け声に引かれながら、威風堂々の大男「弥五郎どん」が大鳥居をぐりぐり抜けると、無病息災、家内安全を願う見物人の間からドッと歓声がわき上がった。曾於郡大隅町岩川八幡神社の伝統行事「弥五郎どん祭り」には、近在近郷から八万人余が訪れ、同境内周辺は終日祭り一色に包まれた。午前二時過ぎ、「弥五郎どん起し」を告げるふれ太鼓でスタートした。祭りは午後二時から「浜下り」でクライマックスを迎えた。梅染めの着物は白い帯、大小の刀を差した身の丈五メートルの弥五郎どんは、岩川小五年の児童に引かれ、三時間半にわたる町内をかつ歩。昨年「お色直し」したばかりのギョロ目でもちよびりユーモラスな面が、周囲を威圧する。また今は数少なくなった「巨神伝説」の主もあつて、アマ、プロの写真家が町内各所に陣取り、盛んにシャッターを切った。

【弥五郎どん】 威勢のいい子供たちの掛け声に引かれながら、威風堂々の大男「弥五郎どん」が大鳥居をぐりぐり抜けると、無病息災、家内安全を願う見物人の間からドッと歓声がわき上がった。曾於郡大隅町岩川八幡神社の伝統行事「弥五郎どん祭り」には、近在近郷から八万人余が訪れ、同境内周辺は終日祭り一色に包まれた。午前二時過ぎ、「弥五郎どん起し」を告げるふれ太鼓でスタートした。祭りは午後二時から「浜下り」でクライマックスを迎えた。梅染めの着物は白い帯、大小の刀を差した身の丈五メートルの弥五郎どんは、岩川小五年の児童に引かれ、三時間半にわたる町内をかつ歩。昨年「お色直し」したばかりのギョロ目でもちよびりユーモラスな面が、周囲を威圧する。また今は数少なくなった「巨神伝説」の主もあつて、アマ、プロの写真家が町内各所に陣取り、盛んにシャッターを切った。

◇大鳥居をぐりぐり、浜下りに向かう弥五郎どん

どの難関を次々に突破した。

ゼロからの出発。資金のあてはほとんどなく、スペイン語の壁で現地の状況もつかめなかった。だが、巨人博を主催する巨人祭り協会のフアン・サブリド会長からの招待に並々ならぬ熱意を感じ取り、部員一同が燃えた。

地元企業や町出身者で組織する関東、関西の弥五郎会員に呼び掛け、浄財を募った。町民にとつても心のシンボルといえる弥五郎どん。「予想以上の反響」に町も補助金の支出を決めた。輸送手段も当初の船便から航空便、再び別の船便と変わり、ようやくめどがつけられた。「鳩首きゅうしゅ」協議だけでは何もことが進まない。若さをバネに、考えるよりまず行動を起こすことの大切さを痛感しました。部員全員が頑張りにも感謝しています。商工会や自宅には、激励や寄付の申し込みが相次ぎ、仕事も手につかない状態。

駒沢大学法学部卒。父親の司法書士事務所で修業中。大隅町岩川(省略)の自宅に両親と妻弘子さん(三二)、二女の六人暮らし。スペイン遠征から帰国する八月初め、三人目が誕生する。

◇(鳥丸大志郎氏の顔写真)

平成4年5月25日 『南日本新聞』

○弥五郎どん スペイン遠征へ身支度 28日に出発
曾於郡大隅町商工会青年部(鳥丸大志郎部長)は二十四日、スペインの巨人祭り協会から、七月バルセロナ五輪を記念して開く巨人万国博に招待された弥五郎どんを組み立てた。二十五日にはこん包のためいったん解体したあと、二十八日神戸港に向け出発する。

ご神体を祭る同町の岩川八幡神社で行われた組み立て作業には、青年部員やむら興しグループ・弥五郎塾の若者ら約三十人が参加。台車の周りに足場を組み、竹かごで編んだ胴体に梅染めの着物とさらし帯を着せると、見の丈五・五メートルの威容が姿を現した。初の海外遠征に向けた最終チェックとあつて、約三時間かけ、慎重に作業を進めた。船積みのための重量測定の結果、弥五郎どんの体重は約七〇〇キロと判明。二十五日に青年部手作りの特製の木箱に、本体と台車に分けてこん包する。二十八日神戸港に搬送し、通関手続きのあと六月七日に日本郵船の貨物船で出港。七月二日バルセロナに到着の予定。現地協会の協力は、「日本の貴重な文化財として、保管には万全を期す」と連絡があつたという。

派遣団には山口長森宮司も同行する。航空便で巨人博前日の七月十六日バルセロナ近郊の会場マタデベラに入り、弥五郎どんを組み立てる計画。一行はカタロニア州政府の表敬訪問なども検討している。

募金活動は順調で、大隅署OB会や県内各地の商工会青年部、同婦人部などから連日数件の浄財が寄せられているという。

◇初の海外遠征に身支度を整える弥五郎どん 大隅町の岩川八幡神社

平成4年5月29日 『南日本新聞』

○地元熱意盛りスペインへ 弥五郎どん出発
巨人万国博に招待された弥五郎どんの出発式が二十八日、曾於郡大隅町の商工会館中庭であつた。

式には商工会青年部(鳥丸大志郎部長)ら関係者十五人が参列。岩川八幡神社の神官のおはらいを受けたあと、鳥丸部長らがスペイン遠征の成功を祈つて玉くしをささげた。

弥五郎どんは棒や竹かごで編んだ胴体と、衣装や面、台車の三つに解体され、特製の木箱にこん包してあり、リフトでトラックに積み込ま

れた。地元運送会社が無償で搬送を請け負い、二台のトラックは青年部員の拍手のなか出発した。宮崎新港からフェリーで神戸港に運び、通関手続きのあと六月七日、日本郵船の貨物船で出港。七月二日バルセロナに到着の予定。

派遣団は航空便で七月十四日に出発、同十七日にバルセロナ近郊のマタデベラで開幕する巨人博に参加する。今月二十九日には町長、議長らをメンバーに「弥五郎どんスペイン遠征対策協議会」(仮称)の初会を開き、募金活動など町ぐるみの支援態勢を整える。

◇リフトでトラックに積み込まれる弥五郎どん 大隅町商工会館中庭

平成4年6月29日 『南日本新聞』

○国際交流の夢羽はたく 海を渡る弥五郎どん
「弥五郎どん海を越え600体の巨人が大集合巨人万国博へ壮大な浜下り」大隅町役場にこんな垂れ幕が掲げられている。同町のシンボル弥五郎どんはスペインでの博覧会への参加で一層ハクをつけた。

十一月三日の弥五郎どん祭りをはじめ、弥五郎スイカ、弥五郎塾、弥五郎大学など、大隅町には弥五郎伝説の里も目立っている。近年中には弥五郎どんの殿堂「弥五郎伝説の里」もお目見えする。

弥五郎どんの町にさらに弾みをつけたのは弥五郎どんのスペイン行き。町内外からの浄財で、二千万円という遠征費にも目算がつき、七月十七日からの万国博に向けて船旅を続ける弥五郎どんも安どといつたのだが、ヨーロッパの人たちの目にどのように映るか、気になるところだ。スペイン行きをどう生かすかからの課題に気がした。

「スペイン行きで国際交流のチャンスが訪れないとも限らない。弥五郎どんが姉妹都市盟約の橋渡しになつてくれれば、今後も弥五郎どんにこだわって、地域をいこし」と永野町長。いずれにしても弥五郎どんは同町にとつて、地域おこしのまたとない財産だ。

◇11月3日の「弥五郎どん祭り」は県内三大祭りの一つ

平成4年6月30日 『南日本新聞』

○弥五郎どん遠征募金目標額ほぼ達成
曾於郡大隅町の弥五郎どんスペイン遠征推進協議会(会長・永野静夫町長)は二十九日同町役場で会を開き、募金総額が目標の二千万円にほぼ到達したことを報告、派遣団の構成や日程などを正式に決めた。

寄付金は同町在住の渡辺信雄さん(渡辺組合名譽会長)の三百万円を最高に、町からの補助金五百万円を含め同日現在の集計で千九百五十万円。

派遣団は鳥丸大志郎町商工会青年部部長を団長に、役場、農協などの代表二十人。七月十四日成田をたち、パリ経由でバルセロナ入り。近郊のマタデベラで同十七日から三日間開かれる巨人万国博に参加する。

平成4年7月12日 『南日本新聞』

○「弥五郎どん」を激励 大隅町 遠征壮行会を開く
バルセロナ五輪直前の十七日近郊のマタデベラで開かれる巨人万国博に参加する弥五郎どんスペイン遠征団の壮行会が十日夜、曾於郡大隅町の弥五郎温泉であり、関係者約百人が激励に駆け付けた。

遠征推進協議会会長の永野静夫町長が「商工会青年部の熱意が町内外の反響を呼び、多くの浄財のおかげで遠征が実現した。日本の民俗文化の代表として、成功を祈ります」とあいさつ。土屋佳照県知事からの激励も披露した。

山中貞則前衆議院議員らの激励(代読)のあと、遠征団長の鳥丸大志郎町商工会青年部部長が「ヨーロッパ以外からは唯一の招待というチャンスを生かし、精いっぱい国際交流に努めたい」とお礼を述べた。

先に船便で搬送した弥五郎どん本体は今日一日バルセロナに到着し、十一日現地の巨人祭り協会に引き渡された。遠征団は商工会青年部を中心に、町、農協代表ら二十人で構成。十四日成田をたち、パリ経由でバルセロナ入り。同市庁を表敬訪問し、永野町長の親書を手渡す予定。巨人万国博はヨーロッパ各地から六百六十体が参加。十七日の前夜祭で開幕し、十九日の最終日は市中パレードがある。

◇激励を受ける弥五郎どんスペイン遠征団一行

平成4年7月18日 『南日本新聞』

○弥五郎どんスペインを歩く 巨人博 4・85メートル堂々地元民らもワッショイ
【バルセロナ17日共同】五輪開幕を前にバルセロナ近郊の町マタデベラで十七日、巨大人形を集めた「巨人万国博」が開かれ、日本からは曾於郡大隅町に伝わる「弥五郎どん」(身の丈四・八五メートル)が参加。地元民の喝さいを浴びながら、町を練り歩いた。

午後七時の開会宣言の後、カタルーニャの民俗衣装をまとった男女二組のヒガンデス(巨大人形)が笛や太鼓に先導されながら行進。続いて茶色の着物の白い帯を締め、大小日本の刀を差した弥五郎どんが登場した。

大隅町商工会青年部部長の鳥丸大志郎さん(三五)ら二十人が「ワッショイ」と綱を引き、台車に乗った弥五郎どんを動かすと、町民たちも綱引きに加わり「ワッショイ」と声を合わせた。

巨人万国博は八二年に始まり今回が二回目。オランダ、フランス、ベルギーなど欧州十カ国とスペイン各地から計六百体余の巨大人形が参加。三日間にわたつて観光客三万人を集め国際色豊かな祭りが繰り広げられる。

鳥丸さんは「皆さんがすごく情熱的なので感激です。お互いに小さな町同士ですが、国際交流の一助になるよう頑張ります」と話していた。弥五郎どんは現地の巨人祭り協会から三月末、招待状が届いた。資金のメドがつかず一時は断念したが、町内外から多くの浄財が寄せられ、町の補助を含めて二千万円を超す資金を確保。初の海外遠征が決まった。

一行は十四日成田をたち、パリ経由でバルセロナ入り。十六日、先に船便で搬送した弥五郎どんを組み立てた。地元テレビ、新聞などの取材も多く、現地でも暖かい歓迎を受けている。

大隅町弥五郎どん遠征推進協議会会長の永野静夫町長は「弥五郎どんが世界の巨人と肩を並べて歩き、感激でいっぱい。多くの支援者の好意に報い、国際交流を深めてほしい」と語った。

◇巨人万国博で地元の人たちにも引いてもらい、マタデベラの町を回る大隅町の「弥五郎どん」 17日午後

平成4年7月19日 『南日本新聞』

○弥五郎どんスペイン歩く 地元民もワッショイ 巨人博に参加
【バルセロナ17日共同】五輪開幕を前にバルセロナ近郊の町マタデベラで十七日、巨大人形を集めた「巨人万国博」が開かれ、日本からは曾於郡大隅町に伝わる「弥五郎どん」(身の丈四・八五メートル)が参加。地元民の喝さいを浴びながら、町を練り歩いた。

午後七時の開会宣言の後、カタルーニャの民俗衣装をまとった男女二組のヒガンデス(巨大人形)が笛や太鼓に先導されながら行進。続い

て茶色の着物に白い帯を締め、大小二本の刀を差した弥五郎どんが登場した。

大隅町商工会青年部長の鳥丸大志郎さん(三三)と二十人が「ワッショイ」と綱を引き、台車に乗った弥五郎どんを動かすと、町民たちも綱引きに加わり「ワッショイ」と声を合わせた。

巨人万博は八二年に始まり今回が二回目。オランダ、フランス、ベルギーなど欧州十カ国とスペイン各地から計六百体余の巨大人形が参加。三日間にわたって観光客三万人を集め国際色豊かな祭りが繰り広げられる。

鳥丸さんは「皆さんがすごく情熱的なので感激です。お互いに小さな町同士ですが、国際交流の一助になるよう頑張ります」と話していた。弥五郎どんは現地の巨人祭り協会から三月末、招待状が届いた。資金のメドがつかず一時は断念したが、町内外から多くの浄財が寄せられ、町の補助を含めて二千万円を超す資金を確保、初の海外遠征が決まった。

一行は十四日成田をたち、パリ経由でバルセロナ入り。十六日、先に船便で搬送した弥五郎どんを組み立てた。地元テレビ、新聞などの取材も多く、現地で暖かい歓迎を受けている。地元テレビ、新聞などの取材も多く、現地で暖かい歓迎を受けている。地元テレビ、新聞などの取材も多く、現地で暖かい歓迎を受けている。

○世界の巨人と肩並べ堂々 弥五郎どん「一番手」でスペイン登場 成功に沸く大隅町 臨時の有線放送で一報
バルセロナ近郊のカタデラで十七日夜開幕した巨人万国博で、弥五郎どんは町中の歓迎を受け、世界の巨人と肩を並べ堂々の行進をした。地元の有線放送で町民に知らせ、遠征の成功に沸いている。

遠征団長の鳥丸大志郎同町商工会青年部長から商工会に入った国際電話によると、万国博は快晴のもと、華やかな雰囲気の中で開幕。巨人祭り協会の計らいで、弥五郎どんは欧州以外から初参加の日本代表として真っ先に紹介された。法被姿で参加した一行二十人は全員元気で、二日目の歓迎レセプションでは弥五郎太鼓なども披露する予定。

大隅町遠征推進協議会会長の永野静夫町長は、十八日開かれた定例町議会最終本会議で、弥五郎どんのスペイン、浜下り、を報告。「初めての海外遠征で心配しながら送り出したが、日本代表として立派な成果を上げ胸がいつぱい。浄財を寄せていただいた多くの人に感謝したい」と喜びを語った。

同夜は弥五郎どんを祭る岩川八幡神社の六月灯もあり、遠征成功の知らせを聞いた町民が大勢詰め掛け、例年以上のにぎわいを見た。

◇弥五郎どんの巨人万博遠征の成功を祝う町職員ら 大隅町役場前

平成4年7月21日 『南日本新聞』

○お先に！金メダル 弥五郎どん 巨人万博で断トツ人気 バルセロナ郊外

【バルセロナ20日共同】バルセロナ郊外の町カタデラで開かれていた「第二回巨人万国博」は十九日終わったが、登場した約六百五十の巨大人形の中で最も人気を集めたのは曾於郡大隅町の弥五郎どんだった。最終日に町の広場を埋め尽くした約七万人の観衆は「弥五郎どん」を載せた台車を大歓声で迎え、多くの人が台車の綱を引いた。

巨人万国博は約四百三十点がカタリニャ、百五十点がスペインの他地域のもので、残る七十点が欧州九カ国と日本(弥五郎どん)のみ

らの出品だった。主催者によると、今回の巨人博は参加人数が世界一となったためギネスブックに記録されるという。

永野静夫大隅町長(六二)は「出発前は資金面で県民の皆さんに心配をかけたが、多くの浄財が寄せられ、何とかスペインに送ることができた。現地では、各国の人が「ワッショイ、ワッショイ」と掛け声をかけてくれたと聞いて感激している。素晴らしい文化交流ができた。後世にも弥五郎どんが海外遠征したことを伝えていきたい」と語った。

平成4年7月25日 『南日本新聞』

○巨人万博の人気者 スペイン遠征の弥五郎どん 観衆と一体 堂々の行進 記念撮影やサイン攻め
バルセロナ五輪直前の十七日から三日間、近郊のカタデラで開かれた巨人万国博に参加した曾於郡大隅町の弥五郎どんは、六百四十七体の巨人の中で一番の人気を集め、熱狂的な喝さいを浴びた。初の海外遠征で成果を上げた遠征団長の鳥丸大志郎町商工会青年部長は、巨人万博の模様や現地の歓迎ぶりなど聞いた。

一行二十人は十四日成田をたち、十五日パリ経由でバルセロナ入り。空港には巨人祭り協会の職員が「オオスミ」の看板を掲げ、民俗音楽でにぎやかに出迎えてくれた。

開幕前日の十六日、先に船便で送っていた弥五郎どんのこん包を解き、全員で組み立てた。胴体の竹がかなり乾燥しており、肩に乗れるか心配したが、大丈夫。地元の人に綱を引いてもらい、早速近くを試運転して回った。

初日は午後七時に開会宣言。欧州九カ国から招待された人々と深夜まで民俗音楽に合わせた歌ったり踊ったりして交歓。遠征団員は、交流を通して参加への自信をつけたという。

十八日はカタリニャ以外の巨人約二百二十体が、祭り広場からメイン会場のサッカー競技場まで一キロを行進。鼓笛隊の先導で行列をつくる巨人と肩を並べ、弥五郎どんも弥五郎太鼓を打ち鳴らしながら町を練り歩き、沿道から一段と大きな拍手と歓声がわいた。

弥五郎どんの身長は、台車を含め五メートルで、オーストラリアの巨人に次ぎ二番目の大きさ。わざとや番傘にも人気が集まり、ジャポンのサムライと記念撮影やサイン攻めにあつた。欧州の巨人は中に担ぎ手が入り、踊りながら歩く方式だが、弥五郎どんは沿道の観衆が「わっしょい」と声を合わせて綱を引き、一体となった行進ができた。

最終日は、地元カタリニャの巨人も申請する六十七体が勢ぞろい。巨人数世界一を記念してギネスブックに申請するため、鳥丸団長も参加のサインをした。州政府のプロジェクト首脳も会場を訪れ、日本からの初参加を歓迎。鳥丸団長はお礼に弥五郎どん人形を贈った。フィナーレでは参加者がTシャツや記念品を交換、巨人同士の別れを惜しんだ。

◇日本から来た「サムライ」として、弥五郎どんの周りには人垣が絶えない 中世ヨーロッパの諸侯や貴婦人の巨人に混じり、堂々の風格で異彩を放つ弥五郎どん

平成4年9月17日 『南日本新聞』

○ふるさと今昔 弥五郎どん祭り 大隅町 進駐軍が「帯刀」を禁止
曾於郡大隅町を代表する弥五郎どんは今夏スペインの巨人万国博に招待され、初の海外遠征で人気を集めた。写真は終戦直後の昭和二十一年十一月の祭りの朝撮影されたものだが、弥五郎どんの腰に大小二本の刀がない。

岩川で建具店を経営する野口久夫さん(五七)によると、進駐軍の命令で、もともと竹光だった刀も数年間差すことができなかつた。

当時の祭りの主体は、馬場地区の青年団。同地区から出稼ぎに行つた若者も祭りが近づくに帰郷し、浜下りに加わつた。弥五郎どんを大八車に載せ、砂利道の曲が角をテコ棒で操るのが、祭りの華でした。通り道に電線があると、その場で切つてまたつないだんですよ」と野口さん。

青年団の減少で、祭りは四十年代初めに商工会青年部に引き継がれ、大掛かりな祭りになった。

◇進駐軍の命令で刀を取り上げられた弥五郎どん。復員で青年団員の数も多かった(野口久夫さん提供) 現在の弥五郎どん祭り

平成4年10月17日 『南日本新聞』

○秋祭り前に着物を新調 25反使い20人がかり 大隅町の弥五郎どん
十一月三日の弥五郎どん祭りを控えた曾於郡大隅町で十五日から、四年に一度うらうらに新調される弥五郎どんの着物づくりが始まった。身の丈四・八五メートルの弥五郎どんの着物に使う反物は二十五反(幅九十センチ、長さ百二十五メートル)。地元の衣料品店社長宮田満志さん(七〇)が、昭和二十七年から毎回奉納している。

馬場集落婦人部の川原田英子さんが同日、岩川八幡神社でおはらいを受けたあと、馬場公民館で作業開始。二十人がかりで四年間使った古い着物の寸法に合わせて型を取つたあと、それぞれ上着とはかまを裁断。数日がかかりで縫い上げていく。

胴体の竹かごも同時に作り直すため、同町商工会青年部は二十五日に衣装合わせをする予定。弥五郎どんの古着を身につけると丈夫になるという言い伝えがあり、婦人部では小さく裁断して浜下りを手伝う子供たちの法被も作る。

「四年に一度の新調なので力が入ります。浜下りの晴れ姿をたくさんの人に見てもらえるように、みんなで力を合わせていいものを作りたい」と川原田さんは張り切っていた。

◇弥五郎どんの着物の寸法と

平成4年11月4日 『南日本新聞』

○曾分も人出も最高潮 スペイン帰り、に歓声 弥五郎どん
曾於郡大隅町ではスペイン帰りの弥五郎どんに歓声が上がつた。鹿兒島市のビル街はおはら祭踊り連の人波が揺れた。秋晴れの3日、県内各地で郷土の祭りが開かれ、それぞれ過去最高の人出を記録。沿道の内も外も一体になって、終日にぎわった。

果無形民俗文化財に指定されている弥五郎どん祭りは岩川八幡神社周辺であり今夏スペインの巨人万国博に日本代表として参加した人気も手伝って、近郷から過去最高の十万人(主催者発表)の人出。深夜の午前一時すぎ、町商工会青年部の舳れ太鼓始まった祭りは、明け方にかけて境内で、弥五郎どん起し。今年は四年に一度の衣替えで、胴体の竹かごや梅染めの着物などが新調された。

岩川小五年の児童ら約五十人「わっしょい、わっしょい」と威勢のいい掛け声とともに綱を引き、身の丈四・八五メートルの弥五郎どんが鳥居をくぐり抜ける、無病息災を願う見物客の間からどとと歓声が上がつた。

弥五郎どんを先導役にしたご神幸は弥五郎太鼓を従え、岩川の町を威風堂々と約三時間かけ浜下り。途中からミスター弥五郎やミス秋祭り、踊り連などの市中パレードも加わり、沿道は大勢の見物客で埋まつた。神社周辺では巨人万国博遠征の写真パネル展のほか、武道大会やのど自慢大会などの奉賛行事もあり、終日わいた。

◇新調した衣裳をまとい、浜下りに出かける弥五郎どん3日、曾於郡大隅町岩川

平成5年8月12日『南日本新聞』

○弥五郎どん兄弟「魂入れ」に参上 都城盆地まつり
立秋の七日、都市の盆地まつりが開かれた。ことしは二十回を記念して弥五郎どん三兄弟を特別招待、単人の最後の酋長（しゅううちょう）といわれる弥五郎どんたちが見守るなかで安久節に乗って踊り連が中央通り（国道10号）を練り歩いた。

招待された弥五郎どんは宮崎県北諸郡郡山之口町野神社、曾於郡大隅町岩川八幡神社、日南市田ノ上八幡神社の弥五郎どん三兄弟の成立年代から仮に山之口が長男、岩川が二男、日南が三男といわれこの三兄弟が盆地に相集りになった。

弥五郎どんは、養老四年（七二〇年）大友旅人に滅ぼされた単人の最後の酋長といわれ、単人の霊のたたりを恐れた朝廷が宇佐八幡系統の神社で「放生会」を行ったこと由来するらしい。

盆地まつりは都城青年会議所が始め、ことしで二十回目を迎えた。祭りの中心になる「祈り」「鎮め」のシンボルを欠いたいわばイベント的な祭りに本来の魂を入れようと弥五郎どんにお越しを願った。

祭りは午後五時中央通りを歩行者天国にして始まった。心配された天気も青空がのぞき、異常続きのなかで奇跡的に恵まれた。これも弥五郎どんの神通力かと盆地の人たちは喜んだ。

岩橋辰也市長らがテラブカット。都城ハリークラブが先導、十九団体六百人のパレードに続き、三十二の踊り連二千四百人が安久節のリズムに乗って通りつばいに踊りを展開した。このあとは祭りの広場で二十九団体が参加するさまざまなイベント、出店にみんな集まり祭りを楽しんだ。

民俗芸能広場では、弥五郎どん三人が見下ろす広場で熊襲（くままで）踊り、じゃんかん馬などが披露され祭り気分を盛り上げた。弥五郎どん三兄弟と熊襲踊りという組み合わせが盆地で見事に実現。まつりの「魂入れ」にふさわしい舞台演出を作り出した。

◇弥五郎どん3兄弟の見守るなかで、熊襲踊りを披露。祭り気分は最高に盛り上がった中央通り。3兄弟のなかでも一番小さく質素な長男・山之口の弥五郎どんも子供たちに引かれてパレードへ

平成5年11月1日『南日本新聞』

○出番近し弥五郎どん 3日朝10時浜下り あす前夜祭 太鼓そろい踏み
曾於郡大隅町の弥五郎どん祭り（県無形民俗文化財）は三日、岩川八幡神社周辺で開かれる。ハイライトの浜下りは午前十時から。弥五郎どんが岩川の中心部を威風堂々と練り歩く。

弥五郎どんは武内宿禰や単人族の首領など諸説ある、身の丈四・八五メートルの巨神。昨年パルセロナ五輪を記念してスペインで開かれた巨人万国博に日本代表として出場したのに続き、今年も大阪市の御堂筋パレードに招待されるなど、全国的にも人気を集めている。

祭りは未明の午前一時、商工会青年部と子供たちが神社周辺を回る。触れ太鼓が始まり、明け方にかけて二十五反の梅染めの着物や大小の刀などで身支度を調える。弥五郎どん起し、をす。

浜下りは神事のあと午前十時に八幡神社を出発し、弥五郎太鼓などを従え、県道沿いの岩川商店街を抜けて鹿児島交通駐車場で折り返す。後半は国分自衛隊音楽隊の先導で、ミスター弥五郎やミス秋祭り、踊り連などの市中パレードと一緒に進み、午後零時半神社に帰る予定。

神社周辺では各種武道や少女パレード大会、郷土芸能のど自慢大会などの奉賛行事も開かれる。浜下りのコースでは車両通行止めや時間規制などがある。見物客用の臨時駐車場は岩川高や役場など十数カ所用意される。

二日の前夜祭は午後六時から、同町文化会館で。今年「どんどん祭り」と銘打ち、霧島九面太鼓の女子部や蒲生太鼓坊主などの競演を中心に、大路相撲や月野中樺踊りなどの郷土芸能が披露される。

平成5年11月4日『南日本新聞』

○勇壮に弥五郎どん祭り 災害の沈滞ムード吹き飛ばせ 大隅町
曾於郡大隅町の弥五郎どん祭り（県無形民俗文化財）が三日、同町の岩川八幡神社周辺であった。今夏の豪雨や台風災害による沈滞ムードを吹き飛ばそうと、約八万人（主催者発表）の人数でにぎわった。

午前一時、町商工会青年部と子供たちが太鼓を打ち鳴らしながら「弥五郎どんが起きつど」と触れ回った。神社境内では二十五反の梅染めの着物や大小の刀などで身支度を整える。弥五郎どん起し、が、同青年部員らの手で明け方まで続いた。

神事のあと、法被を着た岩川小五年の男子児童ら約五十人が「わっしょい、わっしょい」と威勢のいい掛け声とともに綱を引き、身の丈四・八五メートルの弥五郎どんが鳥居をくぐり抜けると、無病息災を願って集まった見物人から大きな歓声が沸いた。

弥五郎どんを先導役にしたご神幸行列は弥五郎太鼓を従え、県道沿いの岩川商店街などを約三時間かけ、威風堂々の浜下り。折り返し地点からはミスター弥五郎やミス秋祭り、踊り連などの市中パレードも加わり、沿道は人波で埋まった。

◇見物人が見守るなか、浜下りに出かける弥五郎どん3日午前10時半すぎ、大隅町の岩川八幡神社
平成6年11月4日『南日本新聞』
○大隅、弥五郎どん 堂々巨神に歓声
曾於郡大隅町の岩川八幡神社周辺であった弥五郎どん祭り（県無形民俗文化財）には約十万人が押し寄せた。

午前一時すぎ、町商工会青年部と子供たちが太鼓を打ち鳴らしながら、「弥五郎どんが起きつど」と触れ回ると、神社境内では明け方までかかって二十五反の着物や大小の刀で身支度を整える。弥五郎どん起し、にかかった。

準備が終わると鉢巻き姿の岩川小五年生と青年部員ら約八十人が「わっしょい、わっしょい」の掛け声とともに綱を引く。巨大な弥五郎どんが鳥居をくぐり抜けると、豊作に感謝し無病息災を願う見物人から大きな歓声と拍手が沸いた。

この後弥五郎どんを先導役にしたご神幸は弥五郎太鼓を従え、岩川の商店街を威風堂々と浜下り。折り返しからはミスター弥五郎やミス秋祭り、踊り連などの市中パレードも加わり、沿道は人波で埋まった。

弥五郎どんは身の丈四・八五メートルの巨神。一昨年スペインの巨人万国博に日本を代表して遠征し、今年三重県まつり博にも招待された。◇浜下りに出かける弥五郎どん3日、曾於郡大隅町の岩川八幡神社

平成7年11月4日『南日本新聞』

○巨人堂々「浜下り」 沿道10万人威容に歓声 大隅町・弥五郎どん
曾於郡大隅町の岩川八幡神社では、県内三大祭りの一つ「弥五郎どん祭り」（県無形民俗文化財）があり、約十万人の人数でにぎわった。

起きる合図の花火が鳴ると同時に、町商工会青年部と子供たちが太鼓を打ち鳴らして町内を触れ回った。境内の弥五郎どんは明け方までかかって身支度。着物や大小の刀をつけて、祭りに臨んだ。

神幸祭典のあと、豊作に感謝し、無病息災を祈る浜下りが始まった。ご神幸の先払い役の弥五郎どんが鳥居をくぐると、大きな拍手と歓声があつた。岩川小五年生と青年部員ら約八十人が「わっしょい、わっしょい」の掛け声とともに巨体を引っ張り、弥五郎どんに合わせ人波も一緒に動いた。

弥五郎太鼓を従えた弥五郎どんは、岩川の町をノッソ、ノッソと浜下り。沿道の見物人は威風堂々とした姿を盛んにカメラやビデオに収めていた。折り返しからはミスター弥五郎、ミス秋祭り、踊り連なども合流し、パレードが行われた。

◇鳥居をくぐって浜下りに出掛ける弥五郎どん3日午前10時20分、大隅町の岩川八幡神社
平成8年1月25日『南日本新聞』
○弥五郎どん銅像お目見え 高さ15メートル、重さ39トン 人物像では国内最大
曾於郡大隅町に二十四日、巨大な弥五郎どんが出現した。同町岩川に四月より一ヶ月を目標して整備中の公園「弥五郎伝説の里」のシンボルとなる高さ十五メートル、重さ三十九トンの銅像。信仰を対象とする像を除いて人物像としては国内最大の大きさだ。

銅像は鐙物の町・富山高岡市で一年がかりで製作。十六パーツに分割、トレーラー二百、十トントラック一台で運び込まれた。同市から職人十五人が来町、約二週間かけ組み上げた。

下半身に上半身を乗せる最後の作業工程を見守った永野静夫町長は「検査のため高岡で見たのより、一層立派に見える。わが古里にあつてこそ弥五郎どんと痛感する」と満足そう。

公園は町の中心部の岡にあり、どこからでも銅像が見えるだけに早くも町民の関心を集めている。銅像は接着面の仕上げを行い二十九日に完成予定。

◇大隅町の中心部に姿を現した弥五郎銅像
平成8年8月16日『南日本新聞』
○みんな友達 広げ交流の輪 弥五郎どんのようにたくましく 大隅リーダー養成塾
曾於郡大隅町の小学校五年生で構成するジュニアリーダー養成塾「子弥五郎塾」のメンバーが、宮崎県北諸郡郡山之口町の青井岳キャンプ場でキャンプし、同町富吉小六年生と交歓会を開いた。両町は三兄弟といわれる弥五郎どんの二男（大隅町）と長男（山之口町）の関係。弥五郎どんが取り持った初めての交流に子供たちは盛り上がった。

○長男の町、訪れキャンプ楽しむ 宮崎・山之口町
弥五郎どんのご神体は両町のほか日南市飲肥にもあり、三男といわれる。しかしこれまで三市町の交流は無く、大隅町教育委員会が同町に「弥五郎伝説の里」ができたのをきっかけに、両市町に交流を働きかけていた。

子弥五郎塾は町内の歴史学習やボランティア体験、町政への意見づくりなど、年間を通して活動しながら、心身ともにたくましく人間性となったキャンプには五十五人が参加。歓迎に会場した富吉小の児童と対面式をしたあと、川遊びをしてすぐ打ち解けていた。

夕食を一緒に食べながらの交流会では、富吉小の児童が伝統芸能の俵踊りと棒踊りを披露、子弥五郎塾のメンバーは、完成したばかりの創作やごろう物語をスライド上映した。

来年は山之口町側が大隅町を訪れ、交流を続けていくことになった。日南市も参加の意向を示しており、大隅町教委は「三市町の子供サミットを実現したい」と話している。

◇大隅町の児童に俵踊りを披露する富吉小児童

平成8年10月13日『南日本新聞』

○弥五郎どん4年ぶり着物新調 大隅 大人25着分 集落婦人部が縫製

曾於郡大隅町の弥五郎どんの着物が十一月三日の浜下りに合わせ、四年ぶりに新調される。十一日夜、上馬場集落公民館で集落婦人部が、巨大な着物の縫い合わせを行った。

弥五郎どんの衣替えはうらうらに行われる。仕立て作業は、弥五郎どんを祭る岩川八幡神社のふもとの上馬場集落と東馬場集落の婦人部の伝統。帯から上と下を交互に担当している。かつては梅染めだった茶色の布は町内の衣料店が毎回、寄付している。

身丈二丈六尺(四・八五メートル)の巨人が着るとあって、人間の大人の二十五着分の布が使われる。婦人たちは、公民館ではほらいをして清めた身で布を裁断、今回上着を受け持つ上馬場集落婦人部は、両腕のゆき丈二丈八メートル、肩幅三メートルと何もかもビッグな寸法にてこずりながらも、約四十人が真新しい布を公民館いっぱい広げて縫製作業に精出していった。

昨年六月同集落に転入してきた宮崎県小市出身の前田佳江子さん(三二)は「普通の着物を縫うのは違う厳粛さがある。地元の人たちにも精神的に仲間入りを果たしたような気分」。婦人部長の四反田美奈子さん(六三)は「弥五郎どんの体にびつたり合う心配もあるが、出来上がっていくのを見るとうれしい。新しい着物に弥五郎どんも喜んでくれるはず」と話した。

古い着物は法被に仕立て直される。◇弥五郎どんの新しい着物を縫う上馬場集落の婦人たち

平成8年11月4日『南日本新聞』

○巨体揺らし浜下り 弥五郎どん 観客ぎづつけ 大隅

曾於郡大隅町では、県内三大祭りの一つである弥五郎どん祭り(県無形民俗文化財)が、同町岩川の八幡神社をメインに開かれ、十万人(主催者発表)の人出でにぎわった。祭りのハイライト、浜下りで身丈一丈六尺(四・八五メートル)の巨体を揺らしながら歩く威風堂々とした姿に、沿道の見物人は目を見張った。

午前一時、花火の合図とともに商工会青年部と子供たちが、ふれ太鼓を打ち鳴らしながら「弥五郎どんが起きよ」と声を張り上げ市街地を巡回。祭りの幕開けを知らされた。

無病息災を祈る参拝客が集まるくらい神社境内で、身支度を整える「弥五郎どん起し」の作業が行われた。ことしは四年に一回の衣替えの年。新しいこげ茶色の着物に真っ白いさらし帯がくつきり。夜明け間近、綱に引かれた弥五郎どんがむつくり起き上がった。

神社例祭が終わった午前十時すぎ、いよいよ浜下りへ出発。弥五郎どんの勇姿を一目見ようと、参道から鳥居付近にかけて身動きできないほどの人垣ができた。

ぎよろりと見開いた目、いかつい顔つき。岩川小五年生男児に引かれた巨大な弥五郎どんがゆつくりと姿を現すと、見物人から大きな歓声がわいた。弥五郎太鼓を従えて、一年ぶりの世間を見渡すようにノッソノッソと市街地を練り歩いた。

◇小学生市街地を練り歩いた

ノッソソと市街地を練り歩いた。◇小学生市街地を練り歩いた。◇小学生市街地を練り歩いた。◇小学生市街地を練り歩いた。

○長男坊、もゆつき 北諸県 山之口 国の選択無形民俗文化財・山之口弥五郎どん祭りが三日、北諸県郡山之口の田野神社であった。祭りのハイライト、浜下りで身丈四メートル余り、朱色の面に大小二本の刀を差した弥五郎どんが、神馬、みこしなど総勢二百人のご神幸行列の先頭に立ち、馬子唄(うた)に合わせて約六百メートルを威風堂々と練り歩いた。

弥五郎どんは単人最後の首長で、魔よけの神さまといわれる。ゆかりの物に触れると病気をしないといふ伝説があり、沿道の見物客からは麻の着物などを触つては一年間の無病息災を祈った。弥五郎伝説は大隅町、日南市の神社にも残っており、神社の建造順に山之口弥五郎が三兄弟の長男とされている。

平成9年11月2日『南日本新聞』

○あす「弥五郎どん祭り」大隅

県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが三日、曾於郡大隅町岩川八幡神社を中心に開かれる。例年十万人(主催者発表)の人出でにぎわい、同町は中心に染まる。町内各所に駐車場が設置されるほか、交通規制も行われる。

祭りは午前一時のふれ太鼓を合図に、「弥五郎どん起し」と呼ばれる本体づくりが同神社で始まる。竹で編んだ体の各部を組み合わせてつくる身長四・八五メートルの巨体に梅染めの着物を着せ、特製の台車に設置。同六時に、寝ている弥五郎どんを引き起こして完成する。

神社祭典のあと、同十時十五分祭りのハイライト、浜下り。子供たちに引かれた弥五郎どんは、巨体を揺らしながら町の目抜き通りを進む。約二キロ先の鹿兒島交通バス駐車場からの折り返しは自衛隊音楽隊や投票で選ばれた第十四代ミスター弥五郎、ミス秋祭り、踊り連、岩川小児童が作った子弥五郎どんが弥五郎どんに続いて市中パレードする。同日は武道大会や芸能大会、文化祭作品展示、ヘリコプター遊覧飛行など奉賛行事もある。

前夜祭は二日午後六時から町文化会館であり、弥五郎太鼓演奏、町青年団の演劇、ひよつこ踊りなどが披露される。

平成10年11月4日『南日本新聞』

○大隅町・弥五郎どん祭り 12万人に「福風」

鹿兒島県内三大祭りの一つで県無形民俗文化財に指定されている弥五郎どん祭りが三日、曾於郡大隅町岩川の八幡神社をメインに開かれた。秋晴れの穏やかな天気に恵まれ、例年以上に多い十二万人(主催者発表)の人出でにぎわった。

午前一時、花火の合図とともに商工会青年部と子供たちが、ふれ太鼓を打ち鳴らしながら「弥五郎どんが起きよ」と祭りの幕開けを知らせて回った。神社では青年らが竹で編んだ弥五郎どんを組み立て、梅染めのひよつこを着せ、「弥五郎どん起し」と呼ばれる作業。夜明け前に身支度が整った。

綱に引かれた身長四・八五メートルの巨体がむつくりと起き上がり、単人族の首領がモデルともいわれる伝説の人物が一年ぶりによみがえった。カット目を見開き、歯をむき出しにした表情におじ気味の幼児もいた。

浜下りに出掛ける雄姿を見ようと、神社周辺は早くから人の波。午前十五時十五分、岩川小五年生男児に引かれた巨人がゆつくりと動き出すと祭りは最高潮。弥五郎太鼓の打ち鳴らす祭りはやしに身を揺らしながら街の風を楽しむようにノッソノッソと練り歩いた。弥五郎どんの風にあたりは一年間、無病息災でいられるとあって、沿道でも大勢の見物人が見守った。

◇観客の歓声と拍手のなか、浜下りにでる弥五郎どん 3日、曾於郡大隅町の岩川八幡神社

平成10年11月1日『南日本新聞』

○3日弥五郎どん祭り 新企画フリーマーケットも 大隅

県内三大祭の一つ、曾於郡大隅町の弥五郎どん祭り(県指定無形民俗文化財)が三日、同町の岩川八幡神社を中心に開かれる。今年には神社近くの「弥五郎伝説の里」で、町民参加のフリーマーケットも新たに企画。例年以上のにぎわいが期待されている。当日は交通規制が行われる。

九面太鼓、高尾野平六太鼓が競演。弥五郎どん囃子コンクールで金賞を獲得した、山岡聖也君(月野小四年)と鮫島孝文君(岩川中一年)の表彰式も行われた。

◇弥五郎どんに導かれながら、元気に「子弥五郎」を引く児童ら

平成11年11月1日『南日本新聞』

○3日、弥五郎どん祭り、浜下りや武道大会、大隅町
鹿児島県内三大祭りの一つ、曾於郡大隅町の弥五郎どん祭り(県無形民俗文化財)は三日、同町の岩川八幡神社を中心に開かれる。呼び物の浜下り行列のほか、神社近くの「弥五郎伝説の里」で、町民参加のフリーマーケットなど各種イベントも同時開催。当日は交通規制が行われる。

午前一時のふれ太鼓を合図に、弥五郎どんの組み立て開始。同九時から神事を行い、同時すぎに浜下り行列が神社を出発する。折り返し点の鹿児島交通バス駐車場からは、踊り連が合流し、パレードを行う。パレードのコースは浜下りスタートから正午まで車両通行止め。大隅合同庁舎前から八幡神社前までの区間は、午前八時から午後六時まで歩行者天国になる。

弥五郎伝説の里では、地元の人々による「よさこいソーラン節」やバンド演奏のステージもある。奉賛行事は武道大会(岩川小)、のど自慢大会(ケアセンターやこう苑)など。前日の二日午後六時半からは、町文化会館で前夜祭の「どんどん祭り」がある。

平成11年11月4日『南日本新聞』

○弥五郎どん堂々浜下り、大隅町
鹿児島県内三大祭りのひとつ、曾於郡大隅町の弥五郎どん祭りが三日、同町岩川の八幡神社周辺であった。身長約五メートルの巨体を揺らしながら、雄々しく浜下り行進する弥五郎どんの勇姿に、沿道を埋めた見物客から歓声と拍手がわいた。(22面に詳報)

◇巨体を左右に揺らしながら参道を下りる弥五郎どん 3日午前10時20分、曾於郡大隅町岩川の八幡神社

○「助っ人」引き手も威勢よく、弥五郎どん祭り
曾於郡大隅町岩川で三日行われた弥五郎どん祭りは、約十万人(主催者発表)の見物客でにぎわった。弥五郎どんを綱で引く子供たちは、これまで地元の岩川小学校五年生男子に限られていたが、今年と同校以外の五年生男子も初めて参加。弥五郎どんは中心街を巡る約四キロのコースを体を左右に揺らしながら、威風堂々と行進した。

同行の児童数の減少で引き手の確保が難しくなったことから、弥五郎どん祭り奉賛会が町内六校の小学校に協力を呼びかけた。今回は各校から十八人が集まり、岩川小の三十人とおそろいの法被をまとって祭りを盛り上げた。

今年四月に岩川小から鹿児島市の坂元小に転校した山元裕平君も参加の希望がない、懐かしい友達と一緒に元氣よく「わっしょい」「五年生になりました弥五郎どんを引きたい」と思っていたのうれしい。いい記念になりました」と声を弾ませた。奉賛会長の荒武光雄町商工会長は「児童減という事情はあるものの、枠を広げることで町全体の祭りとして親しみが増すと思う」と語った。

浜下り行列は午前十時すぎ、弥五郎太鼓に導かれて岩川八幡神社をスタート。折り返し地点からは、児童・園児の「子弥五郎」や踊り連なども加わりパレードした。神社近くの弥五郎伝説の里では、フリーマー

ケットが開かれ、町内外の五十八グループが出店。ステージでは地元園児による「よさこいソーラン踊り」などが披露された。

◇かけ声を合わせ弥五郎どんを引く小学五年生の男児たち

平成12年11月2日『南日本新聞』

○あす弥五郎どん祭り、浜下りは午後一時出発、市中パレード午前11時半、時間帯で交通規制、大隅
鹿児島県指定無形民俗文化財の弥五郎どん祭りは三日、曾於郡大隅町の岩川八幡神社を中心に開かれる。今年のは呼び物の弥五郎どんの浜下りを、午後一時出発に変更。従来は祭りの後半に実施していた市中パレードは午前十一時半スタートとし、浜下り行列の前に行う。一部で交通規制される。

昨年までは午前十時に浜下りを開始していたが、遠来の観客から「時間帯が早くて見られない」という要望が寄せられていた。町商工会青年部が実施した町民アンケートでも午後スタートを求める意見が多く、昔は午後には浜下りを行っていたこともあり、開始時刻の変更を決めた。祭りは午前一時のふれ太鼓を合図に、弥五郎どんの組み立てに取りかかる。巨人像は明け方ごろに完成し、同九時から神社で祭典を開く。市中パレードは鹿児島交通バス駐車場から県大隅合同庁舎前を経て岩川小に至る区間であり、ミスター弥五郎やミス秋祭り、踊り連が参加。浜下り行列は岩川八幡神社を出発して町中央公民館で折り返すコースに変更され、今回は約一キロ短くなる。

祭りに伴い、大隅合同庁舎前から岩川高校裏門までは午前八時から午後六時まで歩行者天国になる。パレードと浜下りのコースでは、時間帯により交通規制が行われる。

平成12年11月4日『南日本新聞』

○秋風ようやく、祭りも最盛「弥五郎」兄弟浜下り威勢よく、鹿児島
文化の日の三日、鹿児島県内など各地で祭りが相次いだ。弥五郎どん兄弟の浜下りや江戸時代からの伝統行事の復活、通りを埋め尽くす踊り連。大勢の見物客が繰り出し、二十世紀最後の秋を彩るイベントを楽しんだ。

●弥五郎どん祭り(曾於郡大隅町)
岩川八幡神社を中心に開かれた。鹿児島県指定無形民俗文化財に指定されており、今年には四年に一度の衣替え。竹組の胴体や梅染めのひとはかまを新調した。遠来の客に配慮し、浜下り開始を午後一時に変更したことも手伝って、約十万人(主催者発表)でにぎわった。

引き手は昨年続き、岩川小学校以外の五年生男児にも門戸を開放。総勢六十人が「わっしょい」のかけ声にあわせて、身長約五メートルの巨神像を三キロにわたって引いた。

八月の「地域伝統芸能全国フェスティバル」で弥五郎どんを北海道に招待した、旭川市役所職員の市本進さん(三九)も、おそろいの法被をまとって行進に特別参加。「本祭を見たたくて休暇をとった。子供が主役で活気があり、町民みんなでつくる祭りの雰囲気素晴らしい」と話していた。

●長男・弥五郎どん(北諸郡郡山之口町)

同町富吉の園野(まどの)神社で浜下りなどがあつた。国の選択無形民俗文化財に指定され、弥五郎どん三兄弟の長男とされている。高さ約四メートル。顔は赤く、ひげをたくわえた険しい形相、腰に大小の刀をさし麻布の質素ないでちが特徴。町内の子供たちが神社の参道を約六メートル引き練り歩いた。

弥五郎どんは、同神社のご神幸行列の先導役で、悪霊よけをしてくれると伝えられる。参道では神馬、猿田彦、神楽舞、みこしなど約百三十人が行列をつつ約三十分かけて行進。沿道の見物客らは弥五郎どんの体に触り一年間の健康を願った。

弥五郎どんは神社の創建順で曾於郡大隅町が二男、日南市肥後が三男といわれている。

◇人垣を分けながら浜下りに出発する弥五郎どん 3日、曾於郡大隅町の岩川八幡神社、ゆつくりと浜下りする弥五郎どん 北諸郡郡山之口町の園野神社

平成13年4月20日『南日本新聞』

○弥五郎3兄弟10年ぶり再会へ、宮崎の兄と弟が大隅町にやってくる
22日伝説の里5周年フェス
大隅町岩川八幡神社、宮崎県日南市田之上八幡神社、同山之口町野神社の弥五郎三兄弟が二十一日、大隅町弥五郎伝説の里オープン5周年記念フェスティバルで十年ぶりに「再会」する。大隅町住民らの強い要望で、宮崎の兄弟が五周年のお祝いに駆けつけることになった。

同町が、三兄弟がそそい踏みすの初め。

町が、五周年の節目に「思いの出はなる祭りのアイデアを」と公民館などを通じて住民の意見を広く募集。「宮崎の弥五郎どんに会いたい。ぜひ呼んで」という多くの熱心な声が寄せられた。町は日南市と山之口町に打診、日程調整もうまくいき、両市町とも快く応じた。これまでも招待の話はあつたが、日程などの都合でなかなか実現できなかった。

弥五郎兄弟は、神社が建立された年代順に山之口町が長男、大隅町が二男、日南市が三男とされる。身長はそれぞれ長男から四メートル、四・八メートル、七メートル。一九九〇年十月、日南市の市制四十周年記念祭りの際に顔を合わせている。

宮崎の兄弟は当日朝、大隅入り。フェスタのステージ横に岩川の弥五郎どんと仲良く肩を並べ、祭りを見物する。まちでも「早く大隅の人々に宮崎の弥五郎どんを見てもらいたい」と心待ちにしている。

フェスタは、二十一日午前十時から午後二時半まで。うなぎつかみ大会などのほかステージではコントや大隅半島歌謡キャンペーンもある。同里 0994(82) 0080。

◇右から大隅町岩川八幡神社、山之口町野神神社、日南市田之上八幡神社の弥五郎どん 90年10月、日南市(大隅町商大会提供)

平成13年4月23日『南日本新聞』

○弥五郎3兄弟10年ぶり集結、大隅町でフェスタ
「兄弟たち、お久しぶりさー」。大隅町岩川八幡神社、宮崎県日南市田之上八幡神社、同山之口町野神社の弥五郎三兄弟が二十一日、大隅町弥五郎伝説の里5周年記念フェスティバルで十年ぶりに「再会」した。

三兄弟は、神社が建立された年代順に山之口町が長男、大隅町が二男、日南市が三男とされる。身長はそれぞれ長男から四メートル、四・八メートル、七メートル。

この日はそれぞれの保存会のメンバーが、兄弟の衣装を整えるなど

早朝から「ご対面」のおぜん立て。フェスタ開始までには、同里の特設ステージ横に仲良く姿を現した。弥五郎どんらは終日、見物客とともにさまざまな催しを楽しんだ。

同町岩川 農業黒木義経さん（六六）は「宮崎の弥五郎を見たのは初めて。兄弟の個性が出ていて面白い」と巨体を見上げていた。

◇弥五郎伝説の里5周年フェスティバルで顔合わせした弥五郎3兄弟
◇22日午前、大隅町

平成13年11月1日「南日本新聞」

○官民一体雰囲気盛り上げ 3日に弥五郎どん祭り 新入幕の光法閣もやってくる 大隅

鹿児島県指定無形民俗文化財の弥五郎どん祭りは三日、大隅町の岩川八幡神社を中心に開かれる。午前十一時半スタートの市中パレードに続き、メインの弥五郎どんの浜下りは午後一時から始まる。一帯では一部交通が規制される。

祭りは午前一時のふれ太鼓を合図に弥五郎どんの組み立てに取り掛かる。明け方ごろまでに完成、同十時から同神社で例大祭を行う。市中パレードは鹿児島交通バス駐車場から県大隅合同庁舎前を経て岩川小に至る区間であり、ミスター弥五郎やミス秋祭り、踊り連が参加。浜下り行列は同神社を出発して同駐車場を折り返すコース。祭りに伴い、合庁前―岩川高校裏門前の間が午前八時から午後六時まで歩行者天国になる。パレードと浜下りのコースでは、時間帯により交通規制がある。

奉賛行事は武道大会（岩川小ほか）、ヘリコプター遊覧飛行（弥五郎伝説の里）、芸能大会（ケアセンターやごろう苑）など。大相撲九州場所番付で新入幕を果たした光法閣（南種子町出身、宮城野部屋）も一日大隅警察署長を務め祭りに花を添える。

前日の二日は午後六時半から町文化会館で前夜祭の「どんどん祭り」がある。

◇弥五郎どん祭り交通規制図

○公募のかかし作り 物産館広場

弥五郎どん祭りを盛り上げようと、大隅町の弥五郎伝説の里内の物産館・やごろう農土家市広場にかかしがお目見えし、買い物客らの目を惹きつけている。十日ごろまで飾られる。

かかしは、同祭り前夜祭実行委員会がコンクール方式で今年初めて町民に呼び掛け、二十一点の出品があった。作品は空き缶、古着、発泡スチロールなど廃材を有効利用。田の神さあ、西郷どんなどのほか、昔ながらの農作業姿の人をモチーフにしたものが目立つ。近くの太陽の子保育園の子供らがスキなどで作ったアニメキャラクター「トトロ」も特別展示された。

十月二十六日に、染色家で同町出身の重久哲也さん（四七）が審査。同物産館職員が作った「ハッピーウエディング」が最優秀賞に決まった。

◇弥五郎どん祭りを盛り上げるとかかし作り

○議会もはっぴで

十月二十九日開かれた大隅町議会の臨時会に、議員と桂次雄町長や町幹部の全員が弥五郎どん祭りの法被を着て臨んだ。決算認定案件などを審議する臨時会が毎年この時期にあることから、祭りムードを高めようと一九九四年から行っている。

法被は四年ごとに衣替えされる弥五郎どんの装束を仕立て直して作られる。焦げ茶色のシックな色調だ。背中には弥五郎どんの顔のイラスト

トが染め抜かれ、えりには「県下三大祭り」と書かれている。

町議員らは六日かばらばら全員が法被を着て仕事に取り組んでおり、祭り気分の盛り上げに一役買っている。

◇弥五郎どんの法被を着て臨時議会で臨む議員ら

平成13年11月4日「南日本新聞」

○雨二毛負ケズ勇壮に 弥五郎どん祭り おほら祭46年振り中止 雨天影響 山之口「弥五郎どん」も

大隅町の弥五郎どん祭りが三日、岩川八幡神社を中心に開かれた。朝から断続的に強い雨が降る悪天候のため、伝説の巨人の勇ましい浜下りを「目見よう」と大勢の見物客が詰め掛けた。

町商工会などをつくる主催の同祭り奉賛会メンバーも「途中で小雨に見舞われたことはあったが、少なくとも戦後こんななままとって降った記憶はない」という雨の影響で、ミスター弥五郎、ミス秋祭りが参加する午前の市中パレードは中止になった。しかし昼すぎには雨脚も弱まり、メインの浜下りは予定通り午後一時、同神社を出発。町内の小学五年生男児など総勢六十人余りが「わっしょい」のかけ声に合わせて、身長約五メートルの弥五郎どん像を二時間かけ、約四キロにわたって引いた。人出は例年の半分ほどでやや寂しげ、それでも元氣よく威風堂々と進む行列に、歓声がわいた。岩川小五年の中村研仁君（一一）は「雨のせいとか歩きにくく、さすがに疲れた。拍手や声援がとても励みになりました」と満足そうだった。

鹿児島市の「2001第五十回記念おほら祭」（同祭振興会主催）は三日、雨のため本まつりが中止になった。本まつりの雨天中止は台風のために同祭自体が中止になった一九五五（昭和三十）年以来四十六年ぶり二度目。

今年と同祭の節目とあって、二日の夜まつりに続く本まつりは国内外の百七十二連、一万四千四百人が天文館一帯で華やかな踊りを繰り広げる予定だった。「国際芸能祭」などの関連イベントも、中止や会場変更を余儀なくされた。

この雨で、宮崎県山崎町口町富吉園神社で行う予定だった弥五郎どん三兄弟の長男とされる園野弥五郎どんの「浜殿下り」も十数年ぶりに中止となった。また、出水市の出水小学校で開かれる予定だった第二回「出水籠まつり」は、四日に順延された。

◇雨の中、見物客の前に巨体を現し、浜下りに出発する弥五郎どん
大隅町の岩川八幡神社

平成14年11月2日「南日本新聞」

○大隅 あす弥五郎どん祭り 浜下り午後一時スタート 市中パレード午前11時半 無形民俗文化財の弥五郎どん祭り

鹿児島県指定無形民俗文化財の弥五郎どん祭りは三日、大隅町の岩川八幡神社を中心に開かれる。午前十一時半スタートの市中パレードに続き、メインの弥五郎どんの浜下りは午後一時から始まる。一帯では交通の一部規制される。

祭りは午前一時のふれ太鼓を合図に、弥五郎どんの組み立てに取り掛かる。明け方ごろまでに完成、同十時から同神社で例大祭を行う。市中パレードは鹿児島交通バス駐車場から県大隅合同庁舎前を経て岩川小に至る区間であり、ミスター弥五郎、ミス秋祭り、踊り連などが参加。浜下り行列は同神社を出発してJ A、役場前などを通り、同駐車場を折り返すコース。

祭りに伴い、県合庁前―岩川高校裏門前の間が午前八時から午後六時まで歩行者天国になる。パレードと浜下りのコースでは、時間帯により

交通規制がある。

奉賛行事は武道大会（岩川小ほか）、ヘリコプター遊覧飛行（弥五郎伝説の里）、芸能大会（ケアセンターやごろう苑）など。

前日の二日は、午後六時から大隅町文化会館で前夜祭の「どんどん祭り」がある。

◇弥五郎どん祭り交通規制図

平成14年11月4日「南日本新聞」

○弥五郎どん祭り 大隅町 大隅町の弥五郎どん祭りが三日、岩川八幡神社を中心に開かれた。時折小雨が降る肌寒い天候の下、伝説の巨人の堂々とした浜下りを見ようと、約十万人（主催者発表）が詰め掛けた。

午前一時の火花を合図に商工会青年部らが「弥五郎どんが起きろっ」とふれ太鼓を打ち鳴らしながら神社周辺を回り、祭りの始まりを告げた。神社本殿で弥五郎どんの組み立てがあり、夜明け前に完成した。市中パレードに続き、午後一時からメインの浜下り。約五メートルの弥五郎どんが鳥居をくぐり一般道に現れると、一帯は歓声と拍手に包まれました。その後、町内の小学五年生約六十人に引かれ、町中心部を勇ましく行進した。

笠木小の中野裕次郎君（一〇）と迫田和洋君（一〇）は「弥五郎どんは重かった。沿道の人の多さにびびったり、疲れたけどいい思い出になった」と話した。

◇巨体を揺らし浜下りに出発する弥五郎どん 3日午後一時すぎ、大隅町の岩川八幡神社

平成15年11月2日「南日本新聞」

○あす弥五郎どん祭り 大隅・岩川八幡神社 浜下り午後一時から 一帯で一部交通規制

鹿児島県指定無形民俗文化財の弥五郎どん祭りは三日、大隅町の岩川八幡神社を中心に開かれる。歴代ミスター弥五郎も参加する午前十一時半スタートの市中パレードに続き、メインの弥五郎どんの浜下りは午後一時から始まる。一帯では交通が一部規制される。

祭りは午前一時のふれ太鼓を合図に、弥五郎どんの組み立てに取り掛かる。明け方ごろまでに完成、同十時から同神社で例大祭を行う。市中パレードは鹿児島交通バス駐車場から県大隅合同庁舎前を経て岩川小に至る区間であり、歴代と当代の二十代目ミスター弥五郎、ミス秋祭り、踊り連などが参加。浜下り行列は同神社を出発してJ A、役場前などを通り、同駐車場を折り返すコース。

祭りに伴い、県合庁付近一昭南病院付近の間が午前八時から午後六時まで歩行者天国になる。パレードと浜下りのコースでは、時間帯により交通規制がある。

奉賛行事は武道大会（岩川小ほか）、ヘリコプター遊覧飛行（弥五郎伝説の里）、のど自慢大会・こまどり姉妹ショー（やごろう苑）など。前日の二日は、午後六時から大隅町文化会館で前夜祭の「どんどん祭り」がある。

◇弥五郎どん祭り交通規制図

平成15年11月4日「南日本新聞」

○弥五郎どん勇壮に浜下り 大隅 大隅町の弥五郎どん祭りが三日、岩川八幡神社を中心に開かれた。小雨の降る中、伝説の巨人の勇姿を拝しようと、大勢の見物客が詰め

午前一時の花火を合図に商工会青年部のメンバーらが「弥五郎どんが起きつ」と触れ、太鼓を打ち鳴らしながら神社周辺を回り、祭りの始まりを告げた。神社本殿では弥五郎どんの組み立てがあり、夜明け前に完成した。

雨で午前の市中パレードは中止になったが、メーンの浜下りは予定通り午後一時にスタート。身長五メートルの弥五郎どんが鳥居をくぐり一般道に巨体を現すと、一帯は歓声と拍手に包まれた。弥五郎どんは、商店街などを町内の小学五年生ら約六十人と弥五郎太鼓など従えて歩き、貫録を示した。

弥五郎どんを引いた岩川小五年の柏原龍太郎君は「弥五郎どんは重くてきつかったが、いい思い出になった」と話した。

大勢の見物客の前に巨体を現した弥五郎どんは3日、大隅町の岩川八幡神社。

平成16年6月17日『南日本新聞』

○弥五郎どんの足、20年ぶり交換へ 商工会青年部が台車テスト胴体、着物も新調 大隅

毎年十一月三日に大隅町で行われる弥五郎どん祭り、浜下りに使用される台車が、老朽化のため約二十年ぶりに新しいものに交換される。十二日には毎年浜下りを担当する同町商工会青年部のメンバーが、新車のテストを行った。弥五郎どん自身も今年、着物や胴体の竹かごを新調する予定。

台車のテストは、同町の岩川八幡神社の降り坂で実際に行われた。自動車のシャシーを活用した台車のブレーキが十分効くか、カーブをうまく回れるかなど、青年部とそのOBらがロープを引きながら入念にチェック。八月まで数回のテストを繰り返して台車を完成させるという。

身長が四・八五メートルある弥五郎どんの梅染めの着物や胴体部分の骨組みになる竹かごも、これまで四年に一度、オリンピック開催年ごとに新しいものに新調してきた。新しい着物は祭り本番でお披露目される。

同青年部は「今年は新幹線開業イベントに参加したほか、十月十日には大阪 御堂筋パレードにも六年ぶりに出場する。台車も着物も新しくして、巨人伝説に新たな歴史のページをさらに重ねたい」と意気込んでいる。

◇新しい台車を入念にチェックする大隅町商工会メンバーら

平成16年10月6日『南日本新聞』

○弥五郎どんの着物新調 生地25反、65人がかり 地元2集落婦人部「4年一度の大仕事」おおすみ

大隅町の岩川八幡神社を中心に、毎年十一月三日に行なわれる「弥五郎どん祭り」(県指定無形民俗文化財)で、伝説の巨人・弥五郎どんが着る巨大な着物が四年ぶりに新調された。これまでオリンピック開催年ごとに、同神社近くの集落婦人部がボランティアで作製している。主婦らは「四年に一度の大仕事。伝統を受け継ぎ次世代にいつまでも伝えたい」と話している。

身長が四・八五メートルある弥五郎どんが身にまとう着物は、およそ二十五反(成人二十五人分)に上る梅染めの特別な生地で作られる。昔は主に神社の氏子らが作製していたが、祭り自体が次第に大きくなるにつれ、約三十年前から、神社近くの上馬場と東馬場の両集落婦人部が、ボランティアで作るようになったという。

四年ぶりの新調となった今回は、両集落の主婦ら約六十五人が縫製作業に参加。九月中旬から十月一日にかけ、上着と袴の二班に分かれて

作製した。

上着は丈が約三メートル、両腕を伸ばした状態で幅約十二メートル。袴も丈が約二・八メートル、幅約十一メートルと、威風堂々の弥五郎どんにふさわしい出来上がりとなった。胴体部分になる骨組みの竹かごも合わせて新調されることになっており、本番でお披露目される。

上馬場集落の浜田淑子さん(六五)は「今はミシンだが昔はみんな手で縫いで大変だった。これまで七回以上、着物の新調に携わってきた東馬場集落の東丸美代子さん(七二)も「二つの集落では上着と袴を交互に作るため同じものを作るのは八年ごと」と話している。

◇岩川八幡神社近くの集落婦人部の手によつて、4年振りに新調された弥五郎どんの着物 大隅町の馬場公民館

平成16年11月2日『南日本新聞』

○あす弥五郎どん祭り 前夜祭に合併2町も参加 浜下り午後1時から 大隅

県指定無形民俗文化財の弥五郎どん祭りは三日、大隅町の岩川八幡神社を中心に行われる。市中パレードは午前十一時半、弥五郎どんが街を練り歩くメーンの浜下りは午後一時からそれぞれ始まり、一帯では交通規制が行われる(図参照)。

三日午前一時のふれ太鼓を合図に、同神社で、約二十年ぶりに交換された台車や、四年ぶりに新調された着物、竹かごでできた胴体が弥五郎どんの組み立てが始まる。六時ごろ完成し、十時から例大祭が行われる。

浜下りは、午後一時から四時前まで。同神社から農協前、役場などを通り鹿兒島交通駐車場へ折り返し、県合庁前を通る。市中パレードは午前十一時半から約一時間、同駐車場から県合庁前を経て岩川小学校に至るコースで行われ、第二十一代ミスター弥五郎とミス秋祭り、多くの踊り連が参加する。

浜下り、パレードの通る時間帯に、交通規制があり、県合庁・昭南病院付近は午前八時から午後六時まで歩行者天国となる。各種奉賛行事として武道大会(岩川小など)、芸能大会(やこうろ)死、文化祭展示(中央公民館)などもある。

また、前夜祭は一日午後六時、同町文化会館で開幕。同町は二〇〇四年七月、末吉、財部両町と合併を予定しており、今回は二町の踊り連や太鼓も引き盛大に行われる。

◇弥五郎どん祭り交通規制図

平成16年11月4日『南日本新聞』

○新調着物で巨体揺らし 大隅町・岩川八幡神社 弥五郎どん悠然浜下り 険しい形相貫録の貫録 富嶺・山之口

鹿兒島県指定無形民俗文化財の弥五郎どん祭りは三日、大隅町の岩川八幡神社を中心に行われた。ここ三年雨にたたられていたが今年はず晴天に恵まれ、大勢の見物客が見守る中、伝説の巨人は、四年ぶりに新調された梅染めの着物をまとい悠然と街を練り歩いた。

「弥五郎どんが起きつ」と。午前一時、商工会青年部のメンバーらによるふれ太鼓で巨人は目覚め、祭りがスタート。神社本殿で組み立てが始まり、着付けのあと、約二十年ぶりに交換された台車に乗せられ夜明け前に完成した。

第二十一代ミスター弥五郎やミス秋祭り、踊り連などによる市中パレードに続き、午後一時からはハイライトとなる浜下り。身長四・八五

メートルの弥五郎どんが鳥居をくぐり威風堂々、姿を現すと道沿から大きな拍手と歓声が沸き起こり最高潮に。弥五郎太鼓やみこしを従え、巨体を揺らし勇壮に約三キロ歩んだ。町内では武道大会や芸能大会など多彩な催しも行われた。

同日は二〇〇五年七月一日を目標に末吉、財部両町と「曾於市」への合併を進めており、町制下での弥五郎どん祭りは今年が最後になる見込み。

宮崎県山之口町富吉の的野八幡宮で三日、「山之口弥五郎どん祭り」があった。同町の弥五郎どんは国の選択無形民俗文化財で「弥五郎どん三兄弟」の長男とされる。

長男は高さ約四メートル、赤い顔にピンと張ったひげ、逆立ったまゆなど険しい形相や柔らかい麻布の質素な着物、腰に大小の刀を差す姿が特徴。

弥五郎どんは、浜下りするご神幸行列の先導役で悪霊よけをしてくれたと伝えられる。このため、祭り姿に着飾った子供たちが台車に乗った弥五郎どんを引き始めると、見物客らは先を競って巨体に触り一年間の無事を祈った。行列は神馬、神楽舞、みこしなど続き、約六百メートルの参道を練り歩いた。

同町の弥五郎どんは大和朝廷時代、朝廷に討伐された華人族を慰霊するため首領だった「弥五郎」の巨人人形を作ったのが始まりとされる。三兄弟は神社の創建順に大隅町が二男、日南市が三男といわれる。

◇新調された着物をまとい、観衆の前に悠然と巨体を現した弥五郎どん 大隅町 弥五郎どんを触り、1年間の悪霊退散を願う見物客 山之口町

平成17年11月2日『南日本新聞』

○あす弥五郎どん祭り 曾於市初歩き

県指定無形民俗文化財で、伝説の巨人が街を練り歩く「弥五郎どん祭り」は三日、曾於市大隅町岩川八幡神社を中心に行われる。今年七月一日に大隅、財部、末吉三町が合併し、同市が誕生して初の開催。

市中パレードは午前十一時十五分、クライマックスの浜下りは午後一時からそれぞれ始まり、周辺では交通規制が行われる(図参照)。

三日午前一時のふれ太鼓を合図に、同神社で着物、竹かご、台車を使った弥五郎どんの組み立てが始まる。早朝六時ごろには巨人像が完成し、同時から例大祭が行われる。

浜下りは、午後一時から四時前まで。神社を出発すると、J Aとお鹿兒島前、市役所大隅支所(旧町役場)などを通り、鹿兒島交通駐車場へ折り返す。帰りは県合同庁舎前を通る。

市中パレードは、午前十一時十五分前まで、午後零時半ごろ岩川小学校校庭に到着する見通し。パレードには第二十一代ミスター弥五郎、ミス大隅も参加する。

浜下り、パレードの通る時間帯に各所で交通規制が実施され、県合同庁舎前、岩川高橋手前付近は午前八時から午後六時まで歩行者天国となる。奉賛行事として武道大会(岩川小校庭)、のど自慢大会(やこうろ)死などもある。見物客は延べ約五万人が見込まれる。

前夜祭「どんどん祭り」は、一日午後六時半から曾於市大隅町中之内の大隅文化会館であり、合併した財部、末吉との太鼓の競演などが盛大に行なわれる。

◇弥五郎どん祭り交通規制

平成17年11月4日『南日本新聞』

○弥五郎どん威風堂々 曾於：岩川八幡神社 合併後、初練り歩き
県指定無形民俗文化財で、県下三大祭りの一つとされる「弥五郎
どん祭り」は三日、曾於市大隅町岩川の岩川八幡神社を中心に行われた。
大隅、財部末吉三町が七月に合併し同市が誕生して初開催。クライマッ
クス「浜下り」では、大勢の見物客が見上げる中、伝説の巨人が新市
を練り歩いた。

同日午前一時すぎ、「弥五郎どんが起きろっどー」の掛け声とともに、
大隅町商工会青年部員らがふれ太鼓を鳴らすと、神社内で伝説の巨人
がお目覚め。二十五反もの梅染めの衣と竹かごとでできた胴体、台車を
組み合わせた、身の丈四メートル八十五センチの大男が立ち上がった。
ギョロリとした目に太いまゆ、大小二本の刀を腰に差した姿は威風堂々。
第二十二代ミスター弥五郎やミス大隅、多くの踊り連による市中パ
レードが終わると、「浜下り」。巨体を揺らして参道を駆け下り、観衆
の前に姿を現すと、興奮は一気に最高潮に達し、沿道からは大きな拍
手と感嘆の声が沸き上がった。

その後弥五郎どんは、大綱の引き手を従え、大隅町市街地を約三キ
ロにわたり練り歩いた。同町内では武道大会や演芸大会なども行われ
終日にぎわった。
◇神社の鳥居をくぐり、弥五郎どんがその巨体を現すと、祭りの興奮
は一気に最高潮に

平成18年11月2日『南日本新聞』

○あす「弥五郎どん祭り」 大隅、岩川八幡神社 浜下り午後一時から
県無形民俗文化財で、伝説の巨人が街を練り歩く姿が勇壮な「弥五
郎どん祭り」は三日、曾於市大隅町岩川八幡神社周辺で行われる。市
中パレードは午前十一時、祭りのクライマックスとなる。浜下り。は午
後一時からそれぞれ始まり、周辺では交通規制が行われる。
三日午前一時のふれ太鼓を合図に、同神社で着物、竹かごと、台車な
どを使って弥五郎どんの組み立てが始まる。早朝には巨人像が姿を現
し、同時から例大祭がある。
神社を出発し市街地を練り歩く浜下り午後一時から同四時前まで。
JAそお鹿兒島前、市役所大隅支所（旧町役場）などを通り、鹿兒島
交通駐車場まで折り返す。復路は県合同庁舎前を通る。

今年のミスター弥五郎やミス大隅らが参加する市中パレードは、午
前十一時に鹿兒島交通駐車場を出発。大隅中央公民館、県合同庁舎前
などを通り午後零時半ごろ岩川小学校に到着する予定。
同日はパレードや浜下りにあわせ各所で交通規制が実施される。県
合同庁舎から岩川高校手前付近は、午前八時から午後六時まで歩行者
天国となる。また、岩川小で武道大会、やごろう苑でのご自慢大会な
どもある。

前夜祭「どんどん祭り」は二日後午後六時半から、曾於市大隅文化会
館で行われる。
◇弥五郎どん祭り交通規制図

平成18年11月4日『南日本新聞』

○県指定無形民俗文化財の「弥五郎どん祭り」が三日、曾於市大隅町
岩川八幡神社周辺で行われた。祭りのクライマックス「浜下り」では、
伝説の巨人をひと目見ようと集まった大勢の見物客から、大きな拍手
と歓声が沸き起こった。
「弥五郎どんが起きろっどー」。同日午前一時、掛け声とふれ太鼓を合

図に、神社内で巨人がお目覚め。二十五反の梅染めの衣と竹かごとで編
んだ胴、台車を組み合わせた。身の丈四メートル八十五センチ、ギョ
ロリとした目に太いまゆ、大小二本の刀を腰に差した姿はま
さに威風堂々。
第二十三代ミスター弥五郎やミス大隅、多くの踊り連による市中パ
レードが終わると、いよいよ浜下り。ゆづきゆづきと巨体を揺らしなが
ら参道を下り、待ちうけた観衆の前に姿を現すと、祭りの興奮は一気
に最高潮に達した。

鳥居をくぐり抜けた弥五郎どんは、大綱の引き手を従え、市街地を
約三キロにわたり練り歩いた。町内では武道大会や演芸大会なども行
われ、終日にぎわった。
◇弥五郎どんが参道を駆け下り、神社の鳥居をくぐり抜けると、祭り
の興奮は最高潮に。三日、曾於市大隅町岩川

平成19年8月22日『南日本新聞』

○単人の総大将説を展開 「弥五郎どん」は何者か 出版 宮崎県民
俗学会長山口保明さん（霧島市出身）
曾於市大隅の岩川八幡神社など鹿兒島、宮崎両県の三神社に伝わる
巨人人形「弥五郎どん」とは何者なのか。その人形を使った祭りはど
んな歴史背景から生まれたのか。霧島市出身で宮崎県民俗学会会長の
山口保明さん（六九）が郷土史料の検証や実地踏査など
をもとに研究成果をまとめ、出版した。「これを契機に市民の関心が高
まり、弥五郎どん祭りが国の重要無形文化財に指定されればすばらし
い」と話している。
出版したのは「弥五郎どん」は何者か 南九州の「大人」人形行事
の民俗的背景をさぐる。

山口さんは二〇〇五年、都城市教委から「日向の弥五郎人形行事記
録保存」のための専門調査員に委嘱されたのをきっかけに、本格的研
究に取り組んだ。以来、二年間、弥五郎どんゆかりの地を訪ね、三回
名勝図会など二百以上の文献を精読し、今回、一冊にまとめた。全八
章からなり、第一章は弥五郎どんの名の由来と登場の社会的背景、第
二章は弥五郎どんのふるさと、第三章で伝教行事「放生会」（不殺生の
思想に基づき生き物を自然に放つ儀式）との関係と続き、最終章では
弥五郎人形行事の今日的意義をまとめた。

山口さんは、弥五郎どんの起源は養老四（七二〇）年の単人の乱で、
弥五郎どんは敗れた単人軍の総大将とみる。中央政府は、この戦で戸
籍作成に反対して抗戦する日向・大隅の多くの単人軍を殺した。その亡
霊を鎮めるため宇佐八幡宮（大分県）で放生会が始まる。「単人の地・
南九州では、中央の宗教行事を受け入れながらも、単人領民として総
大将への愛着は捨てきれず、神幸行列の通例として先頭を務める猿田
彦命にあやかって、うまく弥五郎どんを割り込ませた」との自説を展
開する。巨人化は信仰心の高まりと見る。
「弥五郎は制服された従った伴神」などとする民俗学者・折口信夫ら
の主張にも「単なる伴神なら、後方に従わせても良いはず。祭りの主
人公的扱いをみると、それだけで説明が付かない」と異論も展開し
ている。
二百八十九ページで七百部作成。二千五百円。宮崎市の鉾脈社
0985(25)1758。宮崎市長家山西一丁目の自宅
書斎

平成19年11月1日『南日本新聞』

○3日弥五郎どん祭り 曾於市大隅の岩川八幡神社周辺「浜下り」は
午後一時から
伝説の巨人が街を練り歩く「弥五郎どん祭り」(県指定無形民俗文化
財)は三日、曾於市大隅町岩川の岩川八幡神社周辺で行われる。市中
パレードは午前十一時、祭りのクライマックス「浜下り」は午後一時か
ら始まる。

三日午前一時のふれ太鼓を合図に、着物、竹かごと、台車などを使
って弥五郎どんの組み立てが始まり、早朝には巨人像が姿を現す。
神社を出発して市街地を約五キロ練り歩く浜下りは午後一時から同
四時前まで。今年のミスター弥五郎やミス大隅らが参加する市中パレ
ードは、午前十一時から午後零時半まである。パレードや浜下りにあわせ
各所で交通規制が行われる。県合同庁舎から岩川小学校前までは、午前八
時から午後五時まで歩行者天国となる。
また岩川小学校校庭では武道大会、神社近くの高齢者福祉施設やご
ろ苑では、のご自慢大会やプロ演芸ショーが開かれるなど各地で様々
なイベントがある。

◇弥五郎どん祭り交通規制図

平成19年11月4日『南日本新聞』

○好天 盛況 弥五郎どん祭り 曾於：大隅 伝説の巨人入堂々と
県無形民俗文化財の「弥五郎どん祭り」が三日、曾於市大隅町岩川
の岩川八幡神社周辺で行われた。伝説の巨人が街に練り出す「浜下り」
で祭りは最高潮。神社の参道から巨体を現すと、大勢の見物客か
ら歓声が上がった。
祭りは同日午前一時「弥五郎どんが起きろっどー」の掛け声とふれ太
鼓の合図でスタート。青年団員らが、竹かごとで編んだ胴や腕を組みあ
わせ、二十五反の梅染めの衣を着せた。社殿から出され台車に寝かせ
られた弥五郎どんは午前四時、約百人の市民の手も借りてお目覚め。
太いまゆにギョロリとした目、身の丈四メートル八十五センチの堂々
とした姿が暗闇に浮かび上がった。

今年のミスター弥五郎やミス大隅らの市中パレードが終わると、午
後一時からいよいよ祭りのクライマックスの浜下り。鳥居をくぐり抜け
た弥五郎どんは、大綱の引き手を従え、巨体をゆづきゆづき。大小の
刀を腰に差し、威圧するように市街地約五キロを練り歩いた。
◇岩川八幡神社の参道を駆け下り、市街地に練り出す弥五郎どん
日、曾於市大隅町岩川

平成20年1月3日『南日本新聞』

○弥五郎どん都へ行く 5月、渋谷おほら祭出演
曾於市大隅町の伝説の巨人「弥五郎どん」の写真Ⅱが5月、東京の
街を練り歩く。「渋谷・鹿兒島おほら祭」に招待されたもので、首都へ
の遠征は初めて。
今年11回目を迎える渋谷おほら祭は5月17、18日に明治神宮周辺や
道玄坂文化村通りなどで行われる。弥五郎どんは17日の「プレおほら」
に出演。明治神宮原宿広場で午前と午後、威風堂々とした巨体を披
露する。
同祭では鹿兒島の文化情報を発信しようとこれまで伝統芸能として
鈴かけ馬踊り(霧島市単人)や太鼓踊り(鹿兒島市小山田)が出演し
ている。祭りを運営するNPO渋谷鹿兒島文化等交流促進協議会の伊

藤著(しげる) 推進本部長(74)は「大きな像はインパクトがある。歴史のある祭りを東京の人たちにしてみたい」と期待している。弥五郎どんは1992年、スペイン・バルセロナに海外遠征。国内は大阪、旭川、北九州市などに遠征したことがあるが東京は初。

平成20年5月12日『南日本新聞』

○渋谷おはら祭 17、18日、平成の駕姫、弥五郎どん登場。渋谷・鹿見島おはら祭が十七、十八の両日、東京都渋谷区で行われる。目抜き通りでの踊りパレードのほか、今回はNHK大河ドラマ「駕姫」にちなんだコンテスト「平成の駕姫はあなただけ」を実施。曾於市大隅から高さ六メートルの「弥五郎どん」も登場するなど趣向を凝らす。十七日の「プレおはら」で、弥五郎どんを明治神宮に奉納。午後六時半から渋谷C.C. Lemonホール(旧渋谷公会堂)で駕姫コンテストがあり、書類選考を通過した十六人が面接に臨む。

十八日の「おはら本まつり」は午後一時前から、コンテストで選ばれた「平成の駕姫」が当時の衣装を身にまとい、道玄坂、文化通りを従者とともに行列する。

引き続き同一時半～四時まで踊りパレード。弥五郎どんが見守る中、約五十連・二千人が「おはら節」「鹿見島ハンヤ節」「渋谷音頭」のリズムに合わせて、練り歩く。

平成20年5月18日『南日本新聞』

○弥五郎どん明治神宮に勇姿 渋谷おはら祭始まる。恒例の渋谷・鹿見島おはら祭が十七日、東京都渋谷区で始まった。曾於市のシンボル「弥五郎どん」が身長約五メートルの威風堂々とした姿を明治神宮で披露。参拝客らの注目を集め、鹿見島の伝統文化をアピールした。

弥五郎どんは同日午前九時半ごろ、勇ましい掛け声と太鼓を合図に同神宮南口広場を出発。クスノキの新緑に包まれた玉砂利の参道を、巨体を揺らしながら進み、本殿南神門までの約七百五十メートルを往復した。

弥五郎どんの綱の引き手を募ったところ、外国人観光客も数十人が殺到する人気ぶり。弥五郎どんをバックに記念撮影する姿も目立った。綱を引いた、曾於市大隅出身で足立区の高尾盛男さん(六七)は「弥五郎どんを見たのは実に五十五年ぶり。故郷が懐かしい」と声を弾ませた。

弥五郎どんは十四日夜、曾於市を出発。フェリーとトラックを乗り継ぎ、十六日夜、東京に着いた。

十八日の「本まつり」は道玄坂に鎮座し、約二千人が参加する踊りパレードを見守る。

◇勇ましい掛け声とともに明治神宮を練り歩く弥五郎どん 17日午前、東京都渋谷区

平成20年5月21日『南日本新聞』

○弥五郎どん東京遠征 威風堂々祭り大盛況。「わすい」「大きい」「大きい」。曾於市大隅の伝説の巨人「弥五郎どん」が姿を現すと大きな歓声が上がった。17、18日に東京で行われた渋谷・鹿見島おはら祭。東京初登場の弥五郎どんはユッサユッサと肩を揺らしながらゆつたりと浜下り。威風堂々とした姿で存在感を示した。身長五メートルの巨体はどこでも注目を集め人だかりができた。十八

日の渋谷・道玄坂通りでは出番に備え、路上で組み立てられる珍しい光景も。弥五郎どんが起き上がると見物客から「オーッ」と一斉に声が上がった。大隅弥五郎太鼓の軽快なリズムで浜下りが始まる。沿道は一層ヒートアップ。埋め尽くした見物客と、体となりながら、渋谷駅近くまでの目抜き通り約四百メートルを客進した。弥五郎どんは「多くの拍手と歓声が沸き起こり、元気づけられた。弥五郎どんをアピールできた」と話した。

平成20年8月20日『南日本新聞』

○ここに生きる 子らに夢持たせたい 「弥五郎様」の保存活動20年 中島俊一さん(80) 日南市飲肥3丁目。南九州では巨大人形・弥五郎行事が三カ所で伝承されている都城山(山口)の野八幡宮(七一〇年創建)、曾於市大隅町の岩川八幡神社(同一〇二五年)、そして日南市飲肥十丁目の田ノ上八幡神社(同一〇二五年)。関係者は「弥五郎三兄弟」と呼ぶ。神社の創建年代が古い方が年長。二男坊の「田ノ上・弥五郎様」行事(県無形民俗文化財)に同神社獅子舞保存会長として約二十年かかわってきた。「自分には先の戦争で生かされたという思いがある」と弥五郎行事など多くの文化活動に尽くす理由を話す。浜松陸軍飛行学校の幹部候補生で敗戦。多くの戦友は「特攻」で命を落とした。戦友は毎日のように夢枕に立つ。三角兵舎で寝ていると出兵前の戦友が枕元のようによかつた。剣道をやっていたとつぶやいて通り過ぎるという夢。私は剣道の助教をやっていたため特攻命令が出なかった。夢は十年近く続いた。社会に尽くそう。自分だけの命ではないと思つた。遠くを見る目で振り返る。

戦前、神社の御神幸行列は例祭日の十一月二十三日、身の丈七メートル、幅四メートルの弥五郎様を先頭に、総勢百二十人が六キロにわたる通りを練り歩いた。しかし、戦後、電線が邪魔になって凹溝に進めず交通に障害をきたすため浜下りは途絶え、例祭日と正月三が日に弥五郎人形が境内に飾られるだけになった。行事衰退の危機だった。しかし、一九八八年、この人が浜下り可能な大きな人形(高さ三メートル)を寄贈したことを契機に、約四十年前ぶりに浜下りが復活した。四十年間務めた消防団の退職金をはたいた社会貢献だった。

「昔、弥五郎様が、大隅の方から八幡神を背負って飲肥にきた。そのときの足跡が日南市酒谷一つ、次の足跡が二キロ離れた同市乱杭野一つ、それくらい大男だったぞうだ」という話を聞いて育った。今の子供たちにも地域や伝統行事に興味を持ってほしい。夢を持った人です。」

九〇年の飲肥城下まつりでは、的野と岩川の弥五郎どんを招き、三兄弟そろい踏みを実現させた。「杜撰だった。今度はこちらから出掛けに行きたい。岩川でも的野でもいい。また、そろい踏みさせたい」。夢は膨らむ。

◇「弥五郎様」の前面を前に思いを語る中島俊一さん 日南市飲肥10丁目の田ノ上八幡神社社務所

平成20年9月26日『南日本新聞』

○弥五郎どん国文化財指定を 検討会、10年度申請目指す 専門家4人交え初会合、曾於市大隅支所であった。国の無形民俗文化財指定に向けた取り組みの一環、歴史学や民俗学、考古学の専門家から祭りの発生と発展などについて説明を聞き、問題点を整理した。

弥五郎どん祭り保存会のメンバーや市関係職員ら十四人が出席。古代単人の研究者で元鹿見島国際大学教授の中村明蔵氏、鹿見島民俗学会代表幹事の所崎平氏、仮面研究家の出村卓三氏、単人塚などを発掘担当した霧島市教委の重久淳一氏の四人がそれぞれの専門分野から単人の乱(七二〇年)や八幡信仰とのかわり、玉面が人形化・巨大化していった過程などについて解説した。

弥五郎どん祭りは県の無形民俗文化財に指定されている。曾於市は多面的な調査を続け、二〇一〇年度をめどに報告書をまとめて文化庁に国指定の申請をしたい考え。専門家からは「古い形式を残した方がいい」「地元熱意も大事」などのアドバイスがあった。

南九州では巨大人形の弥五郎行事は曾於市のほか、都城山(山口)の野八幡宮と日南市飲肥十丁目の田ノ上八幡神社で伝承されている。

宮崎県の二行事は文化庁が一八九九年に「日向の弥五郎行事」という名称で「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択。山(山口)の行事については昨年、都城市教委が報告書をまとめ国指定を申請しており、曾於市でも取り組みを急ぐ声が強まっている。

◇「岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」調査検討会の初会合 曾於市大隅支所

平成20年10月10日『南日本新聞』

○新、弥五郎どん登場へ 岩川八幡神社 4年に一度のお色直し 来月祭り控え作業急ピッチ 高齢化で後継難い。曾於市大隅で弥五郎どんを新調する作業が進んでいる。胴体の竹かごや草履、着物は四年に一度のオリンピック開催年に作り替えるのが習わし。十一月三日の祭りを控え、集落住民らが取り組んでいるが、製作技術を引継ぐ人材確保が今後の悩みの種。

胴体部分になる骨組みの竹かごは霧島市福山の竹細工職人福丸実さん(六八)、エル子さん(六七)夫婦が作っている。地元で作れる人がいなくなり、二十年前に依頼を受けた。弥五郎どんは直径二メートル、長さ四メートル強の胴体に頭・腕・足がつく。「長い竹を割って丈夫に造るには工夫がいる」と福丸さん。今年は祭り直前の十月二十五日、弥五郎どんがねんりんピック開会式で鹿見島市に「出張」するため、胴体内部の鉄骨入れ替えなど完成はぎりぎりになりそうだった。

二十五反(成人二十五人分)の生地を使って巨大な着物を作るのは岩川八幡神社近くの上馬場と東馬場の二集落婦人部。上着とはかまを交互に担当するため、同じものを作るのは八年に一度。「実物を見て思い出しながら作業している」と上馬場集落婦人部長の坂口みどりさん(五三)。裁断作業が難しく、高齢化で人が少なくなってきたという。

神社の氏子総代が担当する草履(長さ一八メートル、幅七十七センチ)作りも状況は同じ。氏子総代会長の有川春見さん(七九)は「技術の伝承をどうするか考え、祭りの伝統を後世に伝えていきたい」と話した。

○稚児行列の参加者募集 曾於市大隅の岩川八幡神社は、十一月三日に行なう「弥五郎どん祭り」の稚児行列参加者を募集している。十九日締め切り。

稚児行列は四年に一度、弥五郎どんが新調されたときに行う行事。「浜下り」の弥五郎どんに続いて市街地約一キロを練り歩く。対象は満一歳以上、小学三年までの男女で居住地は問わない。参加費七千五百円(衣装セツト、写真、記念品など込み)。岩川八幡神社(奇数日午前のみ)099(482) 4459または池之上さん(省略)

◇弥五郎どんを製作する福丸美さん、エル子さん夫婦(曾於市大隅の岩川八幡神社)

平成20年11月1日『南日本新聞』

○3日 弥五郎どん祭り
曾於市大隅の「弥五郎どん祭り」(県指定無形民俗文化財)は三日、岩川八幡神社周辺で行われる。伝説の巨人がまちを練り歩く「浜下り」は午後一時から始まる。

祭りは三日午前一時のふれ太鼓を合図にスタート。神社境内で弥五郎どんの組み立て始まり、早朝には正装した巨人が姿を現す。祭りのクライマックス「浜下り」では、神社を出た弥五郎どんが市街地約五キロを午後四時まで行進する。今年のミスター弥五郎などが参加する市中パレードは午前十一時から午後零時半まで。浜下り、パレードにあわせ交通規制が行われる。

神社近くでは武道大会やプロ演芸ショーなどさまざまなイベントも開かれる。

平成20年11月4日『南日本新聞』

○着物新調 巨体悠然 大隅で弥五郎どん祭り
鹿児島県無形民俗文化財の「弥五郎どん祭り」が三日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺で行われた。身の丈四・八五メートルの弥五郎どんが、巨体を揺らしながら悠然とまことに練り出すと、大勢の見物客から歓声が上がった。

午前一時、弥五郎どんが起きつどい」の掛け声とふれ太鼓で祭り開始。神社本殿で巨人の組み立てが始まった。今年には四年に一度の作り替えの年。新調された竹製の胴体や腕に、真新しい二十五反の梅染めの着物をまとった弥五郎どんは、夜明け前に台車に乗せられ起き上がった。

大小二本の刀を腰に差し、ぎよろりとした目に太いまゆで周囲を威圧するように神社境内に鎮座していた弥五郎どん。午後一時からの祭りのハイライト「浜下り」で、ゆつくりと参道を下り、見物客の前に威風堂々とした姿を現した。

にぎやかな太鼓演奏の中、途中の高架橋下では巨体を折るパフォーマンスも。沿道の拍手を受けながら約五キロを練り歩いた。

◇「浜下り」で岩川八幡神社からまちに練り出す弥五郎どんは3日午後一時すぎ、曾於市大隅町岩川

平成21年4月29日『南日本新聞』

○新IC名「曾於弥五郎」 東九州道に本年度完成予定 親しみやすさ考慮
国土交通省九州地方整備局は二十八日、曾於市大隅で整備中の東九州自動車道のインターチェンジ(IC)の名称を「曾於弥五郎IC」に決定したと発表した。現在建設中の末吉財部IC(曾於弥五郎IC間(一・一キロ)は、二〇〇九年度末の開通を予定している。

同整備局や県などでつくる「九州ブロック道路標識適正化委員会鹿児島部会」が、これまで仮称として用いていた「大隅IC」など、複

数の候補の中から地元自治体の意向、地域特性、親しみやすさなどを考慮して選考した。同整備局大隅河川国道事務所は「一般的にIC名は地名や施設名がほとんど。地域活性化にも役立つのでは」としている。

東九州自動車道は、鹿児島と北九州を結ぶ延長約四百四十キロの高速度道路。県内区間八十二キロでは、すでに加治木IC(末吉財部IC間(約三十五キロ)が完成し、残る末吉財部IC(志布志IC(仮称)の全区間で工事が進んでいる。

平成21年11月1日『南日本新聞』

○弥五郎どん祭り 3日曾於市大隅の岩川八幡神社
無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺で行われる。午前一時のふれ太鼓を合図に組み立てが始まり、早朝には4・85メートルの巨人が姿を現す。浜下りは午後一時に同神社を出発する。

ミスター弥五郎やお市レディーらが市街地を練り歩く市中パレードは午前十一時から午後零時半まで。神社境内でのバナナのたき売りや岩川小での武道大会など、各地で多彩な催しが開かれる。

同日は交通規制が行われ、県庁から大隅中学校までは午前8時から午後5時まで歩行者天国となる。

2日夜の前後祭「ドンドン祭り」は午後6時半から市大隅文化会館であり、弥五郎太鼓の演奏などが行われる。

平成21年11月4日『南日本新聞』

○弥五郎どんぎよろり行進 大隅
鹿児島県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺で行われた。100人による奉納太鼓の響きに魂を呼び戻された弥五郎どんが威風堂々と境内を下ると、詰めかけた観客から歓声があがった。

祭りの始まりは午前一時のふれ太鼓。青年らが「弥五郎どんが起きつどい」と街へふれ歩き、神社本殿で組み立てに着手。境内に運び出された弥五郎どんを約300人の住民が引っ張り起こすと、夜明け前に身の丈4・85メートルの大男が悠然と現れた。

午後一時からの浜下りで祭りは最高潮に。ぎよろりとした目と太いまゆの弥五郎どんが、ゆつとゆつと肩を揺らしながら街を練り歩き、沿道では観客が拍手喝采で迎えた。弥五郎どんは、大和朝廷に征服された準人の首長とされる。

ミスター弥五郎や踊り連による市中パレードのほか、武道大会などもあり、会場周辺は終日にぎわった。

◇鳥居をくぐり街へ練り出す弥五郎どんは3日午後一時すぎ、曾於市大隅の岩川八幡神社

平成21年11月10日『南日本新聞』

○弥五郎どん祭り「準人首長の再生願う儀式」 視察の民俗学者ら見解 曾於
曾於市大隅の岩川八幡神社で3日、民俗学の研究者らが弥五郎どんの組み立てを見学した。組み立ては、県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りの最初に見学される。研究者らは「祭りは準人首長の再生を願う儀式」との見解を示した。

見学したのは、鹿児島県民俗学会代表幹事の所崎平さん、仮面研究家の出村卓三さん、日本民俗学会評議員の牧島知子さんの3人。

祭りは午前一時のふれ太鼓が始まった。青年らが「弥五郎どんが起

きつどい」と街へ触れ歩き、神社本殿での組み立てに着手。研究者は一連の儀式に密着し、手順や手法などを詳細にチェックした。

出村さんは、完成した弥五郎どんが狭い拝殿入口から境内に出る場面に着目した。弥五郎どんの両腕の長さは37メートルなのに、対し、入り口の幅は25メートル。斜めにしたり左右に動かしたり四苦八苦。拝殿から抜け出るのに数十分要した。

「神の胎内とみられる拝殿で組み立てて狭い入り口から出すのは、準人首長を誕生させる儀式」と出村さんは考える。所崎さんも「真夜中に組み立てるのは珍しい。竹製であることを隠し、神秘性を強めるために行なったのではないかと指摘した。

ぎよろりとした目と太いまゆの面も独特。弥五郎どんが街を練り歩く浜下りについて、出村さんは「準人の子孫が住む地を、復活した首長が歩く姿」と推測している。

同市は、弥五郎どん祭りの国指定を目指して調査を進めており、所崎さんらは検討会の専門調査員も務める。

平成22年2月26日『南日本新聞』

○伝えたいふるさと文化 引き手と観衆一体 弥五郎どん祭り
「弥五郎どんが起きつどい」。11月3日、毎年この日1日だけ岩川八幡神社にまつられている大巨人「弥五郎どん」が大きな目をギョロリと開けて、朝の4時に目覚めます。

この日は、県下三大祭りである「弥五郎どん祭り」が行われる日です。中でも、八幡神社をスタートして弥五郎どんが岩川の街をゆつとゆつとと練り歩く「浜下り」には県内から1万人を超す人が見学に集まります。その浜下りに、岩川小学校の5年生男子が引き手として参加します。岩川校区の公民館長である山下幸一さんが、昭和43年ごろまでは、岩川小学校の5年生男子の中でも、八幡神社近くの土馬場地区と東馬場地区の子どものみが引き手だったそうです。

弥五郎どんは三兄弟で、次男だといわれています。長男は宮崎県都城市山之口町四野神社、三男は、宮崎県日南市飯田ノ上神社にまつられているそうです。長男と次男の縁で、岩川小学校の6年生と山之口町の小学生は毎年「弥五郎サミット交流会」を開いています。

浜下りが始まる前の八幡神社は、緊張感がいつぱいで、弥五郎どんの肩に青年が乗ると、いよいよ出発です。

「いっどい」にぎやかな太鼓が鳴り響く中、浜下りのスタートです。神社の鳥居をすれすれに通り抜けて街中に出かけます。綱を引くのは5年生の男子ですが、岩川小の5年生女子も一緒について歩くのも伝統です。沿道の人たちにインタビュすると、「浜下りを見る」と元気をもらいますね。「最後までついて行きますよ」とこたえてくださいました。「引き手と観衆のみならず力を含ませて引いているのだなあ」と感じました。

平成22年2月26日『南日本新聞』

○私たちが取材しました
たくさんの人に愛されている「弥五郎どん」。県の無形民俗文化財にも指定されている郷土のお祭りが長い間続いているのは、岩川という故郷を大切にしたいという強い願いがあるからだと思います。

岩川の「弥五郎どん祭り」ぜひ見に来てください。

たいと思ひ岩川小を代表して6年生8人で調べました。900年も前から

この祭りは続いていますが、調べていく中で、この祭りを大切にしたいと思っている人たちの願いに気付きました。私たちは、この祭りが岩川にあることを心から誇りに思います。そして、この「弥五郎どん祭り」がずっとずっと千年も永遠に続くことを願っています。

○弥五郎どんに守られ
私たちの岩川小学校は、曾於市南郡、旧大隅町にあり、今年で創立139年目を迎える歴史と伝統のある古い学校です。
岩川校区は、国道269号国道71号がちょうど交差する所にあります。学校のすぐそばには「弥五郎どん祭り」で有名な岩川八幡神社があり、約500メートルのところには、1877(明治10)年の西南戦争で亡くなった官軍兵士の墓地もあります。

全校児童生は306人で「弥五郎どんのこつ」をキャッチフレーズに、みんなで楽しんでいる学校生活を送っています。朝のボランティア活動や体力づくり、またスポーツ少年団活動もさかんで、女子のソフトボール少年団は全国大会で優勝したこともあります。

学校の自慢は何と言っても弥五郎どんの浜下り(パレード)の時に、本物の弥五郎どんが岩川小の校庭に入ってくることです。それにちなんで、学校でも弥五郎どんに関係した行事があります。2年生は生活科の授業で「やごろうどんのこつ」を行います。自分たちで店を出し、手作りのおいもを使って料理も出します。祭りに招待された1年生は大喜びです。4年生は、弥五郎どん祭り当日に、親子で作った「子弥五郎」を引いてパレードに参加します。28年前に、初めて参加してから今までずっと4年生は親子で参加しています。学校のあちらこちらに今までに作った子弥五郎のお面が飾ってあります。
「やごろうどんのように」私たち岩川小学校の子どもたちは、強く、優しく、たくましい子どもになるように毎日がんばっています。
◇岩川八幡神社への駆け上がり

平成22年3月8日『南日本新聞』

○1200人、開通前に車道散策 曾於弥五郎一末吉財部間 弥五郎どんも登場
14日に開通する東九州自動車道の曾於弥五郎IC間(11・1キロ)で7日、ウオーキング大会が開かれた。小雨の中、県内外の約1200人が参加、田園風景を楽しみながら開通前の車道を散策した。

曾於市大隅の曾於弥五郎ICであった開会式には、身の丈4・85メートルの弥五郎どんも登場。弥五郎太鼓が豪快な演奏を披露し、盛り上げた。開通イベントは実行委主催。
ウオーキングは、道ICを発着点に2キロ、4キロ、6キロの3コース。参加者は思い思いのペースで歩き、高さ約50メートルの橋では、足を止めて風景をのぞき込む姿も見られた。
笠木小学校4年の森山七海さん(10)は「高速道路を歩くのは初めて。雨で残念だったけど景色はいいし、楽しい」としゃべっていた。
◇④完成したばかりの自動車道を歩く参加者ら ⑤自動車道に悠然と立つ弥五郎どんの横で演奏を披露する弥五郎太鼓 ⑦曾於市大隅

平成22年4月11日『南日本新聞』

○弥五郎どん4つ子誕生 大隅祭り保存会作製 IC開通記念 観光技術継承に活用
東九州自動車道の曾於弥五郎インターチェンジ(IC)開通記念として、曾於市大隅の弥五郎どん祭り保存会が「子弥五郎」を4体作った。曾於市役所などに設置し、観光PRに活用する。

弥五郎どんは4年に一度、胴体の竹かごなどを作り替える。しかし技

術者の高齢化で高齢者不足が懸念されており、子弥五郎の作製を通して若手への技術継承も図った。

子弥五郎は高さ約2メートル(台車含む)で、本物の半分以下。保存会が2カ月半かけて完成させた。弥五郎どんが衣装着た時に払い下げられた衣装を再利用するなど、本物と同じ作りがなされた。岩川八幡神社で5日、保存会メンバーが参加し、奉納式が行われた。その後、3体が同神社や市役所玄関、大隅町岩川の飲食店に贈られた。残り1体は、弥五郎どん祭りを市内内外に宣伝する際に活用する。中迫会長は「後継者を育成しよう」と子弥五郎作製を思い立った。3月に曾於弥五郎ICが開通し、今後誘客にも活躍してくれるはず」と話している。

◇岩川八幡神社の境内にずらりと並ぶ子弥五郎

平成22年10月31日『南日本新聞』

○「弥五郎どん」のご神体 銅鏡6面、木彫り人形3体に短刀 半世紀ぶり確認 曾於弥五郎どん祭り開かれる曾於市大隅の岩川八幡神社で、11月3日に弥五郎どん祭りが開かれる。その神体について、明確な記録や彫り人形3体、短刀1本が入っていた。ご神体についての明確な記録や言い伝えはなく、谷川正文宮司(80)は「鏡などがあり、神々しさを感じた」と話している。

谷川宮司ら神職3人で10月12日、確認した。同市は弥五郎どん祭りの国無形民俗文化財指定を視察して調査しており、その一環。
木箱はくぎで厳重に閉じられていた。戦後開も、その当時の宮司がご神体を確認したとされるが、その後谷川宮司まで4代は、木箱を開けなかった。神職らは石が入っているかと思っていたという。
銅鏡4面(直径24・5センチ)は「延寶(宝)貳(二)年」と明記。文字が判読できない大きさの古鏡もあった。人形はかぶと、よろいをまとった座像2体(高さ34センチ)のほか、小型1体が、鶴と亀の書かれた小さな鏡と一緒に置かれていた。

同市教育委員会によると、神社の宝物が盗まれ、延宝2(1674)年に京都の石清水八幡宮を参詣して如來と「御正躰四面」を持ち帰ったという記録がある。銅鏡4面は、この時の物とみられる。調査結果や写真などは近く「岩川八幡神社の弥五郎どん祭り調査検討会」に提供され、専門家が分析する。
◇よるい、かぶと姿の木彫りの座像2体と短刀(岩川八幡神社提供)「延寶貳年」と明記された銅鏡。同じ物が4面あった(岩川八幡神社提供)

平成22年11月4日『南日本新聞』

○伝説の巨人行進10万人魅了 大隅で弥五郎どん祭り
鹿児島県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺であった。大和朝廷に征服された隼人の首長とされる、身の丈4・85メートルの弥五郎どんが威風堂々と街を練り歩き、沿道を埋めた観客から拍手喝采を浴びた。

祭りは午前1時、ふれ太鼓で幕開け。青年らが「弥五郎どんが起きよう」と叫ぶ。神社拜殿で組み立てた。その後、住民約1500人で引つ張り起す。薄暗い境内に、伝説の巨人が姿を現した。見せ場は午後1時からの浜下り。ぎよろつとした目と太いまゆの弥五郎どんが太鼓の勇壮な響きに先導され、ゆつとさゆつと肩を揺らしながら行進。例年より多い10万人(主催者発表)の観客を魅了した。踊り連による市中パレードや武道大会もあり、周辺は終日にぎわった。

◇露店の間を練り歩く弥五郎どん 3日、曾於市大隅町岩川

平成22年11月19日『南日本新聞』

○「弥五郎3兄弟」一緒に国文化財指定を 年度末にも報告書
曾於市「地域の誇りに」関係者期待
南九州独特の巨人人形祭り「弥五郎」行事。都城山山之口町の野正八幡宮と曾於市大隅の岩川八幡神社、日南市鉄肥の田ノ上八幡神社で伝承されており、いつのころからか人たちの努力で長年伝えられており、関係者は「兄弟そろって国の文化財指定が受けられれば」と期待を寄せている。(都城支局・税所陸郎)

弥五郎は720(養老4)年の「隼人の戦い」の隼人族首領に由来し、全国規模で行われた放生会の名残とする説が有力との見方がある。
宮崎県の2行事は1989年、国が「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択。鹿児島指定無形民俗文化財の「岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」は曾於市によって調査が進み、本年度末までに報告書がまとまる予定だ。

「選択」より一歩進んだ「国指定」となれば、技術の伝承や活用に向け国からの支援の道が広がる。観光への波及効果も期待できる。何より、価値が認められることは、地域の誇りや結び付きの強まりにも貢献する。

3兄弟の順番は、神社の創建順などによるらしい。
「長兄」とされる山ノ口弥五郎は、朱面の險しい形相で、身の丈約4メートル。11月3日、古式ゆかしく浜殿下り行列する。祭り保存会事務局長の中元照祝さん(59)によると、文献に基づく隊列の再現が特徴的で客との一体感にも心がけているという。中元さんは「国の指定は先祖から受け継ぐ地域の宝を守る上で起爆剤となる」と力を込め、「兄弟そろって行列をしてみたい」とも語る。
日南の「三男」弥五郎様は、11月23日に姿を現す。高さ約7メートルと兄弟で一番大きく山伏のよう。ひげのある朱面に烏帽子をつけて、やりを持つ。田ノ上八幡神社の佐師正起宮司(56)は「伝えられる記録は少ない」とい、「できれば兄弟一緒に指定を受けられれば」と話した。

一方、「二男」の岩川の弥五郎どん、身の丈4・85メートルで、目がぎょろつとしてただけの表情。11月3日の祭りは午前1時、ふれ太鼓(神事)で開通。青年らが「弥五郎どんが起きよう」と、近隣にふれ回る。社殿の中で組み立てられ、早朝に住民らが引つ張り起すきたりだ。
国の無形民俗文化財の選択など宮崎側が先行する中、曾於市教委は「昨年に独自調査を開始。南九州の視点から見る古代国家の成り立ちや、放生会から巨人人形行事が生み出されるプロセスなどの解明が狙いだ。専門家らが、仮面信仰の観点や宗教的背景、遺跡、古記録などを多角的に研究。祭りや伝説の特徴、隼人の戦いとのかわり、弥五郎どんの真夜中の再生儀式の謎に迫る。」

祭り保存会の中迫会長(76)は「国の文化財になれば、地域の元氣や誇り、知名度アップにつながる。県境を越え3兄弟で指定を受けられたら」と夢をふくらませている。
◇「長兄」都城山山之口町 的野正八幡宮に伝わる山ノ口弥五郎どん
◇「二男」曾於市大隅 岩川八幡神社の鳥居をくぐり、市街地に練り出す弥五郎どん
◇「三男」日南市鉄肥 田ノ上八幡神社に伝わる弥五郎様(日南市提供)

平成22年12月7日『南日本新聞』

○木彫り人形は門守 検討会が見解 岩川八幡神社

「岩川八幡神社の弥五郎どん祭り調査検討会」が11月30日、曾於市の大隅支所で開かれた。10月に同神社で見つかった人形や銅鏡などについて議論し、よろい・かぶと姿の木彫り人形2体は神社の門番とされる門守との見解を示した。大型の古鏡上面は「神体の可能性がある」と推測された。神体内の木箱の箱に銅鏡6面と人形2体、短刀が収められていた。人形はよろい・かぶとについて、出村卓三委員が「単人塚の四天王石像に似ている」と指摘。類似した人形は、大王殿（テオドン）行事が行われる日置八幡神社（日置市日吉）で確認されているだけで、巨大人形行事と単人とのかわりを探る上で貴重な発見とみている。

大型の古鏡は背面に阿弥陀如来を表す梵字が墨で書かれていた。明治初期に廃仏毀釈から保護するため、箱に入れて隠されたと推測する。「延寶（延）二（一）年」（1674年）と明記された銅鏡4面は、壁掛け用の穴が開いており、「神体ではない」とした。谷川正文岩川八幡神社は、「神体は弥五郎面（古面）」としている。谷川正文宮司は「古鏡の公開は控えたい」と話している。◇よろい、かぶと姿の木彫りの座像2体と短刀（岩川八幡神社提供）

平成23年3月3日 『南日本新聞』

○弥五郎どん全国が目目 東京、伝統芸能まつり
全国の伝統芸能が競演する第11回地域伝統芸能まつり（同実行委員会主催）が2月26、27の両日、東京のNHKホールであり、大トリを務めた曾於市の「弥五郎どん祭り」が大いに盛り上げた。「荒ぶる」をテーマに、地域伝統芸能や古典芸能計15演目が上演された。

弥五郎どんは、地元保存会などの40人が登場、躍動感あふれるリズムと動きの大隅弥五郎太鼓で始まった。子どもたちが引く孫弥五郎、子弥五郎に続いて、約5メートルの弥五郎どんが登場。11月の本祭で陸橋下を通るときに体を傾ける、イナバウアーも披露した。終了後は大歓声に包まれ、立ち上がって手を振る人もいた。

津曲芳夫弥五郎どん祭り実行委員長（60）は「出番が最後で気合が入った。会場は熱気も伝わり、やり遂げた充実感がある」と話した。12日午後1時半からNHKBS2、19日午後3時からNHK教育テレビで放映予定。

◇地域伝統芸能まつりでラストを飾った弥五郎どん祭りⅡ東京

平成23年4月17日 『南日本新聞』

○国文化財へ第一步 「弥五郎どん」報告書完成 2年かけ正体・背景探る 曾於市教委

曾於市大隅の岩川八幡神社周辺で行われる弥五郎どん祭り（県指定無形民俗文化財）の調査報告書が完成した。民俗や古代史、衣装の専門家が2年かけて研究し、弥五郎どんの正体や祭りが始まった背景に迫った。地元では国の文化財指定へ期待が高まっており、報告書は価値をアピールする第一歩になりそうだ。

弥五郎どん祭りは県下三大祭りとして知られるが、誕生した時期や背景、足跡など不明な点が多い。曾於市の伝統芸能として後世に残そうと、市教委が2008年に報告書作成に取りかかった。専門調査員は鹿児島県民俗学会の所崎平代表幹事や単人研究で知られる中村明蔵・元鹿児島国際大学教授ら6人。文献や民俗宗教、仮面、民具など多様な分野からルーツや意義を探った。地元の祭り保存会長らも加わり、検討会は14回開かれた。

仮面研究家の出村卓三調査員は弥五郎面を分析。「神王面の大王面型

であるから、弥五郎どんは単人族の首領という捉え方が正しい」と結論づけた。

また所崎調査員は、岩川八幡神社が1674（延宝2）年に京都の石清水八幡宮から鏡4面を持ち帰り基礎を固めた点に着目。「祭りはこのころに始まったと言っているのではないかと記した」。

報告書はA4判、198ページ。大正、昭和時代の貴重な弥五郎どんの写真を収められている。曾於市立図書館などで閲覧できる。◇電線をかいくぐりながら市街地を練り歩く弥五郎どんⅡ2010年11月3日、曾於市大隅、弥五郎どん祭りについて調査研究した報告書

平成23年6月14日 『南日本新聞』

○伝説の巨人 弥五郎どん祭り調査報告書から 上 真夜中の儀式 単人の首長再生を願う

「弥五郎どんが起きよ」と。11月3日午前1時、曾於市商工会の青年らが、太鼓を打ち鳴らしながら寝静まった町を触れ歩く。夜空に響く大きな音と声は、儀式始まりの合図。まるで住民が待ち望んだ、救世主、誕生を知らせるかのようだ。

しばらくして岩川八幡神社の拝殿内で、弥五郎どんの組み立てが始まった。竹で組まれた胴体と手足が慎重につなぎ合わされる。所崎平さん（鹿児島県民俗学会代表幹事）は、完成した弥五郎どんが拝殿から引き出される瞬間に着目した。「母親の胎内から生まれ出るようだ」。

弥五郎どんの両腕の長さは約4メートル。これに対して拝殿入り口の幅はわずか2.5メートル。青年らは弥五郎どんを斜めにしたり左右に動かしたり四苦八苦しながら、境内に引きずり出す。拝殿を抜けるのに数十分要した。

なぜ狭い拝殿で組み立てるのか。所崎さんは「単人の首領の霊を復活させ、偉大さをみせつける儀式」とみる。神の子宮（拝殿）で育った弥五郎どんが、地上、境内に再生する姿を表現しているとの見解だ。

真夜中の組み立てでも、神秘性を強調するためと考えられる。境内に現れた弥五郎どんは住民が縄を引つ張って引き起こす。それに加わった人は幸せになると伝えられる。

2010年秋、同神社で単人とのかわりを見せる門守神2体が、開かずの木箱から見つかった。出村卓三さん（鹿児島県民俗学会幹事）は、門守神が装着する鎧・かぶとに驚いた。「単人塚の四天王像に類似」していたからだ。

神社入り口に置かれる門守神は神職姿が多く、武人像は極めて珍しい。出村さんは「弥五郎どんは、単人の首領とみて間違いない」と確信する。古代の軍服姿は、岩川以外では日置八幡神社（日置市日吉）のみという。

牧島知子さん（鹿児島県文化財保護審議会委員）は弥五郎どんの衣装が梅染めである点に着目した。古来中国では、梅は神格に近い香気をもたえるとされる。樹木を切り刻んで煮出した梅染めに、再生力や神霊が宿るといわれる。

狭い拝殿での組み立てを再生儀式ととらえれば、牧島さんは「藍や茜など染料はたくさんあるなかで、梅染めにこだわった理由が理解できる」と指摘した。

県下三大祭りとして知られる弥五郎どん祭り。曾於市大隅の町を威風堂々と練り歩く弥五郎どんは、住民に長く愛されてきた。ところがその正体はベールに包まれている。曾於市教委の依頼を受け、県内の民俗・歴史学者が2年かけて解明に取り組んだ「岩川八幡神社の弥五郎どん祭り報告書」がこのほど刊行された。ひもとかれた伝説の巨人、弥五郎どんの素顔を紹介する。

◇拝殿の狭い入り口から、弥五郎どんを境内に出す青年ら

平成23年6月15日 『南日本新聞』

○伝説の巨人 弥五郎どん祭り調査報告書から 中 祭りの開始 江戸初期には本格化か

曾於市大隅の投合八幡宮（県指定有形文化財）で10月、2カ所の御旅所を訪ねる浜殿下が行われる。6人の氏子が面を、4人が鏡を御先に掲げて厳かに歩く。この儀式が、弥五郎どんの浜下りの原形とも伝えられる。

同八幡宮は、岩川八幡神社から車で約10分。戦国大名の島津義久が重臣と和歌を奉納した由緒ある神社。浜殿下り掲げる面に、1556年作との墨書がある。

制作年代のわかる神王面（神のよりしろとなる面）は、16世紀中葉の作が多い。同市の太田神社には、表情や形相が弥五郎どんに酷似した中世の面が伝わる。出村卓三さんは「弥五郎どんの面は、このころに制作された可能性が高い」と指摘した。

弥五郎どん祭りの開始時期は、明確な記録がない。岩川八幡神社の弥五郎どんが文献上に初めて登場するのは、江戸中期の国学者・白尾国柱が記した慶藩名勝考（1795年刊行）。幕末に薩摩藩が編さんした三國名勝図会でも、当時の祭りの様子が描かれている。

弥五郎どん祭りは現在、岩川のほか、的野正八幡宮（都城市山ノ口）、田ノ上八幡神社（日南市鉄肥）で行われる。三國名勝図会には、的野の浜下りだけを絵図に描いた。当時、岩川の祭りは的野ほど有名でなかったのだろうか。

岩川八幡神社は1674年、京都の石清水八幡宮から鏡4面を持ち帰った。同八幡宮の放生会はこの5年後に再開された。鏡を授かった縁が、弥五郎どん祭りに影響を与えたことも想像される。

日置八幡神社（日置市日吉）の大王殿の面も、開始時期をさぐる鍵を握る。同面は1641年に日置領主の島津久慶が奉納した。久慶は当時、未吉郷（岩川を含む）の地頭を務めていた。

所崎平さんは「久慶は巨大な弥五郎どんを見ていて、日置八幡神社にも大きな面を作ろうとした」と推測する。弥五郎どん祭りが大王殿の面より前に行なわれていたとすれば、開始時期は江戸初期までさかのぼる。調査報告書は「早くして17世紀初頭、遅くとも同後半に作り上げられた」と結論づけた。

◇氏子らが面や鏡を掲げて歩く投合八幡宮の浜殿下り。矛先に付けた布は毎年、1枚だけ新しい物に取り替えるという

平成23年6月16日 『南日本新聞』

○伝説の巨人 弥五郎どん祭り調査報告書から 下 竹で大型化 中央への抵抗精神潜む

弥五郎どんの身の丈は、時代によって若干伸び縮みしたようだ。現在4メートル85センチだが、江戸時代の慶藩名勝考（1795年刊行）は、1丈6尺7寸（5メートル6センチ）と記す。現在まで約21センチ縮んだ計算になるが、少なくとも200年間、身の丈は厳しく守られてきた。大型にした背景に何があるのか。森田清美さん（鹿児島県民俗学会副代表幹事）は「南九州の豊富な竹と、六つ目編みによる竹かご制作の高い技術」を挙げる。巨大な青森のねぶたも、昔は竹で作られていたという。

六つ目編みとは、六角形の編み目の数を増やす手法。高く長いかごを作ることが可能で、竹かごは巨大でも軽量のため、引き回すのが容易という特徴がある。弥五郎どんは竹かごの胴体と竹製の腕で作られ

ている。

また、森田さんは「中央政府への抵抗精神」も要因の一つとみる。ねぶた祭を行う東北も南九州と同様、中央政府に征服された歴史を持つ。決して負けたのではないという反骨精神が潜んでいるというわけだ。714年、中央政府が豊前国の200戸(約5千人)に大隅国への移住を命じた。単人研究で知られる中村明蔵さん(元鹿児島国際大学教授)は、単人の教化を目的にした、この移民政策に注目する。豊後国の民も一緒に移住したとみている。

大隅国は遠く、しかも720年に単人の乱が勃発。すんなりと移り住める状況になかった。中村さんは「単人数のため、移民計画は長期にわたったはず720年以降は、移動途中の日向で滞留する集団がいた」と推察する。それを裏付けるように西都市で豊後系の甕が、都市では「秦」の墨書土器が見つかった。秦氏は豊前に多く居住していた。弥五郎どん祭りをを行う都城市山崎の口、日南市飲肥、曾於市大隅の3カ所は、移民が滞留した可能性があるという。中村さんは「移民の守護神である八幡神が滞留地域で神威を発揮し、漸次巨大化してその地域に根を下ろした」と考えた。

元曾於市文化財保護審議会委員の中島勇三さんは、鹿児島・宮崎両県で弥五郎に関する小字を拾った。鹿児島市の弥五郎平、さつま町の弥五郎、薩摩川内市の矢五郎、都城市の弥太郎など多い。九州で広く愛されている「大人」名の小字も少なくない。弥五郎どんは、南九州で広く愛されている証拠だろう。

◇拝殿で組み立てられる弥五郎どん。手前の細長い竹かごが胴体部分

平成23年6月27日『南日本新聞』

○「ミニ弥五郎」やストラップ開発 曾於の保存会決定
弥五郎どん保存会の総会が22日、曾於市大隅の飲食店であった。写真。ミニ弥五郎や携帯用ストラップを開発し、商品化することを決めた。若者に弥五郎どんを身近に感じてもらうという狙い。ストラップは、弥五郎面を模したデザインなどを計画。ミニ弥五郎は高さ50センチほどで、弥五郎どんと同じ竹製。会員が試作している。いずれも11月3日の弥五郎どん祭りにして商品化したい考え。また、破れが激しくて祭りに使用できなくなった弥五郎どんの傘を新調する方向で検討することも決めた。

同会には、弥五郎どん祭り保存会から衣替えし、2010年8月に設立。総会には約40人が出席し、11年度の事業計画などを承認した。

弥五郎どん祭り実行委員長津曲芳夫氏の再任も決めた。

平成23年10月6日『南日本新聞』

○華やか巫女舞誕生 地元小中高生5人結成 社務所70年ぶり改築祝い
岩川八幡神社

弥五郎どん祭りで知られる曾於市大隅の岩川八幡神社で、巫女舞が誕生し1日、社務所竣工祭で披露された。巫女は地元の小中高生5人。勇壮な弥五郎どんと趣が異なる華やかな舞は、同神社の新たな魅力になりそう。

巫女舞の踊り手は社務所改築を機に8月に募集。地元の岩川小学校、大隅中学校、岩川高校から計5人が選ばれ、夏休みに3日かけて練習した。県神社庁女子神職会が指導した。

同日は神事の後、花冠をつけた4人が、優雅な雅楽に合わせて「豊楽の舞」を厳かに奉納した。11月3日の弥五郎どん祭りでは一人舞、二人舞も披露する予定。岩川高2年の大垣真菜美さん(17)は「初めてで

とても緊張したけど、かわいらしく舞うことができた」と安堵していた。

社務所改築は約70年ぶり。132平方メートルで、5月に着工。18畳の大広間や弥五郎の展示スペースなどを設けた。拝殿も床の張り替えや回廊を改修した。記念式典で、氏子総代の山下幸一会長は「国の文化財指定に向けた取り組みも、弥五郎どんを熱く盛り上げていきたい。社務所も建設できた。1千年の伝統をしっかりと守っていきたい」と話した。

◇①神前で厳かに回れる巫女舞 ②約70年ぶりに改築された社務所
曾於市の岩川八幡神社

平成23年10月29日『南日本新聞』

○弥五郎どん装い新装 大傘、15年ぶり補修 社務所改築、巫女舞も曾於・大隅
曾於市大隅の岩川八幡神社周辺で11月3日に行われる弥五郎どん祭り(鹿児島県無形民俗文化財)に合わせて、弥五郎どんの大傘が15年ぶりに補修された。祭りの大事な脇役だが、劣化が激しく、昨年は出場できなかった。同神社は社務所が70年ぶりに改築され、巫女(みこ)舞も誕生するなど、今年は装いを新たにしている。

大傘は、浜下りの際に弥五郎どんの後ろに付き従う。曾於市商工会によると、2009年の祭りの途中で破れが広がり、浜下りの行列から離脱した。2年ぶりのお目見えになる。

そうしんまちづくり振興基金や地元企業25社からの募金計50万円で大分県の職人に補修を依頼。約4カ月後の10月中旬、同商工会大隅支所に届いた。

傘は和紙と竹でできており、直径、高さともに約3メートル。弥五郎どん祭り実行委員会の津曲芳夫委員長(61)は「傘がないと、どこかさびしい。今年は浜下りだけではない、観客に見てもらいたい」と話している。

同祭りは、午前1時の触れ太鼓で始まり、午後には弥五郎どんが街を練り歩く。地元小中高生による巫女舞は、午前9時半からの神事の中で、神社拝殿で披露される。

◇15年ぶりに補修された弥五郎どんの大傘 曾於市商工会大隅支所

平成23年10月31日『南日本新聞』

○来月3日、弥五郎どん祭り 大隅・岩川八幡神社周辺 浜下りは午後1時開始
鹿児島県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが11月3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺で行われる。午前1時のふれ太鼓を皮切りに、神社拝殿で組み立てが始まる。午前4時ごろ、住民が弥五郎どんを引き起こし、4.85メートルの巨人が姿を現す。写真①。

浜下りは午後1時に同神社を出発、弥五郎どんの肩に乗る人が電線を押しのけながら沿道を進む。②。最大の見せ場はJ.A.お鹿鹿島本所横の国道269号の下。弥五郎どんが体を傾ける。「イナバウアー」で高架構橋をくぐり抜ける。③。その後、露店の間をぬって同神社方面に戻る。④。

弥五郎太鼓奉納は午前10時半、市中パレード(鹿児島交通駐車場1岩川小学校)は同11時15分。市大隅文化会館では音羽しのぶ歌謡ショー(無料)など多彩な催しがある。

同日は、県合庁一社社周辺が午前8時〜午後5時に歩行者天国。東九州自動車道を曾於弥五郎インターチェンジ(IC)からは、国道269号へ右回りを設定した。

前夜祭「どんどん祭り」は2日午後6時半から市大隅文化会館。市

商工会大隅支所099(482) 1432。

◇弥五郎どん祭り交通規制

平成23年11月4日『南日本新聞』

○(主な紙面) 弥五郎どん、観客を魅了
社会 鹿児島県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺であった。身の丈4.85メートルの弥五郎どんが町を練り歩き、沿道の観客を魅了した。同神社は今年、社務所が70年ぶりに改築され、巫女(みこ)舞も初披露された。

◇(表題無し) 露店通りを練り歩く弥五郎どん
○伝説の巨人威風堂々 大隅で弥五郎どん祭り
鹿児島県無形民俗文化財の大隅で弥五郎どん祭りが3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺であった。身の丈4.85メートルの弥五郎どんが威風堂々と町を練り歩き、沿道にあふれた観客を魅了した。(13面に関連記事)

祭りは午前1時に幕開け。青年らが、「弥五郎どんが起きろっどー」と暗闇の町をふれ歩き、神社拝殿で組み立てに着手。同4時ごろ、小雨がぱらつく中、境内で待ち構えた約1000人の住民によって引き起こされ、単人の首長とされる、伝説の巨人が姿を現した。

祭りの絶頂は午後1時からの浜下り。ぎよろりとした目と太いまゆの弥五郎どんが、太鼓の勇壮な響きに先導され、ゆつさゆつと肩を揺らしながら行進した。

観客は約10万人(主催者発表)。同神社は今年、社務所が70年ぶりに改築され、巫女舞も初披露。市中パレードや武道大会もあり、周辺は終日にぎわった。

◇鳥居をくぐり、浜下りに出掛ける弥五郎どん 3日、曾於市大隅町

○弥五郎どん岩川高訪問 地元校存続へエール
数百年間も住民に勇氣と力を与えてきた。伝説の巨人、弥五郎どん。3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺で行われた祭りでは、今年創立70周年を迎えた岩川高校を初訪問した。同校は高校再編問題で統廃合が取りざたされており、弥五郎どんは大きな体を揺すってエールを送った。

同校には、午後1時からの浜下りの際に立ち寄った。正式ルートを外れて寄り道するのは異例。祭り関係者多くが同校OBで、同窓会の要請を快諾した。母校存続へ、地元英雄の力を借りようとの狙いだ。

在校生とOB約15人による太鼓演奏に先導された弥五郎どんは、正門からゆつくりと校内に入り、前庭をぐるりと一周。校舎前に待ち構えた生徒約100人に囲まれ、ご満悦の様子で、約3分間滞在した。

1年の新原未菜美さん(15)、村下美鈴さん(16)は「学校を活気づけて来てくれて、とても感動した。迫力ある姿に元気をもらった」と興奮していた。

浜下りは、行く手を阻む電線を押しのけながら行進。最大の難所、国道269号の高架構橋(高さ5.2メートル)では、台座を含め高さ6メートルの弥五郎どんが、肩に人を乗せたまま体を傾ける離れ業。イナバウアーを披露、沿道の観客を沸かせた。

◇大勢の生徒らに出迎えられ、ご満悦の様子弥五郎どん 3日、曾於市の岩川高校、華やかな「イナバウアー」で、高架構橋をくぐりぬける弥五郎どん 3日、曾於市大隅

○(長男)も浜下り 都城で弥五郎どん祭り
都城市山崎の野正八幡宮で3日、山崎弥五郎どん祭りがあつ

た。無病息災を願い、地元住民でつくる保存会が開く伝統の祭り。身の丈約4メートルの弥五郎どんを先頭に。古式ゆかしい浜殿下り行列が、大勢の観客を魅了した。

行列は約600メートルの参道を進んだ。赤い顔に、大きな目を見開いた迫力ある形相の弥五郎どんが台車につけて威風堂々と登場すると、大きな歓声が上がった。

体や麻の着物に触れると病気をしないと言ひ伝えがあり、今年も大勢の人が群がった。日南市から家族で訪れた団体職員渡辺史史さん(22)は「妻のおなかにいる子どもの分まで健康を願った」と話した。

祭りは文化庁選択の無形民俗文化財。弥五郎どん伝説は鹿児島、宮崎両県の3地域にあり、山ノ口の弥五郎どんが長男。曾於市大隅が次男、日南市が三男とされる。

◇堂々と浜殿下りをする弥五郎どん 3日、都城市山ノ口
平成24年9月6日 『南日本新聞』
○弥五郎どん衣装直し 4年に1度 集落越え縫い子集結 大隅・岩川八幡神社
曾於市大隅の岩川八幡神社で3日、4年に一度の弥五郎どんの衣装直しが始まった。これまでは神社に近い2集落の婦人部が新調を担当していたが、高齢化で人手が足りなくなり、縫い子16人が集落の垣根を越えて集まった。

衣装直しは竹で編む胴体部分とともに、うるう年に実施するのが習わし。東馬場 上馬場両集落の女性が上着とはかまを交互に担当してきた。弥五郎どんは身の丈が一丈六尺(4.85メートル)もあるため、大人25着分に相当する布を使った裁断。縫製は高齢者にはきつい作業。前回は東馬場に裁断ができる人がおらず、呉服の仕立て経験がある長崎ミヨ子さん(58)が集落外から加わった。

今回、長崎さんと上馬場集落の2人を除く13人は初めての衣装直し。3日は、作業の無事を祈って一人一人が神前に玉串をさげたと後、神社に収められる前回の衣装を参考に、新調用の布を広げ、見ごころ部分を裁断した。今後、週4日ほど神社に集まり、経験者3人が技術を伝えるながら約1カ月かけて仕上げる。

16人中最高齢の新屋文さん(81)は「2集落のこれまでの苦労がよく分かる。4年に1度の作業の仲間に入れてもらえるのはありがたく、眺めるだけだった弥五郎どん祭りの見方が変わってくる。氏子総代の山下幸一会長(70)は「地味な仕事をしてくれる人がいるからこそ、にぎやかな祭りができる」と感謝した。

胴体部分の新調は霧島市福山の竹細工職人の手です。10月に始まる予定。弥五郎どん祭りは11月3日にある。

○弥五郎どんの衣装新調のため、布の寸法を測り、裁断する縫い子 3日、岩川八幡神社拝殿 昨年度までの衣装の弥五郎どん
平成24年10月29日 『南日本新聞』
○弥五郎3兄弟一同に 宮崎神宮大祭初見参
【神武さま】の愛称で親しまれる宮崎神宮大祭が行われた27日、曾於市大隅の岩川八幡神社と都城市山ノ口の野正八幡宮、日南市鉄肥の田ノ上八幡神社の、弥五郎3兄弟が宮崎市の目抜き通りに勢ぞろいし、華やかな祭りに花を添えた。

3兄弟が同大祭にお目見するのは初めて、一堂に会するのも11年ぶりであって、多くの観光客らが、巨人たちの威風堂々とした姿に見入っていた。

荘厳な御神幸行列などが宮崎の秋の風物詩となっている同大祭。今年

は古事記編さん1300年の記念の年ということもあり、宮崎側から岩川八幡神社側に弥五郎どん招待の打診があったという。

3兄弟は神社が建立された年代などを基に、都城が長男、曾於が次男、日南が三男とされ、身長はそれぞれ4メートル、4.85メートル、7メートル。宮崎市高千穂通の特設ステージ前に巨人たちが登場すると、観客からは大きな歓声と拍手が沸き上がった。その後、各保存会のメンバーがそれぞれ祭りをPR、岩川八幡神社の弥五郎どんは浜下りも行った。曾於市の弥五郎どん祭り実行委員会の津由芳夫委員長は「11月3日の本番へ向け良い稽古になった。今年は4年に一度の衣替え。古い着物でのお披露目はこれが最後になるのでもういい思い出もなりました」と話していた。

◇宮崎神宮大祭で勢ぞろいした、弥五郎3兄弟。左が岩川八幡神社の弥五郎どん 27日夜、宮崎市
平成24年10月31日 『南日本新聞』
○和太鼓衆、稽古に熱 5キロ浜下りへ気迫十分 曾於、弥五郎どん祭り 来月3日
曾於市大隅で11月3日ある弥五郎どん祭りに参加する和太鼓衆が大隅文化会館で週3日の猛稽古を続けている。本番では、市街地約5キロを「浜下り」する弥五郎どんの前後に付き、2時間以上祭りを盛り上げるため、体力と気力は不可欠。ばちを持つ手には気迫がこもり、館内には太鼓をたく音と威勢のいい掛け声が響き渡っている。

大隅弥五郎太鼓と同太鼓・約の総勢約60人、半数は地元の小中高校生が占める。稽古は夜8時から2時間、浜下りで披露する3曲を繰り返す。いずれも弥五郎どんをイメージした勇壮な曲だ。

指導する伊藤清廣さん(64)は「最初から張り切り過ぎれば、パテて体が動かなくなる。力配分が難しく、長丁場という覚悟が必要」と話す。24日の練習では「声が出ていない」「ちゃんと構えて」と指導に熱が入った。

浜下りに和太鼓が登場したのは約30年前。当初はトラックの荷台で演奏していたが、約20年前から弥五郎どんに随行するようになった。盛り上げ役としての期待は大きく、弥五郎太鼓代表の久米一泰さん(44)は「祭りあつての太鼓。手は抜けない」と気合が入る。

4回目の参加となる岩川高校3年の伊地知成也君は、今年も既に手の豆がつぶれた。汗だらけの顔で「弥五郎どんと一緒に歩けるのが誇らしく、沿道のお客さんが楽しんでくれるのがうれしい」と話した。

◇弥五郎どん祭り本番に向け、練習に熱が入る和太鼓衆 曾於市大隅の文化会館
平成24年11月1日 『南日本新聞』
○大隅・岩川八幡神社 3日弥五郎どん祭り
弥五郎どん祭りが3日、曾於市大隅の岩川八幡神社を中心に行われる。「浜下り」は午後1時に始まる。

午前1時の触れ太鼓を合図に、神社拝殿で弥五郎どんの組み立てが始まり、同7時から完成する。同10時から神事は志布志市出身の大相撲の千代風閣、師匠の九重親方(元横綱千代の富士)が参加。境内では大隅弥五郎太鼓による2回の奉納太鼓が行われ、856食の豚汁も振る舞われる。

浜下りは午後3時45分ごろまで。鹿児島交通駐車場を折り返し、県大隅地域振興局曾於庁舎を通り神社に戻る。市パレードは午前11時半から1時間、同駐車場から岩川小学校まで。午前8時〜午後5時、同曾於庁舎―神社が歩行者天国となる。

岩川小学校で武道大会、大隅文化会館で岩元水歌謡ショーがある。2日午後6時半からは同会館で前夜祭が行われ、和太鼓や小中高生による吹奏隊がある。

駐車場はバス専用を除き21カ所計1845台分。市商工会大隅支所 099(482) 1432。
◇弥五郎どん祭り交通規制図
平成24年11月4日 『南日本新聞』
○弥五郎どん祭り 着物新調巨体堂々 大隅
鹿児島県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺であった。頭上の電線をよけ、露店でにぎわう歩行者天国をかき分けながら男と歩く身の丈4.85メートルの巨体に大勢の見物客が見入った。

祭りは午前1時に幕開け。青年らが「弥五郎どんが起きろー」の掛け声と太鼓を響かせながら寝静まった町をふれ歩いた。

今年4年に一度の作り替えの年。神社拝殿では青年25人が新調された竹の胴体や腕を組み立て、真新しい25反分の着物をまとわせた。午前4時前、「伝説の巨人」が境内に姿を現し、待ち構えた住民が綱を引いて一気に起こすと同時に歓声が沸いた。

祭りは午後1時開始の浜下りで最高潮に達した。参道の両脇や鳥居周辺は身動きできないほどの人垣ができ、ぎよろり眼に太いまゆの弥五郎どんが肩を左右に揺らしながら練り歩くと拍手で迎えた。体を背中側へ大きく反らして高架構をくり抜ける。難所は数百人が見守った。◇4年ぶりに新調され、さつそうと街を練り歩く弥五郎どん 3日午後3時10分、曾於市大隅町岩川 写真部・北村茂之
平成24年11月19日 『南日本新聞』
○守り神お直し 曾於市岩川・弥五郎どん
「弥五郎どんが起きろー」。3日午前1時、町中に響く大声と触れ太鼓が祭りの始まりを告げる。3時間後、着物や面を付けた伝説の巨人が、まだ暗い境内に立ち上がった。街を練り歩く浜下りに向けた準備は明け方まで続いた。

曾於市大隅の岩川八幡神社に伝わる弥五郎どん祭り。今年も弥五郎どんの胴体新調する4年に1度の節目にあたる。およそ1カ月間、地域住民らが奮闘した。

5メートル近い巨体は、竹材をかか状に編み上げてつくる。現在、この作業をできるのは霧島市福山の竹細工職人・福丸實さん(72)だけ。

後継者はいない。市教育委員会は今回、伝統を次代につなげようと、福丸さんの記憶頼りだった寸法や編み方をビデオなどで記録した。

着物つくりも担い手不足は同じ。かつては神社に近い2集落の女性が縫っていたが、現在は集落外の人も手伝う。長崎美代子さん(58)を中心にした女性16人が、大人25着分の布を縫い合わせ着物を立立てた。

祭り本番。境内に福丸さんや長崎さんらの姿があった。多くの見物客を見下ろすように歩く姿はまさに大隅の守り神。福丸さんは「神様をつくらせているのだから誇らしい」。命を吹き込んだ真新しい巨体を見上げた。

◇力を合わせ巨体完成させた地域の元氣な女性たち 11月11日 長い竹を巧みに編み上げ胴体や腕を作る 11月11日 境内に飾る弥五郎どんの大きな草履も、神社の総代たちが4年に1度作り替える 11月20日 夜明け前「弥五郎どんが起きろー」の掛け声とともに立ち上げられる巨体。多くの参拝客が詰め掛けた境内は熱気に包まれる 11月3日午前4時 新しい着物を街を練り歩く弥五郎どん

平成25年10月30日 『南日本新聞』

宮崎の秋の風物詩、宮崎神宮大祭「神武さま」が26日、宮崎市の目抜き通りであり、曾於市大隅の弥五郎どんが浜下りを熱演した。巨体を左右に揺らして歩行者天国を25分間練り歩き、沿道を埋めた観衆を魅了した。

昨年に続く遠征。「また見たい」と市民に好評だった(前畑智之・宮崎神宮大祭実行委員長) ため招待され、今回もメイン会場での郷土芸能のトリを務めた。

弥五郎どんの引き手には、沿道にいた子どもたち約50人が参加した。前後には大隅弥五郎太鼓が付き、11月3日の本番さながらに、跳びはねて太鼓やかねを打ち鳴らし盛り上げた。信号機前では体を大きく反らせてぐりあげる名物の「イナバウアー」を披露した。

宮崎市の会社員幸田昭博さん(43)は「威勢のよさに、元気をもらって」と楽しんだ様子。津曲芳夫、弥五郎どん祭り実行委員長(63)は「宮崎でも少しずつ浸透してきた。本番を前に気持ち引き締まった」と話した。

◇宮崎神宮大祭で、歩行者天国を練り歩く曾於市大隅の弥五郎どん
宮崎市高千穂通り

平成25年11月1日 『南日本新聞』

○3日弥五郎どん祭り 大隅

鹿児島県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺で開かれた。伝説の巨人が岩川の街を練り歩く「浜下り」は午後1時に始まる。

祭りは午前1時のふれ太鼓でスタート。神社拝殿で弥五郎どんの組み立てが行われ、早朝完成する。境内では大隅弥五郎太鼓の奉納856食の豚汁も振る舞われる。

浜下りは午後3時45分ごろまで。市中パレードは午前11時15分から約1時間。午前8時～午後5時、神社周辺は歩行者天国となる。岩川小学校で武道大会、大隅文化会館で岡千秋歌謡ショウがある。

2日午後6時半から同会館で前夜祭が行われる。弥五郎どんは5日まで神社に鎮座し、4日午前11時から郷土史家中島勇三氏が「弥五郎どん」と巨人伝説あれこれ」と題し講演する。市商工会大隅支所 099(482) 1432。

◇弥五郎どん祭り交通規制図

平成25年11月4日 『南日本新聞』

○巨体堂々練り歩く 大隅で弥五郎どん祭り

鹿児島県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺で行われた。身の丈4・85メートルの大男の「浜下り」を見ようと、岩川の街は大勢の見物客でにぎわい、雨にもかかわらず、祭りの熱気に包まれた。

弥五郎どんが神社の参道を下りて鳥居をくぐると、待ち受けた観衆から「ウオー」と歓声が上がった。曾於市内外の和太鼓衆100人に先導され、巨体を大きく揺らし堂々と浜下りした。

難所の高架橋は身動きが取れないほどの人だかりができ、背中を大きく反らせて通り抜けると拍手が沸いた。前半に塚本一義さん(30)、後半は中尾勇一さん(35)が肩に乗り、頭上の電線を棒で何度もかき分けながら、街を2時間半練り歩いた。

この日は午前1時に青年が「弥五郎どんが起きろっ」と大声で街を練り歩き、祭りの始まりを告げた。夜明け前、神社拝殿から弥五郎

どんが姿を現すと、集まった百数十人が綱を引いて巨体を起こし、無病息災を祈った。

◇地元の小學生らに引かれ、浜下りに出掛ける弥五郎どん 3日、曾於市大隅町岩川

平成26年10月30日 『南日本新聞』

○来月3日弥五郎どん祭り 曾於・岩川八幡神社

鹿児島県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが11月3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺である。身長4・85メートルの伝説の巨人・弥五郎どんが練り歩く「浜下り」は、神社を起点に午後1時に始まる。

未明から拝殿で弥五郎どんを組み立て、午前4時前に姿を現す。この間、境内では豚汁などが振る舞われる。午前9時に大隅弥五郎太鼓の奉納、市中パレードは11時15分から。

岩川小学校で武道大会、大隅文化会館でのど自慢大会と三船和子歌謡ショウがある。

午前8時～午後5時は交通規制され、一部で歩行者天国。駐車場は会場周辺各所。2日午後6時から大隅文化会館で前夜祭。市商工会大隅支所 099(482) 1432。

◇弥五郎どん祭り交通規制図

平成26年11月4日 『南日本新聞』

○弥五郎どん街を闊歩 曾於

鹿児島県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺であった。身長4・85メートルの伝説の巨人が肩を揺らして市街地を闊歩し、沿道の観客を魅了した。

午後1時、小学5年男子に引かれた弥五郎どんが鳥居前に雄姿を現すと、埋め尽くした観客から「ウオー」とどよめきが上がった。背中をそらせて通り抜ける難所の高架橋周辺では1万人近くが見物。2時間半の「浜下り」は、大隅弥五郎太鼓など過去最多110人の和太鼓衆が随行して沿道を盛り上げた。

孫を連れ50年ぶりに見物した曾於市財部の川添勉さん(67)は「スケールの大きさ、人の多さに圧倒された。これぞ古里の祭り」。

祭りは午前1時のふれ太鼓で幕開け。午前4時、神社拝殿で組み立てられた巨体を集めた約200人が綱で起こし、健康を祈願した。

◇鳥居をくぐり、浜下りに出る弥五郎どん 3日午後1時、曾於市大隅町岩川(佐伯直樹撮影)

平成27年10月26日 『南日本新聞』

○わが町フラッシュ 弥五郎どんの制作技術継承 地元青年ら実物大で試作中 大隅の竹文化保存へ

曾於市大隅の伝統行事、弥五郎どん祭りを支援する弥五郎どん保存会は、祭りの象徴である巨大な弥五郎どんの制作技術の継承に取り組んでいる。職人が高齢化して作り手が途絶える可能性があるため、地元30～50代が実物大を試作中。保存会の中道勇会長(81)は「若手が覚えてくれれば、1千年近いといわれる伝統を、あと30年はつなげられる」と話している。

「弥五郎どんが起きろっ」。毎年11月3日に開かれる祭りのハイライトが弥五郎どんの浜下りだ。身長4メートル85センチの弥五郎どんが高台にある岩川八幡神社から岩川の街に下り、地元の小學生に引かれて練り歩く。

設計図はなし

弥五郎どんの体は竹でできている。台車に乗せるとはいえ、巨大な

構造物の弥五郎どんを引っ張って移動させるには丈夫で軽くなければならないからだ。

1992年以降、霧島市福山の竹職人福丸實さん(74)が一手に制作を担っている。設計図は少ない。さらに、4年に一度作り替える習わしで、実際の作業を見る機会も少ない。

このため保存会は、将来に向け技術を受け継ぐ必要があるとして2010年に身長2メートルの子弥五郎を制作、12年には実物の作業を動画に記録した。今年、制作の担い手として地元の商工会青年部や勤務店に勤める4人に白羽の矢を立て、実物の試作に取りかかった。

制作は材料の竹の確保から始まる。水分が少ない秋から冬の間に斬っておいた竹を裂いて「ヘツ」や「ゴ」と呼ばれる長さ6・5メートルの竹ひごを100本以上作る。編み目が六角形となる竹かごの要領で、直径約1・1メートルになるように編み上げ、竹の輪で補強しながら高さ3メートル超の胴体を作製。胴体と同様に竹で編んだ頭部や足、腕をつなげれば完成だ。

作業は、子弥五郎作りの経験がある保存会の中道会長、山元正弘理事(75)らが指導し、2月から5月初めまでの計10日間ほど、約2時間ずつ行った。

担い手の中迫浩志さん(52)は「竹を割ってヘゴをとるのに特に技術がいる。均一に編むのも簡単ではない」と話す。動画に記録された福丸さんの作業は、刃物を使って竹を自在に加工し、正確でスピードも速い。牧田正行さん(39)も「節を取って竹を自在に見えろが相当難しい」。

竹を真っすぐ割り、節を取るために、電動工具も使うなどして試行錯誤し、実物に近い形が出来上がった。山元さんは「始めたばかりにしてはよくできた」と手応えを感じている。竹下広さん(35)は「人数をかけてようやくできた。みんなで担っていかないと」と大変さを実感する。

■伝統の竹細工

昭和半ばごろまで、祭りの日には岩川の街に竹製品の露店が連なり、シヨケ、バラ、ミ、テゴ、シヨイカゴなど生活用品や農具が並んだという。地域に作り手も多かった。

民俗学者の川野和昭さん(65)は「霧島市霧島田口は「六つ目編みは縄文時代からある技術で、軽くていくらかでも大きくできる。近代以前から続く巨大な弥五郎どん文化は、地域に竹細工の技術があったからこそ生まれた」と指摘する。

竹職人に困らない時代には、威厳を保つため「竹でできていることを話すとおなか痛くなる」と地域の子どもは教えられてきた。そのため、弥五郎どんの構造についての関心は薄かったという。

ところが、竹細工の需要が減った今では、職人が激減。福丸さんでさえ、最近注文があれば竹ザルを作る程度。弥五郎どん制作の技術継承は、南九州の竹の文化を保存することにもつながる。

担い手の川野洋一さん(48)は「子どもどころがあった行事を支える一員になれてうれしい。やらないうけないという気持ち」と話す。農繁期で多忙なため作業は一時中断しているが、秋からは福丸さんの指導を仰ぐ予定だ。

◇街を練り歩く弥五郎どん 2014年11月3日、曾於市大隅町岩川

今年4月に竹を編んで弥五郎どんの体を作る地元の青年ら

平成27年11月1日 『南日本新聞』

○3日弥五郎どん祭り「浜下り」は午後1時開始 曾於市・岩川八幡神社周辺

弥五郎どんの体は竹でできている。台車に乗せるとはいえ、巨大な

構造物の弥五郎どんを引っ張って移動させるには丈夫で軽くなければ

ならないからだ。

1992年以降、霧島市福山の竹職人福丸實さん(74)が一手に制作

を担っている。設計図は少ない。さらに、4年に一度作り替える習わし

で、実際の作業を見る機会も少ない。

このため保存会は、将来に向け技術を受け継ぐ必要があるとして

鹿兒島県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りは11月3日、曾於市大隅町の岩川八幡神社周辺であった。身長4.85メートルの巨人、弥五郎どんが練り歩く「浜下り」は午後1時に神社を出発し約2時間て戻る。祭りは午前1時のふれ太鼓でスタート。同4時ごろに組み立てを終えた弥五郎どんが起き上がる。境内では豚汁が振る舞われる。午前9時と10時半に大隅弥五郎太鼓が奉納。市ハレドは11時15分から。岩川小学校で武道大会、大隅文化会館ではのど自慢、神園さやかさんのショーがある。午前8時午後5時は神社周辺は歩行者天国になるほか、浜下りに伴う交通規制もある。

平成27年11月4日『南日本新聞』

○弥五郎どん岩川高に別れ、来春閉校、浜下りに立ち寄り
鹿兒島県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺であった。身の丈4.85メートルの弥五郎どんが練り歩く浜下りを見ようと、大勢の見物客が沿道に埋め街は活気づいた。本年度末で閉校する岩川高校に立ち寄り、同高の歴史に最後の足跡を残し、別れを告げた。

祭りが最高潮になる浜下りでは、地元の小5年男子に引つ張られてかっ歩。鳥居や高架橋をくぐる見せ場では歓声が沸いた。途中、通常のコースを外れ岩川高校内に入ると、大勢の生徒やOB、教職員が集まり、校舎を背に弥五郎どんと記念撮影。母校の思い出をあらためて胸に刻んだ。

平成27年11月17日『南日本新聞』

○弥五郎の古里守る心育てる 授業で学び「祭り」に参加 児童減り担い手不足懸念
毎年11月3日、伝説の巨人が降臨する「弥五郎どん祭り」の舞台として知られる曾於市大隅の岩川小学校区。同校は4年生以降の3年間、授業に弥五郎どんに関連したカリキュラムを取り入れるなど、祭りの次世代育成に重要な役割を果たしてきた。一方、市町村合併や県出先機関縮小などの影響で、児童数は10年前の3割減に。祭りの中核を担う人材の将来的な不足が顕在化している。

「わっしょい、わっしょい」。今年3日、白鉢巻と茶色の法被姿の岩川小4年の男女児童41人が元気な歓声とともに、伝説の巨人を引つ張って、岩川のメインストリートを練り歩いた。ただし、巨人の大きさは、台座を含め約3メートル。6メートルある本物の半分程度で、地元では「子弥五郎」と呼ばれている。子弥五郎を引く児童の姿は、本番前であるパレードの名物として親しまれている。

4年生の黒崎楓夏さん(10)は、「岩川小児童だけが参加できる行事。この日を楽しみにしてきた。見物人の注目も集められて楽しかった」と、額の汗を拭いた。子弥五郎は毎年、体験授業の一環で4年生とその保護者が作る。関係者によると、授業が始まったのは約30年前。900年の歴史を誇る

弥五郎どん祭りは、代々、5年生の男子が、巨人の引き手を務めてきたが、「もった、前から祭りに親しませたい」という当時のPTAの強い意向があった。四半世紀以上前に児童として、今年保護者としてかかわった会社経営、樋渡志郎さん(37)は「伝統ある祭りにかわられることが誇りだった。1年後の本番へ向け憧れが膨らんだ」と振り返る。

5年生は約20年前から同じ「弥五郎どん祭り」がある郡城市山崎の富吉小学校と「弥五郎サミット」と銘打った交流活動を展開。祭りの歴史や、祭りを育んできた地域文化についてより理解を深めている。弥五郎どん祭り実行委員会(65)は「郷土愛に基づいた小学校の3年間の取り組みが祭りの担い手を育ててくれた」と評価する。

一方、「小学校の取り組みだけでは、今後、大掛かりな祭りを維持していかけるか、不安がある」と吐露する。理由は、校区の商工業の衰退とそれに伴う児童数の減少が顕著だからだ。旧大隅町の役場があった岩川小学校区だが、2005年の末吉、財部町の合併に伴い、曾於市役所の支所に。さらに県合同庁舎の段階的縮小も相まって、校区の商工業は大きなダメージを受けた。同時に岩川小は、弥五郎どん祭りに必要な5年生男子児童50人を校区内から確保できなくなり、それ以降、旧大隅町内の小学校から、助っ人、を仰ぐ状況が続く。

平成27年12月13日『南日本新聞』

○「弥五郎3兄弟」地元住民ら交流 都城でフェス
郡城市の山崎勤労福祉センターで6日、南九州大人弥五郎伝説文化フェスティバルが開かれた。山崎勤労福祉センターは、郡城市に伝わる弥五郎どんと3兄弟とされ、それぞれの住民らが交流を楽しんだ。

郡城市の合併10周年などを記念し、初めて山崎に3兄弟がそろった。3兄弟は、雨で日南の三男「弥五郎様」は来られず、曾於の次男は身長2メートルの「小弥五郎どん」が代役を務めた。3市の太鼓チームなどが会場を盛り上げ、子どもらは屋内で山崎の弥五郎どんと小弥五郎どんを引き回し、浜殿下りの気分を味わった。

平成28年9月30日『南日本新聞』

○弥五郎どん着物新調 曾於

毎年11月3日に曾於市大隅である「弥五郎どん祭り」の主役、弥五郎どんが、4年に一度の衣替えを迎え、29日、真新しい着物が完成した。巨体の骨組みに使う竹も同日切り出され、祭りに向け着々と準備が進んだ。

弥五郎どんは高さ4.85メートルの巨人で、祭りでは岩川八幡神社(同市大隅)を出発し、大きな体を揺らしながら街を練り歩く。着物とはかまに使う生地は25反。着物の身丈は3.1メートル、両手を広げた状態では左右の袖口から袖口までは12メートルある。生地は裁断、縫製、アイロン掛けを女性14人が1日3時間ずつ8日かけて完成させた。かつては、二つの地元自治会の女性らが作っていたが、高齢化で4年前の前回衣替えから、大隅地区の民生委員らが担っている。今年は展示用にもう1着作った。

平成28年10月17日『南日本新聞』

○弥五郎どん技術継ぐ 保存会

巨大な弥五郎どんの試作品が、27日から曾於市の大隅文化会館に展示された。弥五郎どん保存会が制作技術を継承するために作ったもので、中迫勇会長(82)は「体も面も見事な出来栄。祭りの時にしか見られない弥五郎どんの迫力を感じてほしい」と話している。

弥五郎どんは身長4.85メートル。本体は編み目が六角形になる竹籠の要領で六つ目に編んであり、4年に1度作り替えられている。竹職人の減少と高齢化に危機感を持った保存会が、後継者確保のため地元青年5人に呼び掛け、試作に取り組んだ。昨年春から月に数回集まり、職人の制作過程を記録した動画を見ながら、竹を裂くところから始めた。

平成28年11月2日『南日本新聞』

○秋の休日・出かけませんか 弥五郎どん祭り

あす、岩川

県無形民俗文化財の弥五郎どん祭りは3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺である。メインの浜下りは午後1時出発。身長4.85メートルの巨人、弥五郎どんが神社を出て約2時間かけて街を練り歩く。

今年4年に1度の作り替えの年。竹で編んだ体や着物を新調した弥五郎どんが登場する。幼児による稚児行列もある。祭りは午前1時のふれ太鼓でスタート。未明の4時ごろに組み立て

長官に答申した。

「大綱引き」は、毎年秋分の日の前日に「川内大綱引保存会」が実施長さ365メートル、重さ7トンの大綱を早朝から編み、夜に約3千人が上方、下方に分かれて市街で引き合う。引き手を邪魔する「押し隊」の攻防は勇ましく、勝つと五穀豊穡、商売繁盛が約束される。都市部で伝わる綱引き行事として貴重という。

「弥五郎どん」は、岩川八幡神社の秋の例大祭で、高さ4・85メートルになる大人形を繰り出して収穫を祝う祭事。「弥五郎どん祭り保存会」が行う。大人形は毎年11月3日、5日に公開され、3日は早朝から社殿内で組み立て、その後起こし、浜下りする。大型化している民俗行事の変遷がうかがえる点が評価された。

答申が認められれば、鹿児島県内の国選択無形民俗文化財は通算24件となる。

◇(表題無し。大綱引きと弥五郎どん祭りの写真)

平成31年3月30日『南日本新聞』
○「弥五郎どん」復興応援 熊本地震のイベントに、遠征へ 保存会が小型版 大綱 復興応援 熊本地震のイベントに、遠征へ 保存会が小型版 大綱 復興応援 熊本地震のイベントに、遠征へ 保存会が小型版 大綱 復興応援

曾於市大隅の岩川八幡神社に伝わる伝説の巨人「弥五郎どん」が30、31の両日、熊本地震からの復興を応援する「九州がつ祭り」に初参加する。高さ4・85メートルの実物の代わりに熊本市へ、遠征する。弥五郎どん保存会製作部がつくった「子弥五郎」メンバー6人が連日作業に当たり、約3週間かけて完成させた。

九州がつ祭りは、熊本地震から1年を前にした2017年3月に初開催。熊本市周辺を舞台に九州各地の祭りが集うイベントで、昨年は2日間、21人が訪れた。火の国YOSAKOIまつりも同時開催され、100を超える団体がパフォーマンスを披露する。

「弥五郎どん」には昨年、オファーがあったが、日程が調整できなかった。今回は都城市から「山之口弥五郎どん祭り」も参加。30日には2体の弥五郎どんが並べて展示されるという。

20日に完成した子弥五郎は台車を含めた高さ約2メートルあり、実物と同じ工程で組み上げられた。九州がつ祭りの学生実行委員3人も16日に曾於市を訪れ、台車の塗装などを手伝った。

製作部長の中迫浩志さん(56)は「弥五郎どんが熊本の復興に役立てばうれしい。祭りのPRにもなる」。学生実行委員の大原みなみさん(21)は「熊本保健科学大学3年、薩摩川内市出身」は「がつ祭り、たくさんの人に見てもらい、熊本と鹿児島を結ぶ深めたい」と話した。

完成した子弥五郎は29日に熊本市入りし、新市街アーケード内で展示される。会場では弥五郎どん祭りの映像も流されるという。

◇完成した「子弥五郎」と製作部メンバー 曾於市大隅の木工房「陽だまり」

令和元年5月14日『南日本新聞』

○国選択無形民俗文化財「弥五郎どん」に選択書 曾於市伝達 曾於市の岩川八幡神社に伝わる「岩川の弥五郎どん」が国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」(国選択無形民俗文化財)になったことを受け、曾於市は7日、弥五郎どん保存会と中迫勇会長(85)に文化庁長官名の選択書を伝達した。

曾於市役所であった伝達式では、五位塚剛市長が「(国指定という)次に向けて頑張ろう」と激励。中迫会長は「弥五郎どんの伝統を継ぎの世代に引き継ぐための大きな後押しになる」と話し、早期の国指定に期待を示した。

「岩川の弥五郎どん」は今年2月に文化審議会から国選択にするよう答申があり、3月28日付で「薩摩川内の大綱引き」とともに選択された。○選択書の伝達を受ける弥五郎どん保存会の中迫勇会長(左)ら 曾於市役所

令和元年8月5日『南日本新聞』
○鹿児島風土記 曾於編① 岩川の弥五郎どん征討された単人首領が 曾於市文化財保護審議会会長 勝目興郎 岩川八幡神社(曾於市大隅町岩川)の豊祭りに、「弥五郎どん」が浜下り巡行する姿は威風堂々として他を圧倒し、同時に親しみ深い感情も与える。その弥五郎どんとは何者なのか。人形でありながら名称を持ち、毎年11月3日のご神幸を先導する祭りの主役でもある。

祭りは、午前1時に触れ太鼓が「弥五郎どんが起きつどー」と街を触れ回り、2時から社殿内で組み立てが始まる。4時には「弥五郎どん起こし」が参集者によつて行われる。その後、いよいよ午後1時に境内を浜下りし街に出る。地元の小學生に引かれて御旅所に至り、4時には神社に戻つていく。

弥五郎どんが、いつ頃から祭りに登場し、どのような役割を担っているかは解明が分かれるところである。記録を見ると、「三国名勝図会」(1843年)に「岩川八幡の弥五郎は、大人弥五郎といひ又武内宿禰なり」といふ。とある。この段階で「身の長け 丈六尺梅染軍衣を着て」とあり、今日と姿はほぼ変わらない。

実は、弥五郎の名称をもつ祭りは他に宮崎県側の2カ所(都城市山之口町、野野八幡と日南市飯肥町・田ノ上八幡)でも行われている。そのうち山之口の弥五郎は「米面を被り、刀大小を佩きたる一丈余の偶人；上古大隅の単人を征討の故事なりといへり」(前掲書)とあり、単人の首領を考えているようである。

南九州は日本の南の辺境に位置し、古代日本の国家形成期には律令体制への編入に際し、抵抗を伴った。「日本書紀」に682年から単人の朝貢が行われ、「続日本紀」に和銅6(713)年の大隅国設置のとき単人の反乱が起こった。さらに養老4(720)年には大隅国守が単人に殺害され、朝廷は大伴旅人を征単人持節大將軍として征討軍を派遣し、単人側は1400人余の死者・捕虜を出して翌年ようやく終息した。

単人の乱(抗戦)に神軍として参加した宇佐八幡(大分)では、単人の犠牲者の怨霊を鎮めるため放生会を行った(「八幡宇佐宮御託宣集」1313年)。

弥五郎どんがなぜ秋祭りに登場するのか。民俗学者柳田国男は「大人彌五郎の御霊といふ思想中に、国魂即ち先住民の代表者ともいふべき大人に対する追懐若しくは同情を包含して居た例」と記述し、注目している。弥五郎どんは、単人の先祖とも言うべき存在としている。

近年、仮面の視点から祭りを見直し、弥五郎面を神主面に分類、領域の邪霊を払い清めるものと提唱されている。

◇見物人が見守る中、浜下りに出掛ける「弥五郎どん」 2018年11月3日、曾於市大隅町岩川

曾於市大隅町岩川に鎮座する岩川八幡神社の秋の例大祭として、毎年11月3日に開かれる。高さ4・85メートルの巨大な竹人形・弥五郎どんが岩川市街地を練り歩く「浜下り」は、壮観。今年3月には国選択無形民俗文化財に選ばれた。

弥五郎どんは大和朝廷に征討された単人首領とも、日本書紀に登場する武内宿禰とも伝わる「伝説の巨人」。祭りは人形作りの開始を告げる触れ太鼓(午前1時)とともに幕を開け、午後1時スタートの浜下りで最高潮を迎える。

神社周辺は歩行者天国となり、毎年10万人規模の観光客でにぎわう。近く岩川小学校校庭などでは武道大会も開かれる。(南日本新聞曾於支局・三宅太郎)

◇巨体を揺らしながら浜下りする弥五郎どん 2018年11月3日、曾於市大隅町岩川

令和元年10月27日『南日本新聞』
○弥五郎どん浜下り かごしまフィルム写真館 岩川八幡神社を出て、街中を悠々と進む弥五郎どんの浜下り。身の丈5メートル近い威容にふれようと参拝者が詰め掛けた

◇1955(昭和30)年11月5日、大隅町

令和元年10月31日『南日本新聞』
○弥五郎どん祭り PRの花車出発 曾於 曾於市大隅で11月3日にある弥五郎どん祭りをPRしながら地域安全を呼び掛ける花車が完成し、30日に曾於警察署で出発式があった。祭り前日まで旧曾於郡(曾於市、志布志市、鹿屋市、大崎町)を巡回。当日の市中パレードにも参加する。

市安全安心協会が2006年からつくっており、今年も地域安全モニター柴勝昭さん(76)「大隅町月野」がトラックを提供した。側面には弥五郎どんや市公認キャラクター「お星人」などが描かれ、交通安全、うそ電話詐欺防止を呼び掛ける標語も掲げている。

式では協会メンバーや習員が見守る中、パトカーに先導されて出発。弥五郎どん首領を響かせながら街頭へ練り出した。

◇弥五郎どん首領を響かせながら出発する花車 30日、曾於警察署

令和元年11月2日『南日本新聞』
あす弥五郎どん祭り 武道大会向けブーケ作り 岩川小 「浜下り」は午後1時から 鹿児島県の無形民俗文化財「弥五郎どん祭り」が3日、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺である。身長4・85メートルの巨人、弥五郎どんの「浜下り」は午後1時に始まり、岩川の町を約3時間練り歩く。祭りは午前1時の触れ太鼓で幕を開け、午前4時ごろに組み上がった弥五郎どんが起き上がる。午前9時と10時半に大隅弥五郎太鼓の奉納演奏。午前11時15分から市中パレードがある。

神社周辺は午前7時、午後5時、歩行者天国となる。浜下りルートは県道志布志福山線は午後1時、岩川市街地周辺で全面通行止めとなる。

岩川小学校校庭で武道大会、大隅文化会館で杜このみさんの歌謡ショー、のど自慢大会なども開かれる。

2日午後6時から前夜祭「どん祭り」が大隅文化会館である。太鼓団体のパフォーマンスのほか、日本神話の解説や女優柴田美保子さんによる朗読劇も披露される。市商工会大隅支所099(482)1432。

◇弥五郎どん祭り交通規制 片平琴美さん(奥)の指導を受けながらビクトリーブーケをつくる岩川小学校児童Ⅱ1日、曾於市大隅

令和元年11月4日 『南日本新聞』

◇弥五郎どん庄巻 曾於、岩川八幡神社
鹿児島県の無形民俗文化財「弥五郎どん祭り」が3日、曾於市大隅の岩川八幡神社であった。身の丈4.85メートルの弥五郎どんが岩川市街地を練り歩く「浜下り」では、伝説の巨人が肩を揺らしながら堂々と進み、沿道に詰め掛けた約10万人の観客を圧倒した。(13面に関連記事)

岩川八幡神社の秋の例祭として毎年開かれ、今年3月には国選択無形民俗文化財に選ばれた。祭りの主人公となる弥五郎どんは大和朝廷に征討された隼人族の首領とも、日本書紀に登場する武内宿禰ともいわれる。

午後1時、大鳥居から梅染めの衣をまとった弥五郎どんが登場すると、観客からどよめきが始まった。見せ場となる高架構くぐりの現場にも大勢の人が集まり、巨体を大きくのけ反らせて通過する姿に歓声と拍手が湧き起こった。

◇多くの見物人が見守る中、浜下りする弥五郎どんⅡ3日午後、曾於市大隅町岩川

令和元年11月4日 『南日本新聞』

◇長男、弥五郎どん勇壮 都城・山之口で祭り
国の選択無形民俗文化財「山之口弥五郎どん祭り」が3日、都城市山之口の野正八幡宮一帯であった。身の丈4メートルの勇壮な弥五郎どんが姿を見せる浜下りは、大勢の見物客でにぎわった。

台車を引く富吉小学校の児童47人は「弥五郎どんに触ってください。1年間健康でいられますよ」と呼び掛けながら、一直線の参道約600メートルを練り歩いた。見物客はおさい銭を納めたあと、麻製の真っ白な着物をまとった御神体の袖や裾を握り無病息災を願った。約1300年前に始まったとされる祭りは、地元で保存会が毎年開催。同様の祭りは曾於市大隅、日南市にもあり、神社の創建順などから山之口弥五郎どんは長男と呼ばれている。

◇子どもたちに引かれ、浜下りする弥五郎どんⅡ3日、都城市山之口

令和元年11月24日 『南日本新聞』

◇弥五郎どん祭り 謎多き巨神 地域の誇り紡ぎ続け 曾於市
「弥五郎どんが起きろー」。地域が寝静まる午前1時すぎ、太鼓に合わせて威勢のいい声が、曾於市大隅町岩川の住宅街に響き渡った。伝統行事「弥五郎どん祭り」を告げる触れ太鼓だ。岩川が1年で最もにぎわう催しは、冷え込みもたえる未明に始まった。

祭りの主役・弥五郎どんは、岩川八幡神社の拝殿で組み立てられる。実行委員会の手配で担い、神聖な作業に普段は陽気な男衆も緊張気味。竹で編んだ胴体に腕を取り付けると黙々と作業を進み、神体の巨大面が厳かに取り付けられると魂が吹き込まれる。
午前3時半すぎ、拝殿から外へ運び出す作業が始まる。狭い出入り口から出すのは至難の業。弥五郎どんは何度も上下左右に巨体を揺らし、足から少しずつ姿を現す。まるで母親の胎内から生まれ出てくる赤子のように、神秘的な光景だ。竹下広一(神幸部長、40)によると「今年は無難だった」。

横たわる弥五郎どんは、集まった住民らの手で引つ張り起こされ、衣装を整える作業が早朝まで続いて完成する。午後1時になると、10万人の見物客が集う「浜下り」が始まり、弥五郎どんは威風堂々と市街地を練り歩く。

岩川八幡神社の例大祭として、毎年11月3日に姿を現す弥五郎どん。太い肩にぎよりとした眼で、身の丈は4.85メートル。うるう年には着物が一新される巨人だが、正体や起源については謎が多い。諸説あるものの、正体は日本書紀に登場する武内宿禰とするものや、大和朝廷にあらがった隼人族の首長といった説が有力だ。起源は神社が創建された1025年とする説はあるが裏付けの史料はなく、最も古いもので江戸時代の文献で確認される。衣装も変遷し、冠をかぶったり、戦後すぐは進駐軍に配慮して刀を差さなかったりした時期もあった。

弥五郎どん祭りは、隼人族の霊を鎮める「放生会」がルーツとされるが、現在では豊作を感謝する側面もある。1988(昭和63)年に県無形民俗文化財に指定。今年3月には国選択無形民俗文化財に選ばれた。地元ではさらなる調査を進め、国指定への機運も高まっている。地域をはじめ多くの人に愛される祭りだが、全国各地の伝統行事と同様に少子化の波にさらされ、担い手不足は大きな課題だ。

もともと神社周辺の集落だけで実施されてきたが、66(昭和41)年に商工会青年部、現在は商工会を含む実行委が執り行う。浜下りの引き手となる小学5年生も神社に隣接する岩川小だけだったが、旧大隅町内の全小学校に呼び掛けるようになった。

祭り存続のために、今後実施方法の議論は避けて通れない。岩川と同様に弥五郎どん祭りを開く、宮崎県の2地域との連携も重要だ。実行委員長津曲芳夫さん(69)は「弥五郎どんは先人が紡いできた地域の誇り。そのおかげで、祭りの日は岩川が一つになれる。これからは消すわけにいかない」と力強く語った。

◇岩川八幡神社の拝殿を出る弥五郎どんⅡ3日午前3時40分、曾於市大隅町岩川 巨体を揺らし、街中をなび歩く弥五郎どんⅡ3日

令和2年8月18日 『南日本新聞』

◇弥五郎どん祭り中止 曾於
弥五郎どん祭り実行委員会は17日、新型コロナウイルス感染防止のため、曾於市大隅の岩川八幡神社周辺で11月3日に予定した弥五郎どん祭りの中止を決めた。中止は昭和天皇の病状悪化で各種行事が自粛された1988年以来。

祭りは岩川八幡神社の秋の例祭に合わせて実施されてきた。竹で編まれた高さ4.85メートルの弥五郎どんが市内を練り歩く「浜下り」は毎年10万人の見物客でにぎわう。県無形民俗文化財指定で、昨年3月には国選択無形民俗文化財に選ばれた。

今年4年ごとに胴体と着物を新調する衣替えの年に当たり、弥五郎どんの組み立ては行かず、津曲芳夫実行委員長(69)は「こういう時期だから中止(無病息災を祈願する)祭りを行わなかったが、安全には代えられない」と判断した」と話した。

令和2年10月21日 『南日本新聞』

◇弥五郎どん「衣替え」4年ぶり、住民ら一丸 曾於・岩川
岩川八幡神社(曾於市)の「弥五郎どん祭り」で主役を務める弥五郎どんは今年、4年ごとに本体と着物を作り替える「衣替え」を迎えた。既に25反の布を使った梅染めの着物は地元女性の手に織り上げられ、神社に奉納。現在は弥五郎どん保存会製作部が竹製骨組みの新

調に取り組んでおり、25日の仮組みに向けて作業を進めている。高さ4.85メートルの弥五郎どんは、毎年11月3日にある祭りのメイン行事「浜下り」で市中を練り歩く。今年も新型コロナウイルス感染予防のため神事のみとなったが、衣替えは慣例通り行われた。

着物の新調は9月中旬に始まり、大隅町中之内の長崎美代子さん(66)ら女性11人が裁断、縫製、アイロン掛けなどを手掛け、9日間かけて完成させた。弥五郎どん用に縦45センチ、横72センチのマスクもこしらえた。

骨組みの材料となる竹は9月下旬に切り出された。中迫浩志さん(57)は大隅町鳴神町Ⅱ製作部員6人が平日夜に集まり、六つ目編みと呼ばれる手法を用いて編み込み作業に精を出す。今回から竹ひご状に裂く機械を導入しており、作業は格段に効率化された。

「これだけ大きいと布も重くて大変な作業になるが、弥五郎どん祭りに携われることがうれし」と長崎さん。中迫さんも「弥五郎どんは岩川の守護神。しっかりとものを作り上げる責任がある」と話し、伝統をつなぐ誇りをにじませた。

令和2年11月4日 『南日本新聞』

◇規模縮小でも堂々浜下り コロナ負けず弥五郎どん 曾於
曾於市大隅の岩川八幡神社で3日、秋の例祭が始まった。新型コロナウイルス感染防止のために関連行事は中止となったが、竹で編まれた弥五郎どんが市中を巡る「浜下り」は規模を大幅に縮小して執り行われた。晴れ渡った秋空の下、今年新調した着物に身を包み、身の丈4.85メートルの巨体が練り歩いた。

同祭りは県無形民俗文化財「弥五郎どん祭り」として知られ、720(養老4年)に起きた隼人の乱を起源に持つとされる。今年4年ごとに実施される「衣替え」があり、住民らが本体と着物を新調した。浜下りは全面中止も検討されたが、実行委員会内で「引き手役となる旧大隅町内の小学5年生男子のためにもやるべきだ」との声が上がり実現。男児46人が大隅弥五郎太鼓に先導されながら神社を出発し、隣接する岩川小学校まで往復した。

弥五郎どん保存会の中迫勇会長(86)は「弥五郎どんは無病息災の神。新型コロナウイルスに負けることなく浜下りができてよかった」と話した。弥五郎どんは例祭は終わる5日午後3時まで、神社境内に展示されている。◇小学生らに引かれ、岩川小学校校庭に到着した弥五郎どんⅡ3日、曾於市大隅

令和2年11月8日 『南日本新聞』

◇「やご助」マスク寄贈 旧大隅町の全小中学生に 弥五郎どん祭り実行委
弥五郎どん祭り実行委員会は、弥五郎どんをモチーフにしたキャラクター「やご助」をプリントしたオリジナルマスクを約千枚つくり、旧大隅町内の全小中学生に贈った。弥五郎どん保存会などと連携した「コロナに負けない!応援プロジェクト」として企画した。

「やご助」はマスク配布に併せて初めてお披露目された。実行委メンバーらが10月下旬、8小中学校を訪れてマスクを贈呈、やご助が感染対策を呼び掛けるチラシも配られた。岩川小学校であった贈呈式では、津曲芳夫実行委員長が「弥五郎どんは無病息災の神様。このマスクを着けて新型コロナウイルスに打ち

勝ってほしい」とあいさつ。各学年代表の6人にマスクを手渡した。6年生の中迫蘭さん「今年は楽しみにしていた弥五郎どん祭りが中止になってさみしく思っていたけど、マスクをもらえてうれしかった。感染しないように気を付けた」と話した。

◇弥五郎どん祭り実行委員会から贈られたマスクを手にする岩川小学校児童Ⅱ曾於市大隅 ①マスクにプリントされている「やご助」

令和2年11月16日『南日本新聞』

○平和見守る「弥五郎どん」 仏人画家が油絵奉納 曾於市大隅 岩川八幡神社

フランス人画家のマークエステル・スキャルシャフイキさん(77)が、曾於市大隅の岩川八幡神社に、弥五郎どんをモチーフにした絵画を奉納した。島国・日本を表す緑、天照大神をイメージした黄、海の青が折り重なるように配置された「大和国」を舞台に、弥五郎どんが天から降り立つ様子が表現されている。

マークエステルさんは元外交官。1970年に初来日した際に日本文化に魅せられて画家に転身し、日本神話をテーマにした絵画を全国の神社に奉納してきた。昨秋の天皇陛下即位を祝う「国民祭典」でも作品が使用されている。

今年3月に都城市で開催された際に曾於市に立ち寄り、弥五郎どんの存在を知った。岩川八幡神社の西留正明宮司(76)から話を聞くうちに創作意欲がわき、10月に20号の油絵として完成させたという。「『ある神である弥五郎どんに見守られ、日本や世界が平和であるように願って描いた』とマークエステルさん。西留宮司は「神社の宝として大事にしていきたい」と話した。

◇弥五郎どんの油絵を奉納したマークエステルさんⅡ曾於市の岩川八幡神社

令和3年2月24日『南日本新聞』

○民俗芸能ピンチ 国・県文化財6割超中止 過疎に追い打ち、継承懸念

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、鹿児島県内の民俗芸能が苦境に陥っている。国・県の無形民俗文化財に指定されている70の芸能や伝統行事のうち、「熊島のトシドン」など6割以上に当たる44件が、本年度は中止されたことが南日本新聞の調べで分かった。例年通り実施できたのはわずか2件にとどまり、一部中止や、規模縮小などの制限付き開催(予定含む)を合わせると、9割以上が影響を受けた危機的な状況が明らかになった。

◇新調した弥五郎どんの骨組みと着物の仮組み作業。祭りは中止されたが、用具などの手入れは続けられているⅡ2020年10月25日、曾於市の岩川八幡神社

令和3年11月4日『南日本新聞』

○「伝統の灯絶やさない」 秋空に堂々弥五郎どん 2年連続祭り縮小 岩川

曾於市大隅の岩川八幡人の例祭りが3日始まり、澄み切った秋空の下、子どもたちに引かれた身丈4・85メートルの弥五郎どんが近くの岩川小学校まで往復した。

新型コロナウイルス感染防止のため、2年続けて関連行事を中止し、浜下りの規模を縮小。校庭で神事を執り行い、参加者全員で1日も早いコロナの収束を願った。

引き手役は旧大隅町の小学校の5年生男子計25人。大隅弥五郎太鼓

の勇壮な音が鳴り響く中、「ワッショイ、ワッショイ」と威勢のいい掛け声掛けながら巨体を引き、無事に大役を果たした。

岩川小の村釘蒼甫君は「コロナ下でも弥五郎どんを引くことができよかった。祭りを受け継いでいきたい」と笑顔。実行委員長の津曲芳夫さん(71)は「伝統の灯を絶やさない」との強い思いで実施した。来年こそ本祭りの復活にこぎつけられれば」と話した。

令和4年8月26日『南日本新聞』

○弥五郎どん祭り3年ぶりに復活 曾於市大隅 岩川八幡神社

曾於市の弥五郎どん祭り実行委員会は25日、新型コロナウイルス感染防止のため2年続けて中止していた祭りを3年ぶりに開催することを決めた。岩川八幡神社の秋の例祭りに合わせて11月2日に前後祭、3日に本祭を実施する。

実行委には各部門の責任者約30人が出席。全国各地で伝統行事が復活していることを踏まえ、コロナ対策を徹底して開催することで一致した。弥五郎どんが市内を練り歩く「浜下り」やパレード、武道大会などが復活する。

同祭りは県の無形民俗文化財。2019年には国選択無形民俗文化財に選ばれた。津曲芳夫実行委員長(71)は「無病息災を祈願するのが弥五郎どん祭り。多くの人の強い思いが開催決定につながった」と話した。

令和4年10月15日『南日本新聞』

○弥五郎どんに歓声 単人で浜下り

地域繁栄を祈る伝統行事「鹿児島神宮単人浜下り」が15日霧島市単人であり、騎馬武者など約400人が秋の単人路を練り歩いた。単人の乱1300年を記念し、都城市と曾於市の弥五郎どん2体も行列や祭りに参加、高さ4メートルの迫力に観客から「大きい」と歓声が上がった。

一行は鹿児島神宮を出発し、単人港近くの八幡屋敷まで約5キロを走った。都城市の弥五郎どんは、単人舞を奉納する単人塚から浜下りの行列に登場。曾於市の弥五郎どんはゴールで待ち構えた。2体が見守る中、八幡屋敷で神賑わいの会場はステージや出店に家族連れらが集まった。

行列を見物しながら歩いた単人中2年橋口とわささんは「知人が甲冑を着ていたりして楽しい。岡山県井原市から娘の家に遊びに来ていた森春恵さん(72)は「弥五郎どんの大きさにびっくり」と笑顔を見せた。

浜下りは「単人の乱」で大和朝廷に制圧された単人族を慰霊するために720年ごろ始まったと伝わる。乱から1300年記念の2020年以降、新型コロナウイルスで規模縮小が続いていたが、3年ぶりに通常の規模で開き、単人族を率いたとされる弥五郎どんを招いた。

◇2体の弥五郎どんが見守る中、神事に臨む浜下り行列の一行Ⅱ15日、霧島市単人

令和4年11月2日『南日本新聞』

○あす弥五郎どん祭り 3年ぶり大隅岩川 きょう音楽劇など前夜祭

県指定無形民俗文化財の弥五郎どん祭りが3日、3年ぶりに曾於市大隅町の岩川八幡神社周辺である。市中を練り歩く浜下りは午後1時

祭りは午前1時の触れ太鼓で開幕。4時ごろに身長4・85メートルの弥五郎どんが起き上がる。8時半と10時15分には大隅弥五郎太鼓の奉納演奏、11時15分からはパレード。旧岩川小学校などで武道大会、大隅文化会館での自慢大会もある。

神社では豚汁の無料配布、野菜即売会、岩川小学校6年生のオリジナル弁当「やごべん」の販売などがある。神社周辺は午前8時〜午後5時、歩行者天国。浜下りルートの県道志布志福山線は午後1〜3時、岩川市街地周辺で全面通行止めとなる。

2日午後6時から前夜祭「どんドン祭り」が大隅文化会館である。太鼓演奏や音楽劇「弥五郎どんフアンタジア」などのほか、NPO法人かごしま探検の会の東川隆太郎さんが「弥五郎どんとは何者か?」と題し講演する。市商工会大隅支所Ⅱ099(482) 1432。

令和4年11月4日『南日本新聞』

○弥五郎どん浜下り勇壮 大隅・岩川八幡神社

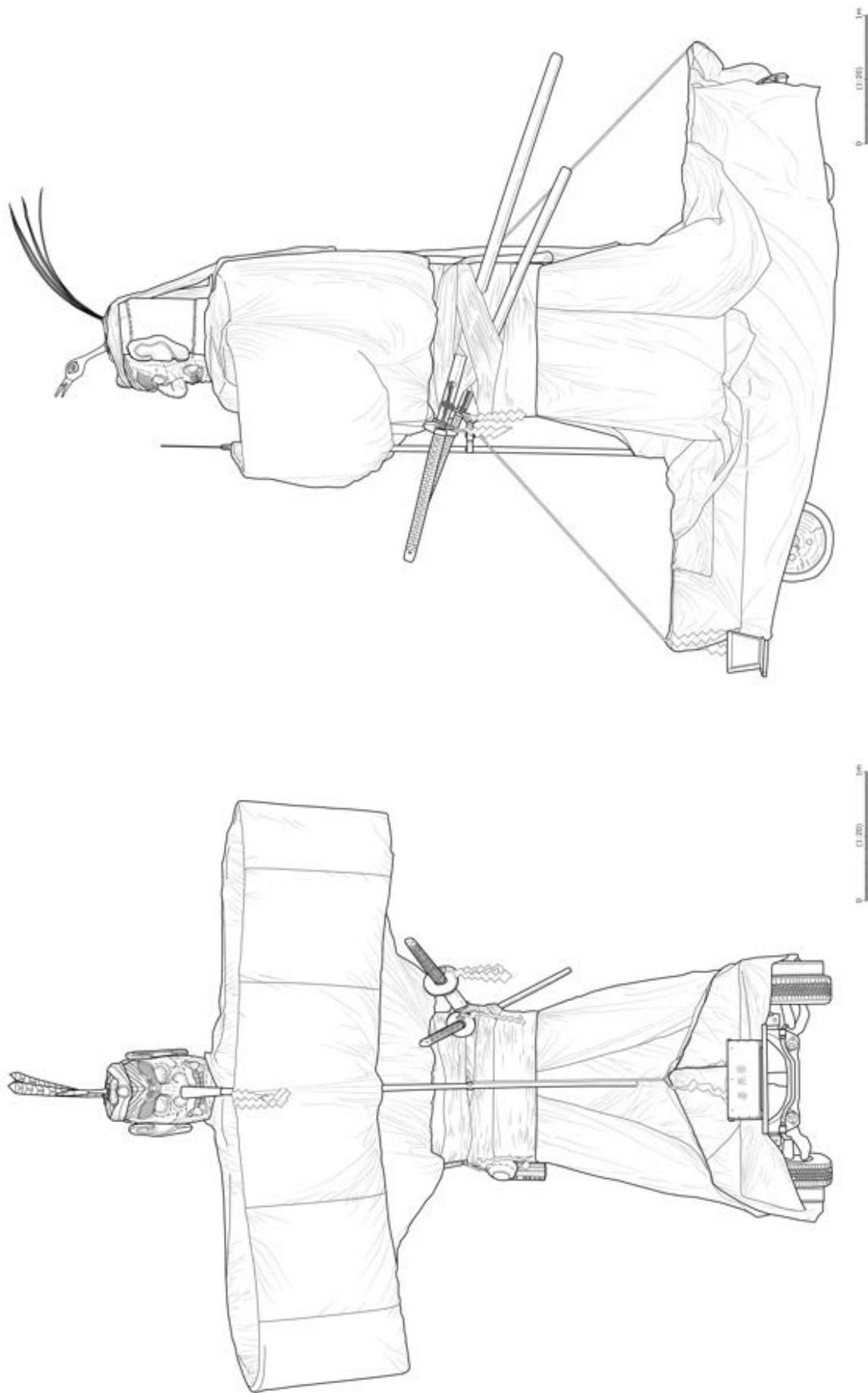
曾於市大隅にある岩川八幡神社の秋の例祭「弥五郎どん祭り」が3日、3年ぶりに開かれた。身丈4・85メートルの大男が市街地を練り歩く勇壮な浜下りに、大勢の観客が沸いた。

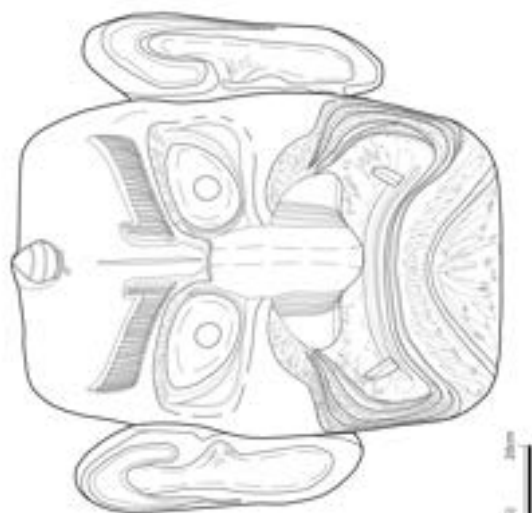
午前1時、触れ太鼓の合図とともに竹で編まれた弥五郎どんの組み立てを開始。午後1時、浜下りが始まり、鳥居をくぐった弥五郎どんが沿道に姿を現すと、待ち構えた人々から歓声が上がった。高架橋の下をくぐる場面では、かたずを飲んで見守った見物人が拍手を送った。同市財部の吉村洋子さん(69)は「岩川のまちが祭り一色に染まった、いい日だった」と楽しんだ。神社周辺では武道大会や芸能大会なども開催。地域活性化に一役買おうと、岩川小学校6年生が業者と協働で開発した弁当「やごべん」は用意した100個が瞬く間に売切れた。

弥五郎どん祭りは県無形民俗文化財で、2019年に国選択無形民俗文化財に選ばれた。毎年開かれてきたが、新型コロナウイルス感染防止のため2年続けて中止となっていた。

第4節 弥五郎どん測量図

弥五郎どん本体（令和2年）



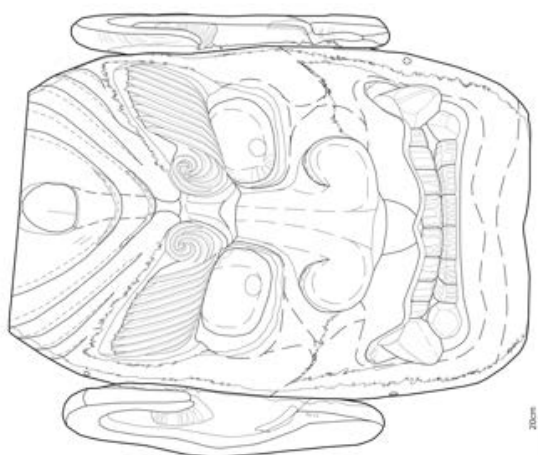


0 (1:1.5) 200mm



0 (1:1.5) 200mm

弥五郎面 (古面)

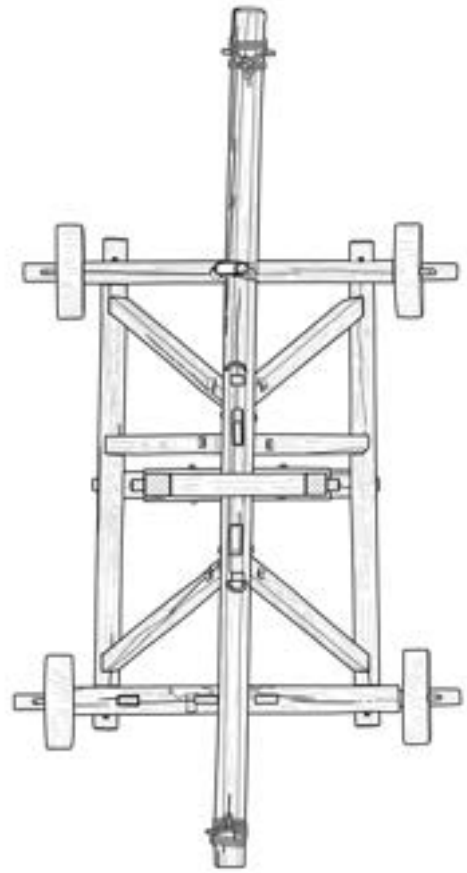
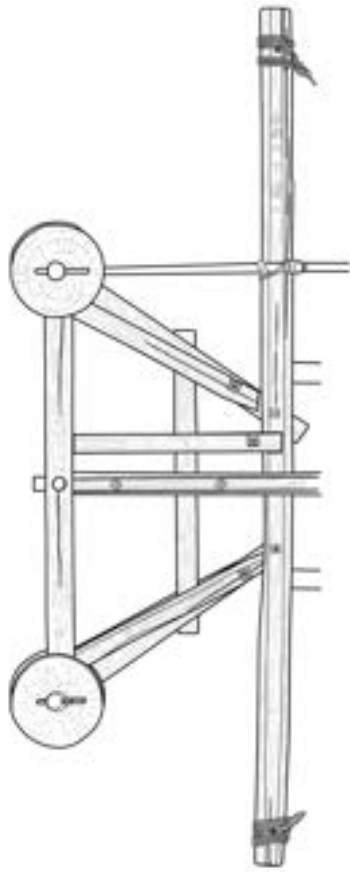


0 (1:1.5) 200mm

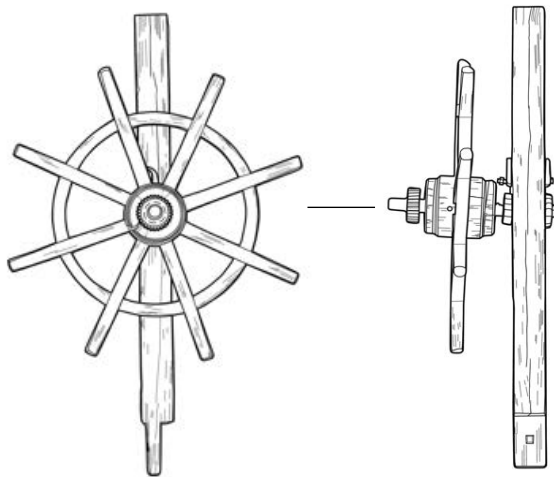


0 (1:1.5) 200mm

弥五郎面 (現在の面)

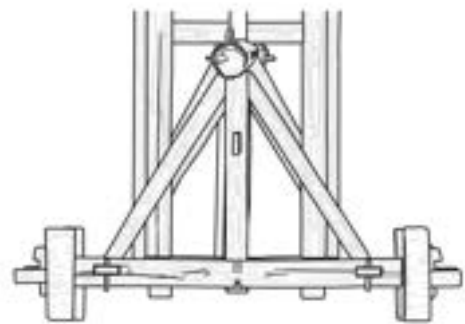


木製台車



0 (1:10) 50cm

齒車装置 (用途不明)



0 (1:20) 5m

木製台車 (昭和 22 年製)

第五節 八幡神社及び弥五郎どん祭り関係年表

和暦	西暦	事項
万寿二年	一〇二五	山城国岩清水八幡宮より勧請（字川崎九一五八）その後兵乱により宝品など奪われ衰退（『三国名勝図会』）
天文四年	一五三五	壇越藤原重忠地頭伴兼豊造立の棟札記録あり。
延宝二年	一六七四	強盗に宝器等が盗まれたので、別当快宥が石清水八幡に参詣。京都で如来刻彫正躰四面守り下る（『神社誌下』）
安永六年	一七七七	別当寺鳩嶺山瑞川寺（快宥開山）は神社と菱田川を挟む位置にあり。
寛政七年	一七九五	五拾町村・中之内村山野見懸日帳（山口文書）に、「十月五日 曇 今日、祭礼二而、見懸方休二而候」と記述あり。
天保十四年	一八四三	『慶藩名勝考』に弥五郎どんの浜下りの記載あり。
明治十四年	一八八一	『三国名勝図会』に弥五郎どんの記載あり。大津十七らにより、岩川八幡神社を改築。（墓股等の一部が現存）
同 四二年	一九〇九	例祭の市場規約（小間物商同業組合で作成）
同 四三年	一九一〇	四月、伊勢神社・藤原神社・笠祇神社・宇佐神社・保食神社を合祀。五月、熊野神社を合祀。
明治期？		旧暦十月五日から、新暦十一月五日となり、六日を後祭りと呼ぶ。
時期不明		牛に曳かせた時代もあるらしい。その後、手
大正三年	一九一四	車（大八車）、台車（ダシゴロ）、四輪車（現在）九月一日、祭祀不便のため旧熊野神社跡に移転（社殿は西南戦争直後の建築のもの）
同 四年	一九一五	浜下りは菱田川と前川の合流点まで約一町であったが、移転後は馬場三文字（浜田文宝堂）まで鳥居より約一〇〇メートルの浜下りであった。
同 五年	一九一六	十一月四日付の鹿兒島新聞に、祭り（彌五郎様市）が今日五日に開催されるとの記事あり。（現在確認される新聞記事では最古）
同 六年	一九一七	この頃、弥五郎面（古面）が修復されたとの証言。
同 十三年	一九二四	月野久保崎発電所開始。岩川市街地に電線が架設されるようになる。
昭和五年	一九三〇	十一月五日付の鹿兒島新聞に、弥五郎どんの写真（澤写真館撮影）が掲載。（同十年にも同様の写真が掲載）
		月野の青山家の日誌に「十一月五日 矢五郎市二行ク」の記述あり。（同七・八・九・十一・十二・十三年十一月五日にも弥五郎の記述あり）
		元服の少年（十三歳）が鎧兜着用で弥五郎どん祭りに出席の慣習（西南戦争後の慣習という）
		十一月五日、馬場・中園青年団後援のもと開催。正午から浜下りを実施、小学校（御旅所）ま

和暦	西暦	事項
同 八年	一九三三	で行き、三時まで休憩。四時から抽選会あり。十一月五日、終日雨が止まず、弥五郎どんを組み立てられず。翌日、弥五郎どんは運動会場の校庭まで浜下りの祭典を実施。十二時過ぎに行き、三時半に神社に戻る。
同 十三年	一九三八	神社の山頂を一丈六尺地下げし、敷地を広くして神社拝殿など新築（中腹の慰霊碑の所に仮神殿を設ける）。十月十四日遷座。（以前の建物は、牧集落の公民館に転用される）
同十五年頃	一九四〇	鳥居建て替え。浜下りの時、鳥居をくぐれないため、弥五郎どんが低くなったという。
同 十八年	一九四三	この頃は弥五郎どん豊祭と呼ばれ、弥五郎起こしの午前一時から参拝客が訪れ、十時には更に多くの人出で賑わった。
太平洋戦争末期		この頃、弥五郎どん一式は、土成公民館に避難していたという話もある。
同 二〇年	一九四五	八月十五日、太平洋戦争終結。
同 二一年	一九四六	五月、宗教学法人令により法人となる。
同 二二年	一九四七	進駐軍の方針により、弥五郎どんの刀は県庁に没収され丸腰となる。 十一月五日付けで製作された印籠が奉納。また、木製台車（大隅文化会館にて現存・展示）が更新される。
同 二三年	一九四八	この頃は弥五郎起こしが午前二時から始まり、笛太鼓の音に合わせて四時頃に起こされる。正午時から浜下りで、馬市場の広場まで出張、夕方神社に引きかえす。
同 二四年	一九四九	弥五郎どん集合写真によると、この頃は獅子舞があつた模様。
同 二六年	一九五一	サンフランシスコ平和条約調印。弥五郎どんは祭り再び帯刀することとなる。馬場部落の氏子青年団が主体で、弥五郎どんは本町通りを電線避けながら練り歩く。なお、この時、後ろに倒すための新しい装置が導入されたよう
同 二七年	一九五二	うで、当時の新聞に「ニユールック」とある。この年(閏年)から宮田呉服店(宮田満志・葉子)が、本体衣装用として大巾二十五反を寄進。(平成二十年まで寄進)
同 二八年	一九五三	この頃浜下りは、神社から畜協広場まで。この年、かつて神社があつた八幡集落は元八幡集落に、縫ノ蘭集落は吉井集落に名称変更する。
		一月、宗教学法人法の公布により、宗教学法人八幡神社となる。
		岩川町商工会(任意組合)発足。商工会が弥五郎どん祭りの協賛行事を仕切るようになる。
		弥五郎本体は、地元馬場の青年団が引き手を担っている。
		浜下りは本町通りまでに変更され、岩川駅前

和暦	西暦	事項
同 二九年	一九五四	の空地（桑原病院跡）に御旅所を設置し、一夜を明かした。しかし、街路の電灯、電話線の切断に莫大な経費が掛かるため沙汰やみとなった。 五日、二時から組み立て、十一時から祭典後、浜下りが行われ、馬場通りから本町通りを練り歩く。六日は武道大会や町制三十周年式典を開催。
同 三〇年	一九五五	浜下りは、本町通りを歩く。六日は町商工会主催の秋祭り行事として、素人相撲大会、のど自慢、郷土舞踊等が催される。
同 三一年	一九五六	衣替えの年。五日、午前二時から弥五郎組立て、五時半頃に起こし、午後一時から浜下り、岩川小学校校庭で二時から神幸祭を執り行う。六日は祭典を行い、十時から岩川高等学校で大隅町体育祭を催す。
同 三三年	一九五八	正午頃、浜下りで岩川小校庭へ。午後一時からミスター弥五郎どのの表彰式あり。午後四時に神社へ。翌日は祭典と体育祭を実施。
同 三四年	一九五九	大隅町商工会主催の商店街連合大売出しが二日から開始。三日、八幡神社にて、ミスター弥五郎どんと準ミスター2名を決定、御神幸に露払いを務める。五日、正午頃に祭典後、浜下り、岩川小学校までのし歩き、午後四時頃神社へ戻る。六日は祭典、午前十時から岩川高等学校で大隅町体育祭開催。

和暦	西暦	事項
同 三五年	一九六〇	九月三十日、商工会法による大隅町商工会発足。 衣替えの年。馬場青壮年団、氏子らにより、祭りが実施。午前十時に祭典、浦安の舞が奉納、浜下りが実施。岩川小学校校庭では、武道大会や写真コンクール、芸能コンクール等が行なわれる。六日は祭典実施。
同 三六年	一九六一	馬場同志会から麓（馬場・森園集落）消防団に引き継がれる。（消防団と青壮年会は重複する）
同 三七年	一九六二	五日、十時から祭典後、浜下り。御旅所である岩川小校庭へ安置。十一時から、市中パレード。校庭では自衛隊や岩川中ブラスバンドの演奏、武道大会、仮設舞台では、演芸大会開催。三時から還幸祭、神社拝殿へ。六日は五穀豊穣の祈願する秋祭り実施、午後三時に収納。
同 三八年	一九六三	十一時から、岩川小校庭まで浜下り。六日、十一時から五穀豊穣祭、三時に本体収納。
同 三九年	一九六四	衣替えの年。五日は十時から祭典、神社境内と岩川小校庭では武道大会や演芸大会。警察署前から神社までの沿道には百三十軒の出店あり。刀剣展示会や盆栽交換会もあり。この年から、大隅町と町商工会の共催で実施される。
同 四〇年	一九六五	例大祭は十時から。岩小校庭では武道大会。岩川駅から神社までは百五十軒ほどの露店。

和暦	西暦	事項
同 四一年	一九六六	商店街から神社まで市中パレード。昼過ぎから浜下り。 麓青壮年会から大隅町商工会青年部に祭りの母体が引き継がれる。 浜下りは岩川小校庭まで。六日も各種催し物。この頃までは、上馬場と東馬場の岩川小五年生の男子が引いていた。
同 四二年	一九六七	明治百年記念も兼ねて岩小校庭で例年にならない盛りだくさんの行事が催される。農機具や竹細工販売やバナナのたき売り等、露店三百店が軒を並べる。午前十時から本殿祭、十一時から岩小まで御神幸（浜下り）、午後三時半から御還幸。午前十時半から、旧劇場跡から岩小会場まで町内パレード。上町通りを規制するため、駐車場は岩川家畜市場か町青果市場に設置。六日も各種奉納行事あり。午後四時に収納。
同 四三年	一九六八	この年から、女性も引き手として参加するようになった。 衣替えの年。浜下りが、神社から市街地までに復活。午前二時から起こしのふれ太鼓、四時に本体組立て、十時から祭典、十一時から浜下り。岩川小校庭で一旦休憩後、午後三時から校庭から岩川市街地経由で、鹿交バス駐車場まで行き、夜は中央公民館の御神幸所で一泊。同日は、武道大会、ナンコ大会、演芸大会、

和暦	西暦	事項
同 四四年	一九六九	オモト展等も開催。六日、午前十時に公民館を出発、神社へ戻る。 五月、大阪万国博出展用に弥五郎面が造られる。古面がモチーフ。泉木工の川上久雄作。 十一月五日、午前五時から弥五郎どん起こし、十時から本殿祭、同時間帯に、鹿交駐車場から岩小校庭まで市中パレード。十一時から、岩川小校庭まで弥五郎どんの浜下り。午後三時から、上馬場―郡畜産連前―町役場前―中心街―鹿交バス駐車場で折り返し、中央公民館（御神幸所）に午後四時到着し、一泊。六日は午前十時に出発、大隅合庁前―上道―上馬場を経て、岩川小の御神幸所へ戻る。万国博出展を記念して、町内の郷土民芸（神牟礼太鼓踊り・広津田の棒踊り・野町そば切り踊り）も初参加。
同 四五年	一九七〇	大阪万国博にて弥五郎どんが展示される（三代目） 商工会青年部により、弥五郎どんの台車を木製四輪車から中型トラックのシャーシに変更し、御神体鉄骨入れを行う。これでハンドルの方向転換出来るようになった。弥五郎どんは台車までの高さ合計六メートルとなった。 十一月五日、午前二時ふれ太鼓、午前五時半に弥五郎どん起こし、約百五十人の子ども達に参加。午前十一時半から浜下り。岩川小の

和暦	西暦	事項
同 四六年	一九七一	第一神幸所へ。三時から、上馬場、役場前、中心街、鹿交駐車場折り返しで、中央公民館の第二神幸所にて一泊。公民館では生花や菊、刀剣の展示。六日は、午前十時出発して、正午に神社に到着。
同 四七年	一九七二	五日、十一時浜下り、二十四人の子どもが引く。中央公民館で一泊。六日は、午後四時に神社に収納。(例年通り)
同 四八年	一九七三	衣替えの年。五日、十一時浜下りし、一泊。六日は十時に出発、午後三時から解体収納。(例年通り) 臨時列車も運行。 十二月、商工会は神社側に、祭りを祝日の文化の日に変更して欲しいとの要望書を出す。 七月、日程変更について協議の結果、十一月三日～五日にかけて実施することに決定する。 十一月三日、午前二時から組立て。同五時から起こし、三十人の子どもが綱を引く。同十時から本殿祭、午後一時から浜下り、岩川小(第一神幸所)へ。午後二時から岩川小を出発、中園・河原・高校下を通り、鹿交駐車場折り返し、中央公民館(第二神幸所)で休憩後、同四時には八幡神社に奉納される。また午前九時から岩川小校庭で武道大会、公民館で午後六時から演芸大会等あり。四日は、県警音楽隊、国分自衛隊、岩川小鼓笛隊等のパレードや岩川小校庭で神幸礼太鼓踊りや月野の棒

和暦	西暦	事項
同 四九年	一九七四	踊り等の郷土民芸大会。五日は例大祭。なお、三日～五日まで公民館では各種展示会。
同 五〇年	一九七五	三日、浜下りまでは昨年同様だが、中央公民館で一泊する。四日、午前十時に出発、十一時半には神社へ還奉。中心街ではパレード実施。特設舞台では演芸大会、郷土芸能も披露。五日は、八幡神社の大祭。
同 五一年	一九七六	五日は、八幡神社の大祭。 三日、十時から本殿祭(神楽など奉納)。午後二時から浜下りで岩川小校庭へ、同四時から中園・河原経由で本町通り、鹿交駐車場折り返しで、中央公民館で一泊。四日、十時に出発。馬場の旧道を通り、神社へ。五日に例大祭が行われ、午後三時に弥五郎どんは解体される。この三日間に、武道大会、演芸大会、町文化祭が開催。
同 五二年	一九七七	この頃、親子三代で弥五郎どんを引いたとの証言あり。馬場在住の祖父・父・岩小五年生女子。 衣替えの年。三日、弥五郎どんは境内に安置。武道大会等を開催。四日、午前十時、浜下り。市街地を練り歩き、十一時半頃、中央公民館で約二時間休憩。五日、例祭。 三月、大阪の国立民族学博物館出展用の弥五郎面製作。古面がモチーフ。泉木工の川上久雄作。 八月、川上久雄により弥五郎面(古面)修復。

和暦	西暦	事項
同 五三年	一九七八	十一月三日、国立民族学博物館開館。「日本の祭り」コーナーに弥五郎どん（四代目）が展示される。 三日、浜下りで町を練り歩く。宿泊はせず。四日も特段行事は無し。五日に大祭。 三日、午前二時から子ども達によるふれ太鼓。午後一時から浜下り。合庁前から神社までの帰路は、歩行者天国で、露天商も並び身動き取れないほどであった。 衣替えの年。 町商工会青年部が主体となり、弥五郎太鼓が創設される。 三日、岩川小四年百五人が、子弥五郎三体を制作し、午前十一時の市中パレードに初参加。 三月二三日、岩川小校庭に、同校の教育のシンボルとして石碑「弥五郎どんのごつ」建立。 町民投票でミスター弥五郎とミス秋祭り三人を選ぶ。（以降、ミスター弥五郎は、現在まで続く。コロナ禍の令和二～三年は中止） 三月、岩川高架橋完成。 衣替えの年。町制三十周年と町文化会館の落成の年でもあり、盛大に開催された。浜下りでは、国鉄岩川駅開業六十年を祝し、同駅も訪ねた。
同 五七年	一九八二	
同 五五年	一九八〇	
同 五八年	一九八三	
同 六一年	一九八六	九月、大隅町郷土館（現在、弥五郎伝説の里まつり館）展示用に弥五郎面製作。明治期の

和暦	西暦	事項
同 六三年	一九八八	面がモチーフ。泉木工の川上久雄作。 十月、弥五郎どんと弥五郎太鼓が大阪御堂筋パレードに出場。（二回目） 三月二三日、『大隅町 岩川八幡神社の弥五郎どん祭り』として、鹿児島県無形民俗文化財に指定。 県指定を契機に「弥五郎講」が設立。 衣替えの年。 天皇陛下の御病気を配慮して、祭りを中止。 弥五郎どん組立てと神事のみ実施。五日、三時に解体。 九月、明治期の弥五郎面化粧直し。塗師は上原孝二。 十月、飫肥城下祭りに出場。山之口・飫肥と三体揃い踏み。 十一月二日、前夜祭が午後六時から町文化会館前広場にて初開催（同祭り前夜祭実行委員会）。県内太鼓競演、郷土芸能等が披露、イベント出展用の弥五郎どんも公開される。 この年まで浜下り（午後二時開始）は、はじめに岩川小学校校庭に寄っていた。 七月十七日、スペインバルセロナの「巨人万国博」に弥五郎どんが出場。 十一月二日、前夜祭が町文化会館で開催。 衣替えの年。三日、浜下りは午前十時からに変更される。岩川小五年の児童約五十人が綱
同 四年	一九九二	
平成 二年	一九九〇	
平成 三年	一九九一	

和暦	西暦	事項
同 五年	一九九三	を引く。 七月、北九州市わっしょい百万国夏祭り参加。 八月、都城盆地祭りで弥五郎三体揃い踏み。 十月、大阪御堂筋パレード参加。(二回目) 十一月二日、前夜祭「どんどん祭り」が町文 化会館で開催。
同 六年	一九九四	三重祭り博(三重県)へ三カ月出展。 小林秋祭り(小林市)パレード参加。
同 七年	一九九五	十月、大阪御堂筋パレード参加。(三回目) 町制四十周年を記念に弥五郎どんの歌が作ら れる。通称「弥五郎音頭」。
同 八年	一九九六	三月、『創作やごろう物語』刊行。 四月、道の駅おすすみ弥五郎伝説の里(弥五 郎どん銅像・弥五郎まつり館)開園。 衣替えの年。
同 九年	一九九七	八月、町内小学五年生による「子弥五郎塾」と、 山之口町の富吉小学校五・六年生との交流が始 まる。のちに「弥五郎サミット交流会」へ展開。 三月、イベント用として弥五郎面製作。明治 期の面がモチーフ。泉木工の川上久雄作。 四月、世界帆船祭り(鹿児島市)に参加。 十一月、韓国での東洋三国太鼓祭りに弥五郎 太鼓参加。
同 十年	一九九八	九月、かごしまふるさと祭りに出演。 十月、大阪御堂筋パレード参加。(四回目)
同 十一年	一九九九	浜下りの引き手が、岩川小五年男子から大隅

和暦	西暦	事項
同 十二年	二〇〇〇	町内の全小学校五年生男子に変更される。 八月、北海道日本の祭り(旭川市)パレード 参加。
同 十三年	二〇〇一	衣替えの年。十一月三日、浜下りが午後一時 からに変更される。(この行程が現在まで続い ている)
同 十六年	二〇〇四	四月二二日、弥五郎伝説の里オープン五周年 記念で、弥五郎三体揃い踏み。大隅町では初 の揃い踏み。 九州新幹線開業イベント(鹿児島市)パレ ード参加。
同 十七年	二〇〇五	十月十日、大阪御堂筋パレード参加。(五回目) 台車更新。 末吉町・財部町・大隅町が合併し、曾於市が 誕生する。
同 二〇年	二〇〇八	平成四年から、浜下りの引き手は岩川小五年 生だったが、旧大隅町内の五年生に変更。 衣替えの年。台車が更新される。 五月十七日、東京おはら祭り(明治神宮参道) パレード参加。弥五郎太鼓演奏。翌日、渋谷 道玄坂おはら祭りパレード参加。 十月二五日、ねんりんピック鹿児島二〇〇八 パレード参加。弥五郎太鼓も演奏。
同 二二年	二〇一〇	一月、技術継承のための子弥五郎や孫弥五郎 の製作を試みる。 三月十四日、東九州自動車道曾於弥五郎イン

和暦	西暦	事項
同 二八年	二〇一六	ターチエンジ開通記念に、弥五郎どんと弥五郎太鼓が参加。
同 二七年	二〇一五	四月、子弥五郎(三分の一)五体完成。八幡神社・市役所・商工会などに展示。
同 二五年	二〇一三	八月二十日、「弥五郎どん保存会」設立。
		二月二十七日、第十一回地域伝統芸能まつり(東京NHKホール)に参加。
		三月、『大隅「岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」調査報告書』刊行。
		八幡神社社務所が改築。
同 二四年	二〇一二	弥五郎どんの大傘が補修。巫女舞が復活。
		八月、岩川小六年生と富吉小五・六年生で、第十七回弥五郎サミット交流会が開催される。
		十月二十九日、宮崎神宮大祭「神武さま」にて、弥五郎三体揃い踏み。
		衣替えの年。これまで着物は、東馬場と上馬場両集落の女性が上着と袴を交互に担当していたが、高齢化で作業困難となり、今回から町内から縫い子(十六名。うち経験者は三名)を集めて製作する。
		十月二十六日、宮崎神宮大祭「神武さま」にて、弥五郎どんが参加。
		都城市山之口町で南九州大人彌五郎伝説文化交流フェスティバル開催。弥五郎三体揃い踏みの予定であったが、雨のため実現せず。
		衣替えの年。これまで本体は竹細工職人とそ

和暦	西暦	事項
同 二九年	二〇一七	の妻で製作していたが、高齢のため引退、今回から、弥五郎どん保存会の製作部のメンバーが技術を継承、製作した。
同 三一年	二〇一九	十月二十七日、製作部による試作の弥五郎どんを大隅文化会館に展示。面は個人が製作したものを、台車は昭和初期に実際に使用していたものを使用。通称「名代弥五郎どん」。
同 二九年	二〇一七	弥五郎どんの大傘を修復。
同 三一年	二〇一九	三月二十八日、『岩川の弥五郎どん』が記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択される。
令和 二年	二〇二〇	衣替えの年。新型コロナウイルスの影響で、祭りは中止。神事のみ実施。なお、三日八時から、小学五年生の記念のための浜下りを、岩川小学校校庭まで実施。
同 三年	二〇二一	新型コロナウイルスの影響で、二年連続祭りは中止。神事のみ実施。昨年同様、小学五年生のための記念の浜下りは実施。
同 四年	二〇二二	三年ぶりに祭りが通常開催。

記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

岩川の弥五郎どん調査報告書

発行日 令和5年3月15日

編集 岩川の弥五郎どん調査委員会

発行 鹿児島県曾於市教育委員会

〒899-8692

鹿児島県曾於市末吉町二之方1980番地

印刷 株式会社 新生社印刷



鹿児島県 曾於市